
ゼロクエスト ～第2部 異なる者

鈴代まお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロクエスト 第2部 異なる者

【Nコード】

N8376T

【作者名】

鈴代まお

【あらすじ】

極度に方向音痴な精霊術士。美形だが何処かがズレてる剣士。常に唄いながら喋る吟遊詩人。ひよんなことから一緒に旅をしている3人が、道中の村で、思わぬ足止めを食らうことになってしまった。さらに何故か命を狙われるはめになり、それを助けた術士が彼女たちに、ある依頼をしてくる。※異世界冒険ファンタジーです。「第1部」の続きですが、これだけでも問題なくお読みいただけます。

プロローグ（前書き）

●前書き●

この話は「第1部 旅立ち」の続編ですが、それを読まなくても問題のないように書きました。

プロローグ

その日彼女は、アクニカ村へ向かっていた。

魔物が集まり始め、近々討伐隊も編制されるという噂が近隣町のギルドを中心に流れていたのだ。

アクニカ村は、ほんの数日前に通った村だった。故に彼女としてはまた引き返すことになってしまいうのだが、魔物ハンターという職業柄もあり、それに参加しないわけがなかった。賞金首がごく稀に紛れ込んでいる可能性もあったからだ。

それにこういった場所へは、他のハンターも多数参加する。

恐らくは彼女と顔見知りの同業者もいることだろう。顔見知りであれば、互いの情報交換の場にもなるのだ。

敵が現れたのは、そこへと続く山道を歩いていた時だった。

彼女は魔物との戦闘経験も豊富で、自信もあった。当然のことながら普通に歩いている時でさえも、周囲に注意を払いながら動いている。

だがその時には何の気配もなかった。魔物はおろか、生命そのものまでもが、全く感じられなかったのだ。

「妾^{わらわ}の術を受けてもなお、意識が保てるとはな。そこは褒めてやるぞ」

相手のほうが、血のように艶やかな唇を先に開いた。同時に双眸にある真紅の瞳が、一瞬の煌めきを放ったようにも見えた。

「やはり特殊な身体を持つ『呪われたモノ』だけのことはある」

彼女は無意識に身体を震わせていた。しかし視線だけは微動だにせず、直ぐに口端を上げる。

「……成る程な。貴様はあたしのことを知っていて、そのために襲ってきたというわけか」

敵は彼女の殺気に気付いていないはずはなかったが、その表情は全く変わらず、薄笑いを浮かべたままだった。

「自惚れるでない。妾は貴様になど興味はないぞ。……それよりもどうだ、取引をせぬか？」

「取引……だと？」

その言葉を聞いた途端、彼女は右眉を僅かに動かした。

相手は魔物だ。

露出度の高い服を装っており、人間の成人女性に近い容姿もしていたが、角と尾が付いているのは外見上明らかだった。その上プライドが高く、ヒトを常に見下しているような中位クラス以上の魔物。その魔物がこちらに対して「取引」などというものを持ちかけてきた。

「貴様のような輩にこのような取引など、妾としても実に不本意な極みではあるのだが……しかしどうやら、利害が一致しておるようだからな」

「どういう意味だ」

魔物はそれには答えず、薄い笑みを浮かべたままでこちらへゆっくりと近付いてくる。

だが彼女は動くことができなかった。

精神力を根こそぎ奪われでもしたかのように、全身を動かすことができなかった。

残っている気力を振り絞り、辛うじて身体だけは起こしていたのだが、いつ倒れても不思議ではなかったのだ。

魔物は目の前に腰を下ろすと彼女の顎をおもむろに持ち上げる。瞬間、彼女は顔を顰めた。綺麗に磨かれた長い爪が頬に食い込んできたのだ。

よく研がれたそれは皮膚を裂き、傷を付けた。顎を砕くほどの力でその細い指に締め付けられている。

しかし予想に反し、魔物はそのままの体勢で耳許へ唇を近づけた。

「貴様の目的――ゼリユを殺したいのだろうか？」

第1話 道程1（前書き）

第1章 暗殺者（エリス編）

第1話 道程1

ファイア・バル・カノン
「火炎砲弾」

私は敵に火の弾を放つ。と同時に、ディーンも動いていた。

ヴァツサ・ビュル・ボム
「水爆泡撃」

ディーンの放った水泡が、私の火弾に当たると爆発した。辺りは濛々と煙が立ち込めている。

敵——ゴブリンはその煙で完全に囲まれ、怯んだようだった。その場で動きが止まったのだ。

その瞬間、アレックスが透かさずその中へと突っ込んでいった。

徐々に晴れてくる煙の中には佇むアレックスと、小さなオジさんのような容姿をしているゴブリンが数匹ほど地面へ横たわっていた。煙の中は視界が悪く相手の姿は見えないが、それを作る前に相手の位置さえ特定できれば倒すのは容易なことだ。

「取り敢えずこの辺は、これで最後かしら」

私は周囲を見回しながら呟いた。

辺りは暗闇であったが、光属性の灯りを二〜三体ほど点けていたために、この場所だけ少し明るくなっている。

「それにしてもこの辺り、町が近いわりには魔物がやたら多いわね」

魔物というのは大抵が森や洞窟、人間や他の魔物が住まなくなつた廃墟などを好んで根城にする傾向にある。つまりヒトと魔物とでは住処に若干の違いがあり、殆ど重複はしないのだ。

といっても人里へ下りてきては町村を襲撃したり、旅人が街道を歩いていると襲われたり、そういったケースもよく聞く話だった。

そのため、各町村に配置されている王国統轄直属機関『ギルド』が他術士たちと協力し、討伐隊を編成する。そしてそれによって増えた魔物を一掃するのだ。

「そろそろアカニカ村のギルドが、討伐に乗り出す頃なんじゃないか？ この付近で魔物が急に増えだしたという話は、さっきの村でも噂になっていたようだしね」

倒した魔物の処理をしながらそう言ったのは、私と同じ精霊術士のディーンである。

彼はその証でもある外衣^{ローブ}フードを目深に被っており、唯一見えている口元には不気味な笑みを湛えていた。

全身黒ずくめで、一見すると墓守にも見えるその姿は「死体を埋める」という作業も手伝ってか、正に邪悪そのものであった。しかしその下には甘いマスクが隠れており、かなりの美形なのだ。

ディーンと従兄弟である剣士のアレックス。

美形の二人が揃えば、街中の女性たちが振り向かないわけがない。しかし普段のディーンは「このほうが落ち着く」という理由からフードを被ったままで生活しており、この不気味な佇まいのおかげで通行人たちは誰も近寄ってはこなかった。

「それに何故かここ数年で、下位クラスの動きが活発化してきているという噂だ。町や村が襲われる回数も増えてきているらしい。国もその辺りの動向には、警戒しているらしいよ」

表面上の容姿とは正反対の爽やかな口調で、ディーンは続けた言った。

この話は私が故郷の村を離れる時にも、父から聞かされていたこ

とだった。

町村を襲う魔物は大抵、下位クラスである。しかも下位クラスは中位クラス以上には絶対服従だった。

魔物の世界では、弱者が強者に抗うということ を全くしないらしい。つまり下にいる魔物が活発になっているのは、中位クラス以上が何か良からぬ事を企んでいる可能性がある、ということだった。

そのことも念頭に置いて魔物には十分気を付けるようにと、父からは出発する際に口が酸っぱくなるほど注意されていた。

「やっぱりそうなんだ。ウチの村も半年ほど前に襲われたのよね。話に聞けば村が襲われたのは、約五十年振りなんだって」

「その点、我が故郷は安全だな。襲われる心配がない」

辺りを警戒しながら、前を歩いているアレックスが言ってきた。

第2話 道程2

「アレックスたちの村って、そんなに安全な場所にあるの？」

「うむ、山の頂にあるからな。それに『英雄の血族』であり、ウンディーネ（水の精霊）の加護を受けた俺もいる。即ち魔物たちは、由緒正しき我が神聖なる故郷に恐れを成し、襲撃ができないのだ！」

「あー、はいはい」

背中からでも分かるほどの熱気を全身にほとばしらせながら、アレックスは拳を握り締めていつもの熱い口調で語った。

しかし私はそれを軽く受け流していた。アレックスとは付き合いの長いディーンを見習いつつ、この数日で彼の扱い方が多少上手くなったかもしれない。

「でも、襲われにくいっていうのも確かだな。上空から攻撃される心配はあるが、飛行型の魔物というのは滅多に地上へは降りてこない。山頂にある俺たちの村は過去一度も、襲撃を受けたことがないらしいんだ」

「えっ、一度も！？ 近くには『水の社』だってあるんでしょ？」

ディーン言葉に、私は驚いていた。

私が旅に出た当初の目的が『精霊の社』巡礼である。

各精霊「風、地、闇、光、水、火」の祀られている社が各地に点在しており、それらを巡るのが目的なのだ。これは術士の修行方法として最もポピュラーな手段であり、一人前になるための儀式のよなものであった。

『精霊の社』というのは魔物から『生命の樹』を守るために、精霊が人間たちに造らせた結界だと言い伝えられている。生命の樹はこの世の根源であり、古代の魔物たちは何故かこの樹を欲しがった

のだという。

しかしこれらの話は全て伝説。この世にいる殆どの人間たちは私も含め、ただのお伽話としか思っていない。

「今はどの社も警備が厳重らしいけど、昔は絶えず襲撃されていたっていう話を聞いたことがあるわ」

かつて魔物たちは結界を壊すために社を攻撃していたという。各社は何度も破壊されたが、結果的に生命の樹は現れなかったらしい。

「麓にあるフィオス町や山腹にある水の社は、確かに襲撃されていたらしいね。村に保管されている古文書にも、そんな記録が残っていたよ。」

でもウチの村は襲撃されなかったらしい。多分、地形のせいじゃないかとは思うんだが」

「地形？ そんなに襲撃されにくい場所にあるの？」

「複雑に入り組んでいるというか……まあ、実際に行ってみれば分かると思うよ」

ディーンは何故か歯切れの悪い言い方をした。同時に苦笑いも浮かべているように感じられる。

「でもおかげで、家族を安心して村へ置いておけるという利点もあるのだけどね」

「それでディーンは遠い町まで、アレックスを迎えに来ることができたわけね」

これから私たちが向かう彼の故郷には、奥さんと生まれたばかりの娘さんが待っているのだという。

ディーンも昔は巡礼やギルドの仕事をしながら、各地を巡っていたらしい。その途中で奥さんと知り合い、現在は故郷に腰を落ち着けているそうだ。

「今回はリアにどうしてもって、頼まれていたからね。アレックスが村の外へ一人では、あまり出たことがないから心配だったんだろう。」

でも今回だけだ。俺は家族と少しでも離れたくはないし、もう長旅はしないつもりだよ」

「皆さーん、ご苦勞様ですー」

いつもの陽気なエドの唄う声が、前方から聞こえてきた。

「エド、ここは大丈夫だった？」

「勿論ですー。魔物は来ませんでしたよー」

赤々と燃えさかる炎の前に座り込んでいたエドは、持っている小型の楽器^{ハープ}を弾きながら返事をした。

彼はいつも音楽を奏でており、唄いながら会話をしている。両手が塞がっていて楽器が使えない状態でも、常にアカペラで唄いながら喋るという、かなり変わった癖の持ち主なのだ。

私たちはそんなエドをこの場へ残し、別行動で野宿をする準備をしていた。周囲に群がる魔物を退治していたのである。

第3話 迷子対策？

「アクニカ村って、明日のお昼には到着できるのよね。ディーンたちの村までは、あとどれくらいかかるの？」

私はエドが用意してくれた夕食の山菜スープに舌鼓を打ちながら尋ねた。

それにしても毎回思うことだが、彼の作る料理はかなり美味しい。手持ちの保存食と今の時期に生えている食用の野草やキノコ、彼が常に持ち歩いているといういくつかの調味料だけでこんなに美味しい物が作れるとは。

『芸術士』という術士の特性だからなのか、手先が器用なのである。

聞けばエドはキノコの選別もお手の物だという。彼にこんな特技があったことを知り、私は驚いていた。もしかしたら吟遊詩人などではなく、料理人になったほうが良いのではないだろうか。

「フィオス町は森を一つ越えた先にあるから、そこからはかなり近いよ。アクニカ村から歩いて一〜二時間くらいかな。俺たちの村はその先の山を登ったところにあるから、休憩を抜きに考えると、合計一日半弱くらいで到着するはずだよ」

「一日！？ てことは、丸一日も山登りをしなくちゃならないの？」

「ああ。山の高さはそれほどでもないが、多少入り組んだ場所にあるからな。今から覚悟をしておいたほうが良いかもしれない」

昔ハイキング程度でなら学校の行事で山に登ったことはあるのだが、長時間登山はあまり経験したことがなかった。

「もっとも、順調にいければの話だけどね。それでも予定よりは、三日もタイムロスしているわけだし」

「そうですよーエリスさんー。この前のようなことにはならないようにーお願いしますよー」

エドが眉を顰めながら私に言ってくる。

「エリスさんがこの前ーネタシナ町でーはぐれた時のことですよー。あの時には大変だったんですからーあの人混みを一日中、探し回ったんですからねー」

「全くだ。一つ手前の村へ戻っていようとは、流石の俺でも予想できなかったぞ。まさか君がこれほどまでに方向音痴だったとはな」
「う……だからゴメンって、何度も謝っているじゃないのよ。それにあの時には人波に押されて、たまたま戻っちゃっただけじゃない。方向音痴とは全然違うわよ」

責めるような態度のエドとアレックスに対して、私は汗を掻きつつ辛うじて言い訳をした。

だがこれ以上の反論ができないのも事実だった。非難されても仕方がないのは分かっていたからだ。

パーティというのは当然の如く、団体行動が基本だ。一人がその輪を乱せば、他メンバーも道連れになる。運が悪ければ一人のせいで、全滅することだって有り得るのだ。

本当なら輪を乱した者など、即見捨てるのが正解だった。

だが彼らは私を探してくれていたのだ。

あまり強い態度をとることはできなかった。不可抗力とはいえ、私はそれだけの行為をしてしまったのだから。

「エリスさんの方向音痴はー僕も知っていたのでーちゃんと手を繋いでいたはずなんですけどねー。あの混雑の中だったからー思わず手を離してしまったのですー」

ネタシナ町へ到着した時には丁度、国王歓迎パレードの真っ最中

だった。その町には保養所の一つがあるらしく、年一回は訪問するらしい。私たちは運悪く、それに遭遇してしまったのである。

「そこで俺は考えたのだ。方向音痴のエリスと手を繋いでいても、それが完全に外れることのない方法を！」

アレックスはいつもの得意げな態度で、エドに向かって胸を張っていた。

私はその様子を見ながら、心の中でひっそりと溜息を吐く。そもそも「方向音痴」と「手を繋ぐ」という行為は、何の脈絡もない。

「ではエド、手の平を外側に向けて前へ突き出してみてくれ」

「こうですか？」

エドは言われた通りに目の前へ手を突き出した。

「今度はエリス、エドの手に自身の手を重ね合わせるのだ」

「え、私もやるの？」

「うむ、これは君のためでもあるからな。また同じようなことが起きてしまった場合、今度は捜し当てることができるかどうか……」

「はいはい、分かったわよ」

そう言われてしまったら、私には逆らうことができなかった。洩々エドの手に自分の手を重ねる。

「そして互いの指と指の隙間に、その指を一本ずつ絡めるのだ。そうすれば普通に握っている時よりも遥かに、離れ難くなるではないか！」

「た、た、確かに離れないです。これならどんな人混みの中においても、全く外れる心配がありません。アレックスさん、これは世紀の大発見ですよ！！！」

エドは私もろとも腕をブンブン振り回しつつ、アレックスを褒め称えた。分厚い眼鏡に隠れていてその表情はよく分からなかったが、

興奮しているのか、代わりに鼻の穴がいつもより開いている。

（全く……この、アレックス信者めが！）

私は心の中で毒づいたが、口に出しては言わなかった。単に呆れすぎて、喋るのが億劫になっただけである。

恐らくは指の関節が互いにストッパー役となり、外れ難くなっているだけであろう。別に「世紀の大発見」でも何でもない。

「ははは……アレックスは相変わらず、面白いことを考えるな。感心するよ」

私たちの遣り取りを隣で傍観していたディーンは呑気に、爽やかな笑顔を浮かべていた。今は食事中ということもあり、先程まで被っていたフードは脱いでいる。

「しかしその繋ぎ方は」

続けて何かを言おうと口を開きかけたのだが。

「……ああいや……うん、何でもないんだ」

私たちの顔を見るなり急に気が変わったのか、それを止めたようだった。

ディーンが何を言い掛けたのかは、非常に気になるところである。が、疲れの押し寄せてきていた私にはどうでもいいことだった。途中で言うのを止めたということは、どうせ大した内容ではないのだろう。

第4話 いつでも全力

私たちは食事を終えると、後片付けを始めた。

食器や調理器具は、その辺に落ちていた木の枝や落ち葉に私とデインで強化の術をかけ、それらしい物に加工していた。だから使用を終えた物は元の姿に戻してやるだけなので、後片付けは簡単に終わる。旅をする時は食器など、重く嵩張る物を持ち歩かないのは常識だった。

精霊術というのはこういった使い方をすることもあり、日常的に大いに役に立つ術でもある。「一パーティに一人の精霊術士」といわれるくらい、パーティには必ずといっていいほど精霊術士が含まれているのだ。そのため精霊術士を希望する者は、他術士希望者よりも全体的に多いらしい。

しかし一精霊のみを使用する他術士とは違って強力な大技を出せないという欠点もあり、攻撃時には状況に応じて六精霊の能力を上手く使っていかなければならなかった。

「エリス、疲れているんじゃないのかい？ もう休んでもいいよ」
デインがいつものように、優しく私を気遣ってくれた。

「でも、デインたちだって疲れているはずなのに……いつも見張りを二人に任せっきりだなんて、何だか申し訳ないんだけど」

魔物を一度に十数体前後も相手にするのは、少々骨の折れることだった。しかしそれは一緒に戦っているデインとアレックスにも同じ事が言える。

「俺はこういうことには慣れているからな。しかし君たちはまだ旅には不慣れだ。今はじっくり身体を休め、いざという時のために万全の準備をしておくことも大切な修行の一つだよ」

「うむ、ディーンの言うとおりだ。休めるうちに休んでおく。これも修行だっ！」

アレックスは突然勢いよく立ち上がると、何故か拳を天へ振り上げて熱く叫んだ。相変わらず意味の分からないポーズだ。

「けどアレックス、あんた旅にはあまり出たことがないんでしょ？ 確か巡礼にも行っていないという話だし、なのに何でそんなに元気なの？」

私は彼を不思議に思いながら見上げた。あれほど前線で戦っていたというのに、疲れている様子が全くないのだ。

「俺は長旅をしたことはないが山へ籠もり、修行に明け暮れる毎日を送っていた。自己に課せる厳しい鍛練ゆえ、自慢ではないが疲れというものを知らないのだ」

「そんなものかしら」

「ははは……アレックスはこう見えても意外にタフだからな。しかしそろそろ、それも限界に来ているとは思うよ」

ディーンはそう言うなり、立っているアレックスのヒップを下から軽く叩いた。すると彼は私たちの前へ俯せで勢いよく、簡単に倒れ込んでしまったのである。

「な、何故だっ!？」

地面で藻掻きながらも立ち上がれないアレックスと、驚いてその場で固まっている私。しかしディーンは相変わらず、清涼感の漂う顔で私たちを眺めながら微笑んでいる。

「やっぱりアレックスは、かなり無理をしていたようだな。まあ、そんなことだろうとは思っていたけれどね」

「どうということ？」

「通常敵と戦闘に入った場合には、能力をある程度まで押さえつつ、

余力を残して戦わなければならない。余力がなければ戦況を見通す判断能力を鈍らせたり、予想外の敵が出現したとしても、戦力も残されていないという状況に陥ってしまうからね」

ある程度の余裕を持って戦うのは、術士としては当然の行為である。毎回全力で戦っていたら疲れるし、次の戦いにも支障が出る。

「ところがアレックスはその余力——先のことを全く考えないで戦っている。例えばどんな弱い敵にでさえも同様の力を発揮しているのさ。だから戦闘が終わる度に体力のほうは、かなり消耗されているはずなんだ」

「え……つまりアレックスはいつも、どんな弱い敵に対してさえも、同じように手加減なしで戦っているってこと？　でも疲れているようには見えないんだけど」

あまり体力を消耗しているようには感じられなかった。戦闘が終わっても疲れを見せず、いつでも涼しい顔をしていたからだ。

「それは自分が『疲労している』という、自覚がないからさ」
「は？」

「『疲れる』という状態がどういうものなのか、本人は全く理解していないんだよ」

第5話 装備のせい

私はディーンの話に目を丸くしていた。

果たして本当にそういうことがあるのだろうか。自分の疲れている状態が分からないだなんて。

「なあアレックス。もしかして全身が怠^{だる}かったりするんじゃないのか？」

「む？」

ディーンの声で、彼は初めてこちらへ首を巡らせた。その表情から察するに、近くで会話していた私たちの声が聞こえていないようだ。

彼は先程から苦しそうな表情で顔を赤くしながら、何度も起き上がろうと試みていたのである。その額には脂汗まで浮かんでいた。

「確かにいつもより妙に重い感覚はするが……心配はいらぬ。先の戦闘の影響によるものだろうからな。恐らくこれは、装備の調整が必要だという前触れなのかもしれん。

が、しかし！

これしきのこと、俺の根性を持ってすれば、負けることがないっ！
」

気合いを入れるかのように意味不明なことを熱く叫びながら、アレックスは再び上体反らしに挑戦しようとした。しかしディーンが肩に手を掛けて静かにそれを制した。

「だがアレックス、お前は一人じゃない。俺たちは今パーティを組んでいるんだぞ。こういう時にこそ、エドの能力が必要なんじゃないのか？」

「えー？ 僕ですかあー？」

早々と一人で寝袋の準備をしていたエドは突然話を振られ、きょとんとした顔をしている。

「エド、アレックスのためにいつものアレ、かけてやってくれ」

「了解です」

『いつものアレ』というのは、エドが唯一使える体力回復術「アブソープライフ」のことである。但しこの術は『術が効きやすい』体質のアレックスにしか効果がなく、普通の私たちにはエドの使う技は弱すぎて、あまり効力が感じられないのだ。

「流石はエド、改めて君の演奏は素晴らしいと思うぞ！ 心が洗われるようだ。俺はいつも根性で逆境を潜り抜けてきたが、やはり仲間の手助けを借りるというのも良いものだ。お陰で身も心も軽くなったような気がするぞ！」

何故か涙を流しながら、アレックスはエドの演奏に聴き入っていた。

——いつもの光景である。

（毎回毎回流して……飽きないのかしら）

私は呆れつつも、爽やかな表情で二人を見守っているデインに訊いてみた。

「さっきの話だけど、アレックスが『疲れる』という感覚が分からないなんて本当なの？

いくらなんでもそういうのって、自然に分かってくるものなんじゃ

ないの？」

「まあ、普通ならそういった感覚は意識せずとも覚えるものなんだが……何故かアイツはそれを装備のせいだと思い込んでいてね。だから自身で気付かない限りは、納得できないと思うんだよ。特にアイツの場合は他人がいくら口で言っても、聞く耳を持たないだろうしね」

「あーそれは言えるわね」

彼はかなり思い込みが激しい、ということはこの数日間で分かったことである。更に自分の信念を曲げない一面もあった。

何故装備のせいだと思い込んでいるのかは分らないが、今までそう思い込んでいるのなら、他人がいくら否定したとしても聞き入れてはもらえないだろう。

確かに近距離系攻撃を主体とするアレックスの装備は、私の比ではないくらいに重かった。これはこの前、私自身が身をもって体験したことである。

それを常時彼は普段着でも着こなすかのように、身に付けているのだ。例えば定期的な調整が必要だとしても、急に装備の重量が増えるはずはない。

程なくして、エドの演奏が止まった。

「おお、身体が軽くなった。エドすまぬ、礼を言うぞ」

「いえーいつもアレックスさんたちと戦えないのでーこういう時にお役に立ててー光栄ですー」

そう言いながらエドは寝袋の中に潜り込むと、直ぐにいびきをかき始めていた。

これもいつもの光景だった。

彼はここ最近アブソープライフを使用する度に、睡魔が襲ってくるようになったという。ディーンの話では術力の上達に、エドの体力がついていけないのではないかということだった。

確かに最初に出会った頃に比べると、ほんの少しだけだが私もエドの唄で、身体が軽くなるような感覚はしていた。

気のせいかもしれないのだがディーンによれば、この短期間で確実にエドの術効力は上がってきているらしい。そのため彼の身体は急激な成長に追い付けず、休息を求めて睡魔が襲ってくるようになったというのだ。

回復術というのは精霊術の中でも、高度な技である。芸術士のような補助や間接系を中心とした、特殊な術士しか使えないものだ。

まだ私たちの体力を癒すまでには至らないとはいえ、毎日使えば流石にエドの術力はパワーアップしていく。それに比例するかのように精霊術で消費する精神エネルギーも増えるのだが、消費した分とのバランス保全のため自然に体力も奪われる。

身体から大量に使用される精神エネルギーと体力。それらを補うには、ある程度の休息が必要なのだ。

エドの身体はヒトが元来持っている生存本能から、それが「睡眠」へと繋がっているのだろうということだった。精神エネルギーと体力は無限にあるわけではないが、身体を休めさえすればある程度の回復はできるのである。

「では俺が先に見張りへ行ってこよう」
アレックスは傍らに置いてあった長剣を掴むと、すっと立ち上がった。

「それじゃ俺は休ませてもらうよ。交代の時間になったら起こしてくれ」

「了解した」

こうしてこの日は特に何事もなく、暮れていった。

第6話 温泉の村

アクニカ村は山間にある、比較的大きな温泉郷だった。

水の社も近くにあるので巡礼者だけでなく、観光目的の旅行者なども立ち寄ることが多い。そのため、かなり賑わっているという話だった。

翌日の昼過ぎ。道中では魔物数匹程度に襲われただけで、ほぼ予定通りに私たちはアクニカ村へ到着していた。

村の中へ入ると早速私たちは、散歩中らしき飼い犬の歓迎を受けた。

つまり激しく吠えられたのである。

だがいつものことなので気にしない。正確に言えば吠えられたのは、フードを目深に被った姿のディーンだけであるが。

「びええええっ！」

今度は入口付近に立っていた幼い男の子が、彼の姿を見るなり大声で泣き出していた。

側にいた母親らしき女性はその男の子を抱きかかえると、慌てた様子で目を伏せながら私たちの側を足早に立ち去っていった。この異様な格好と全身から醸し出される雰囲気のせいだが、それもいつものことだ。

「そういえばディーンには、赤ちゃんがいるのよね。その子は怖がったりはしないの？」

私はこの前から疑問に思っていたことを、何気なく口にした。年端のいかない子供には必ず怯えられ、泣かれるのである。自分の子供ではどうなのか、何となく気になったのだ。

「そのことなら全く問題ないよ。何故ならウチの子の前では、素顔しか見せていないからね」

相変わらざるの不気味な笑みを口端に浮かべながら答える。当然と言えば当然の答えかもしれない。

「でも普段からこの格好でいるほうが、落ち着くんじゃなかったっけ。だから家でもこんな姿でいるんじゃないの？」

「ははは…まさか。」

家では女の子たちに囲まれる心配がないからね。この姿にならなくても落ち着くことができるよ」

（あ、「落ち着く」って、そういう意味だったのか）

『フードを被る』という行為自体のことかと思っていたが、どうやら私の勘違いだったらしい。

「それにこの姿を一度でも見せてしまったなら、娘には完全に嫌われてしまうよ。そうになったらこの先、俺は生きてはいけないかもしれない。

なんといっても娘は俺の生き甲斐だからな。

やっぱり自分の子供は可愛いんだよな。妻に似ているしさ。

周りの人間は俺のほうが似ていると言うが、俺よりも妻に似ていると思う。何故なら……」

どうやらディーンの連射トークタイムが始まってしまったようだ。彼は家族のことを話し始めると、連射する矢の如く止まらなくなる。この前など、奥さんとの馴れ初めノロケ話をエドと二人で、延々二時間も聞かされてしまったのだ。

「ん？ 何この人の山は」

私はここで、ふと気が付いた。

私たちは大通り付近にまで歩いてきたのだが、その先は人で溢れ、

中心部では更に人集りができていた。

いくら温泉で賑わっているとはいえ、通りの中央付近に人集りができているのはただ事ではない。

「何っ！？　こ、これは……！」

集団を見たアレックスが突然、驚愕の表情を浮かべた。

「エド、今だ！　今こそエリスにアレをつー！」

「了解です」

エドは阿吽^{あうん}の呼吸でそう言うと、私の手をガシッと力強く掴んできた。昨晚アレックスがレクチャーした方法で握ってきたのである。「うむ、これならばもうはぐれることはないだろう」

彼は顎を擦りながら目を細め、私たちの繋いでいる手を満足そうに一人、眺めていた。

「……………」

もう、口を開きたくもない。

「ちょっと失礼」

私たちの横を丁度通り過ぎようとしていた男性を、ディーンが呼び止める。

「！　な……何でしょう」

一般の村人らしい中年男性は彼を見ると、一瞬ビクッと身体を震わせた。そして先程の幼児と同様に、みるみる怯えた表情に変わっていく。

「人が集まっているようだが、この村で何かあるのか？」

「あんた、知らないのかい。これからあの中心にいる騎士様たちが、何か大事なことを発表するらしいんだ」

男性は視線を逸らしながら早口でそれだけを答えると、逃げるように人混みの中へ消えていった。それを見送った後、ディーンは私たちのほうへ顔を向ける。

「どうやら騎士がこの村で、何か重大な発表をするらしいな」

「重大な発表とは何でしょうか。非常に気になります。では早速見に行きましょう」

エドの顔がぱあっと明るく輝いたと思った瞬間、有無を言わず手を繋いだままの私とともに、群衆の中へと突っ込んでいったのである。

「ちょ……っ！ エド！？」

慌てた私の声は喧騒に掻き消され、彼には届いていないようだった。

私は引っ張られたまま、人の波に揉まれている。腕が千切れそうな上に、かなりの息苦しさだ。

悲鳴を上げつつ窒息寸前な状態にまで陥っていた私だったが、急に呼吸が楽になった。気が付けばいつの間にか、人波が途切れている。どうやら最前列に辿り着いたようだ。

私は肩で荒い呼吸を繰り返しながら、乱れた髪と息を整えていた。

頭がグルグルして気持ち悪い……。

このような混雑には慣れていないため、もう既に人に酔ってしまったのかもしれない。

目の前には五、六人程のシルバーの甲冑を着た騎士様たちが、横へ一列に綺麗に整列していた。その中心にいる金鎧を身に纏ったロマンスグレー風の人物には、私にも見覚えがある。

「あれ？ あの方くマクガレー団長ですよ。こんなところにもく遠征しているのですねく」

隣にいるエドが疲れている私とは対照的に、キラキラと顔を輝かせながら言ってきた。

確かにあの見覚えのある角張った顔は、リーヴオン王国第五騎士団のフ란ツ・マクガレー団長である。あの団長がここにいるということは、やはり討伐隊がこの村へ派遣されているということなのか。

それにしては騎士の人数が多いような気がする。

討伐隊の編制時には隊長とく二名の騎士、他はギルドで雇った傭兵や巡礼者などの術士で成り立っているのが一般的だった。しかしここには十名近い人数の騎士たちがいた。何か非常事態でも起こったのだろうか。

「騎士様たちがここに来たということはく一体何の発表をするのでしょうかく」

エドはあからさまに何かを期待している表情をしながら、中心にいるマクガレー団長に熱い視線を向けていた。彼はこの好奇心だけである人混みの中、最前列まで移動してきたのである。

「えー、静粛にー！！！」

しばらくすると、騎士の一人が群衆に向かって大声で制した。周囲のざわめきが、徐々に静かになっていく。それを確認した後、マクガレー団長は一步前へ出てくる。

「私は王国第五騎士団所属、フ란ツ・マクガレーである。現時点よりフィオス町間の街道を、一時的に封鎖することになった」

村中に行き渡るほどの、凜とした声だった。群衆が再びざわめきだす。だがマクガレー団長は構わずに続ける。

「これから説明する！」

その一声で、辺りがしんと静まり返った。

流石は一個小団を束ねるほどの騎士長である。威風堂々とした態度で、民衆を一瞬にして沈黙させたのだ。

第7話 街中で狩る者

「—————ということでは討伐隊参加者は、速やかに申し出るように。以上!」

マクガレー団長は一通り説明を終えると部下を引き連れ、事前に確保しておいたらしい路みちを通してこの場を去っていった。続いてこれを見物していた群衆も、徐々に皆散っていく。

私たちもこの流れに乗り、歩き出していた。

これからギルドへ向かうのだ。

ディーンたちとは既にはぐれてしまったのだが、パーティの待ち合わせ場所といえば大抵ギルドである。彼らもそこへ向かっているはずだった。

先程の団長の話を端的に述べるなら、この界限に下位クラスの魔物が集まってきたので、討伐隊を編制して退治するという。ここまでならよくある話で、私たちの予想通りでもあるのだが。

「モンスター・ミストですか、是非一度は見てみたいものです」

並んで歩いているエドが顔を輝かせていた。

「モンスター・ミストっていうと、魔物を引き寄せる霧のことよね」
この霧が裏手にある山中に現れたせいで、魔物が集まっているらしい。

魔物というのは強い力に引き寄せられる傾向にある。特に下位クラスは本能的に引きつけられるらしく、魔物が集まるのはそれが原因の場合もあるそうだ。

当然モンスター・ミストも例外ではない。

一説によれば魔物が作った結界ではないかとも言われているが、自然発生しているだけかもしれないし、未だ謎が解明されていないかった。

何故なら、誰も内部へは立ち入ることができないからだ。一步足を踏み入れても、必ず外へはじき出されてしまうという話である。それほど頻繁に発生しているわけではなかったが、ここ数年で数件ほどの出現例があり、場所は各地方の社近辺が最も多いそうだ。何故その付近でのみ発生するのか、社とモンスター・ミストとの関連は何か：など、現在でも何処かの調査機関が調べているらしいという噂である。

「でも封鎖って、一体どのくらいの期間になるのかしらね」

「そんなに長くはくれないんじゃないですか？ 聞いた話によるとく大きくても一週間かそのくらいでく霧は消えるらしいですしく」今の私たちには、それに対抗する術はない。精々一時的な対応策として、魔物を周辺の村や町へ近づけさせないようにすることくらいだ。

私は気が付けばいつものように、無意識のうちに左腕を強く掴んでいた。

最近の私は中位、或いは上位クラスの女に付けられた用途不明の刻印を、服の上から手で押さえ付けるのが癖になっている。

その部分が無意識に庇おうとでもしているかのようだった。全く意味のないことだとは分かっているのだが、凄く不安なのも事実だ。

今のところ、この紋様が発動する気配はなかった。

しかし普段あまり考えないようにしていることとはいえ、いつ何時発動するのも分からないのだ。自分の変調を予測できないということは、私にとってはこの上ない恐怖だった。

（一刻も早く、先へ進まないといけないのに……こんなところで足踏みなんかしている暇はないのに）

私にはやるべきことがある。この旅が終わったら故郷で、父とともに村を守るのだ。

私はおもむろに前方を仰ぎ見た。そこには建物の隙間から覗いている、剥き出しの山肌が見えていた。私たちが今日指しているのは、あの場所だった。

目的地は目前、もう麓まで来ているのだ。

「エリスさん、突然立ち止まって、どうかされましたか？」
その声で我に返ると、エドが私の顔を見て首を傾げていた。

「あ……ううん、何でもない」

私が慌てて彼の後についていくとした時、直ぐ脇の建物の陰から、何かが躍り出てくるのが見えた。

瞬間。

ザシュツ。

空を切り裂くような音が聞こえてくる。同時に悲鳴。

それはすぐ目の前だった。傾いていく身体からは飛沫が上がっているのが見える。

私は突然起きたその光景が信じられず、呆然と見ているしかなかった。が、足元に何かがぶつかったので、反射的に下を向いていた。

それは頭部。

仰向けで白目を剥いた男の顔がそこにはあった。切断された首からは血が吹き出し、地面へ広がりとつある。

私はそれを見た途端、自分の意識が何処かへ吹き飛ばされるよう

な感覚がした。気がついた時には尻もちを付き、動けないでいる。
その時点で刻が止まったままの男の顔。地面と垂直に向いている
それが、恨めしそうな表情で虚空を見ていた。

どくん……どくん……。

全身を駆け巡るかのように、鼓動も自然と速くなっていた。自分の
身体なのに自分のものではないような感覚。動かし方を忘れてい
るような気さえする。

尻もちを付いたままの私は、男の頭部から視線を逸らすことがで
きなかった。

だがそれは不意に、宙へと浮かんだ。私も自然とその軌道を追っ
ていたが、よく見れば浮かんでいたのではない。

血に染まった指なし手袋グローブを嵌めた褐色の細い指が、男の髪を乱暴
に掴んでいたのだ。

私は呆然と持ち主をそのまま見上げていた。

その先には、左眼を黒い眼帯で覆っている隻眼の女性がいた。

年齢は二十歳前後くらいだろうか。

線の細い綺麗な顔立ちであるが、私と同じ翠色みどりをした右眼は鋭く、
どこことなく近寄りがたい雰囲気を持っていた。

髪は錆色で短髪。それに服は濃紺の道着。この格好を見れば、彼
女がモンク（格闘術士）だということは一目で分かる。

「まさかこのような場所に、魔物が紛れていたなんて、思わなかつ
たです」

エドののんびりとした声で、私は初めて気が付いた。

モンクの持っている男の顔を改めて見てみると、毛深い顔の中心
に目玉が一つ。切り離された胴体の破れた服の隙間からは、灰色の

翼が覗いている。明らかに人間ではない。

（でもさっきは人間の……そうか、化けていたのね）

先程まで沸騰しそうだった心臓が、徐々に収まっていくのを感じていた。私はようやく深呼吸をし、心を落ち着かせる。

「エリスさん、大丈夫ですか？」　　なんだか顔色が、悪いようですね」

「だ、大丈夫よ。ちょっとビックリしただけだから。……でも魔物、だったのね」

モンクは横たわっている胴体へ歩み寄ると、片腕だけで軽々と担ぎ上げ、周囲へ素早く目を配った。

見物していた群衆たちは刃物のような視線に畏怖したのか、自然と左右へ立ち退いていく。彼女は割れた道筋へ歩みを進めると、何事もなかったかのように颯爽と立ち去っていった。

周囲の野次馬たちはこの一連の行動を、呆気にとられながら見ているだけだった。勿論私もその一部だ。

「エリスさん、立ってください。そろそろ行かないと、日が暮れてしまいますよ。アレックスさんたちも、待ちくたびれているかもしれません」

座り込んだ姿勢のままにいる私にエドは声を掛けてきたが、その場を動くことができなかった。何故なら――。

「エドごめん……腰、抜けた」

第8話　ディーンの意味

私たちは日も暮れかけた頃になって、ようやくギルド前へ辿り着くことができたのだが。

「なんか……凄く混んでいるわね」

「皆さんここで足止めされていますからね、仕方ないです」

狭い屋内には術士たちが、すし詰め状態だった。しかも建物の周りにも人が溢れている。

ただの「足止め」ではない。そのような理由だけで特定の村へ大勢の者が、押し掛けてくるわけではないのだ。

これらの大半は恐らく、討伐隊参加希望者だろう。この付近に魔物が大量発生していることや、今日正式にギルドから発表があるという噂などを聞き付けて、事前に乗り込んできたとも考えられる。

討伐隊に参加するということは、特に傭兵を生業にしている旅人にとっては、路銀を稼ぐ一番の方法でもあるのだ。

「これでは温泉にもくゆったり浸かることができませんね。物凄くく楽しみにしていたのですが」

「あんだ、入る気でいたのね」

「勿論です。折角他所でこの村の温泉マップを手に入れたというのに、非常に残念です」

エドは眉を顰めながら、青いマントの中から一枚の紙切れを取り出して見せた。

「そんなもの、いつのまに!？」

「この村を通るのなら当然のことです。エリスさんは違うのですか？」

「……否定はしないけど」

ここの温泉は疲労回復や神経痛、筋肉・関節痛、打ち身などにも効くらしいと、何処かで聞いたことがある。

「でもそうになると、宿屋の確保も無理そうね」

「街中で野宿ですか」

「うーん、どうかな。もしかしたら野営場所を、ギルドが提供してくれるかもしれないわよ。これだけ村中に術士が溢れていたなら、村民も迷惑だろうしね」

その辺りのことは多分、なんとかなるだろう。今はそれより、デインたちを探すのが先決である。

「これだけ人が多いと、探しようがないわね」

「中へ無理矢理く突っ込んで行きますか」

「いや、それは止めておくわ」

私は即座にその提案を棄却した。この人混みの中でまた、酔いたくはない。

「取り敢えず、この建物の周りでも一周してみる？　もしかしたら中には入っていないくて、外に出ているかもしれないし」

エドが私の提案に軽く賛成すると、私たちは建物の裏手へと回ってみた。

流石に裏の方は正面よりも薄暗かった。日が落ち始めているので、点灯係の精霊術士が疎らにある街灯へ、明かりを灯しに来ていた。

正面よりは人数が減っているようだが、それでも人影は途切れることがなかった。

私たちが辺りを見回しながら丁度角を曲がった時。

「えー？　水の社から来たんですか」

「はっはっはっ、そうとも。なんと俺は、水の精霊ウンディーネの

加護を受けた英雄なのだ!」

「まあ、すっごおーい!!」

「超イケてるうー」

「英雄だなんて、メチャメチャカッコ良すぎですう」

私と同年代くらいの女の子たち十人程が何かを取り囲み、賑やかな声で騒いでいる。私はそっと建物の陰に隠れた。

「エリスさん、アレックスさんがいましたよ。でも何で僕たちこんな所で隠れて見ているのですか?」

「いや、なんだか急に他人のフリをしたくなっちゃって……」

私はモゴモゴと口の中で答えた。

あのような集団は昔から苦手なのだ。それに何となくではあるが、アレックスとパーティを組んでいると思われたくはないような気もした。

「エリス、エド、こんな所で何をしているんだい?」

聞き慣れた声で振り向けば、背後の暗がりから人影がヌツと出てきた。あまりにもそこに溶け込んでいたために、一瞬で心臓が飛び出しそうになった。それが事前にディーンだと分かっている、突然その格好で現れたら誰だって吃驚してしまう。

「あ……えーっと、アレックスを見つけたんだけど」

「おや、女の子たちに囲まれているのか。仕様のない奴だ。人目につかないところへ隠れていると、言っておいたはずなんだがな」

「ディーンさんは、今まで何処へ行ってたのですか?」

「ああ、ちよっとギルドに用事があったからね」

彼はそう言いながらスタスタと、アレックスたちのほうへ近付いていく。

「アレックス」

その声で一斉に振り向いた少女たちはディーンの姿を目にした途端、悲鳴を上げながら脱兎の如く逃げていった。

「ははは…あのコたち、面白いように駆けていくな」

彼女たちの後ろ姿を見ながら彼は不気味な笑み———というか、愉快そうに笑った。

「君たち、遅かったではないか。また迷子になったのかと思っていたぞ」

「その点はお安心を。地図を持っていますし、それにエリスさんともはぐれないように、アレックスさんの仰った通り、しっかりと手を繋いでいましたから」

「うむ。どうやら俺の発想が、功を奏したようだな」

アレックスは顎に手を置いて、ウンウンと満足そうに一人で頷いている。

そんな彼に向かって、ディーンは少し強い口調で咎めるように言った。

「とにかくアレックス、隠れていないと駄目だろ」

「む、何故俺がコソコソと隠れねばならんのだ。胸を張り威厳を保つことこそが、皆から尊敬され愛されるべき真の英雄たるものの姿であり、努めではないのか」

逆に反論するアレックス。続けて何かを言いかけた様子だったが。

「分かった、分かったよ。どうやらお前に言い聞かせようとした俺が、馬鹿だったようだな」

ディーンは降参したかのように肩を竦めると、溜息とともに両手を胸の辺りまで挙げた。それに対して「分かれば良い」とあっさり納得したアレックスは、それ以上何も言わなかった。

やはりこういう場面ではこちら側から折れ、即座に話の幕を下ろすのが効果的なようだ。また一つ、勉強になったような気がする。

「ところでディーンさんはギルドに一体何の用事があったのですか？」

「そのことなんだが、俺はこの村では君たちと別行動をとることにしたよ」

第9話 魔物討伐隊へ

「えっ、何で?？」

「討伐隊への参加を申請してきたんだ」

ディーンはそのために、私たちのパーティからは一時離脱するとう。

「何で討伐隊へ？」

「どうせここで足止めされるんだったら路銀も稼げるし、参加しない手はないだろ」

本当ならば私たちも参加したいところである。しかし少なくとも修行中の私やエドには、まだその力はない。

「討伐って、いつから始まるの？」

「第一陣は、明日早朝から行動を開始するそうさ。俺もいつでも出陣できるように、今からギルドへ詰めなければならない」

「そっか…」

私が不安そうな顔をしていることに気付いたのか、彼は続けて言う。

「騎士や大勢の術士たちがいるこの村は、今は比較的安全な場所だ。余程のことがない限りは、魔物がここへ攻め入ってくる心配はないと思うよ。だから君たちも通行止めが解除されるまでは、ゆっくりと英気を養っておくといい」

ディーンの話を神秘的な顔付きで聞いていたアレックスだったが、ようやくここで口を開いた。

「ならば俺も参加するぞ」

「それはやめたほうがいい」

「却下」

「参加しないほうが〜いいと思います〜」

私たちは直ぐさま口を揃えて、その申し出を撥ね付けた。

「な、何故皆して俺を否定する!?!」

アレックスは私たちの息の合ったコンビネーションに、動揺の色を見せているようだ。

「ハッ、まさかこの前魔王に負けたということで、この戦でも俺が生き残れないと思っっているのか!」

「いやいやいや、そういうのじゃなくて」

「だがそれは心外というものだぞ。」

確かに俺は魔王に負けた。それは男らしく、潔く認めよう。

だからといって、この戦でも生き残れないという保障が何処にあるというのだ。

否。断じて否っ!

そのようなものなど何処にもないのだ。

戦というものは、蓋を開けて見るまでは結果が分からぬ。戦況が変われれば、窮鼠猫を噛むことだってあるのだからな。

約束しよう。俺がこの命に代えても、君たちへの勝利を捧げてみせよう——」

「だから、違うって言ってんでしょーがッ!!!」

どんっ!

私は思わずアレックスを背後から突き飛ばしていた。

「な、何をするのだエリスよ。いきなり非道いではないか」

「あ、ごめんごめん。あんたの話が長くなりそうだったから、つい」
地面で平伏した格好のまま、肩越しから恨めしげな目でこちらを見ているアレックスに対して、私は頭を掻きながら素直に謝った。
彼は人の話を聞こうともせず、訳の分からないことをまた延々と、
熱い口調で語ろうとしていたのだ。途中から我慢ができなくなつて、
つい手が出てしまった。

「くすくすくす…」

ディーンがこちらを見て可笑しそうに笑っている。

「何か私、おかしいことを言った？」

私が困惑気味な視線を向けると、彼は慌てた様子で手を左右に振つてきた。

「ああ、スマン。君はやっぱり少し、リアに似ているなと思ったものだから」

「へ？ 似ている？？」

第10話 アレックスへの説得

「顔が？」と続けようとして止めた。

リアというのはアレックスの妹である。

今回私たちが行動を共にしている理由は、水の社へ行くついでに彼女にも会うためだった。彼らの故郷で考古学者をやっている彼女が、私たちに付けられた刻印のことも何か知っているかもしれないというのだ。

そんな彼女と、年齢が近い^{トシ}ということぐらいしか接点のなさそうな私の、何処が似ているというのか。

しかもアレックスの妹ということは、かなりの美少女に違いないのだ。一度も会ったことはなかったが、似ているのが顔でないことくらいは分かる。

——と、自分で言っていて何だか虚しくなってくるが。

「似ているのはアレックスへの対応の仕方、とかかな。もっともリアの場合は素手じゃなくて、トマホーク（投てき斧）なんだけど」
「ト、トマホーク……?」

トマホークが重量のある武器だということは、私でも知っている。そのようなものを一体、どのようにして使用するというのだろう。それを投げられたら誰でも——例えばアレックスといえども、確実に即死すると思うのだが。

「詳しいことはリアに会えば分かると思うが、そんなことより今は時間がない」

「そうなのだ。何故俺が討伐隊へ参加してはいけないというのだ。英雄たる者、民を守ることこそが義務ではないのか」

私が突き飛ばしたお陰で冷静になれたのか、先程の暴走モードから復活したようだ。ディーンは溜息を吐きながらも、アレックスの問いに答える。

「その理由か……原因はお前自身 능력にある」

「む、どういふことだ？」

「お前が精霊に与えられたという『精霊の加護』さ。それには魔物の術攻撃を防御する能力があるだろ」

『精霊の加護』というのは、対魔族用として選ばれた英雄にのみ精霊が与えた防御能力らしい。

普通なら精霊術士でもない限り防御術は使えない。しかしその能力を得たアレックスは剣士でありながら、術文や精霊石も使用せずに魔物から受ける術攻撃を防御できるのだ。但し物理攻撃は防げないという欠点がある。

そしてこの能力にはもう一つ弱点があった。

「だが逆に人が使う術にはかかりやすい。例え弱い術をかけられた場合でも、他人の倍以上の効力でかかってしまう」

「それは知っているぞ。だから何だというのだ？」

「まだ分からないのか？ 人間の術攻撃をまともに喰らったら、お前は確実に即死なんだぞ」

「何故俺が人に攻撃をされるのだ？ 俺は魔物ではなく同じヒトではないか。恨まれる憶えもないぞ」

「いや、そんな意味じゃない。

討伐隊というのは様々な術士たちが集まった、あまり統率が取れていないと言い難い寄せ集めの集団だ。今回は特に一つの部隊で人数も多く投入されるだろうし、乱戦も予想される。その時に術士の攻撃が、うっかり当たってしまうことだってあるだろ」

「うっかり? ……避ければいいのではないか」

「簡単に避けられればいいが、乱戦時には確実に避けられるとは限らないんだよ。」

お前はまだ経験がないから分からないだろうが、敵に囲まれた場合、皆他人のことなんかを気にしている余裕はないのさ。気を抜いた時点で殺られるからな。」

相手が敵じゃないとしても、誤って味方から攻撃をされてしまうことだってある」

私にもまだそのような経験はない。しかし父からは戦場とはどういうものなのかを、色々と聞かされていたから何となく分かる。

アレックスは顎に手を当てて宙を見詰め、考え込んでいる様子だった。

「誤って? そのようなことがあるのか??」

「皆、自分を守ることには必死だからな。冷静さを欠くことだってあるんだ。」

思い掛けない者に攻撃されたら誰だって、一瞬の判断力が鈍るだろう。流星のお前でもそんな時には、完全に避けられるとは思えないのさ。しかもお前の場合、掠っただけでも即死にはなるだろうし」

(掠っただけで即死?)

ディーンは一見尤もらしいことを言っているようだが、この前の洞窟での出来事を考えれば、掠っただけでは即死にまで到らなかったと思う。私がアレックスに痺れを感じる程度の弱い術をかけた時には、目を覚ましただけで死ぬようなことはなかったし。

しかしエドはこのことに気付いていないのか、追い打ちをかけるように口を挟んだ。

「そうですね、アレックスさん。貴方がここで死んでしまったら一体誰が魔王を倒すというのですか?」

「ま、そういうことだ。この戦いは俺たちを信じ、任せてほしい。」

今お前に死なれたら世界の……いや、この世の森羅万象生きとし生けるもの全てに対しての、莫大な損失になってしまうからな。

この前も言ったように今のお前は、己を鍛え直す時期なんだ。自分が『英雄』だという自覚を持て。それが一番だ」

ディーンの言葉でアレックスは、まだ何かを考え込んでいる様子だったのだが。

「成る程、言いたいことはよく分かった。どうやら俺には、英雄としての自覚が足りなかったようだな。今回は君を信じて身を退こう」
ようやく折れてくれた。

（アレックスを説得するのって、凄く疲れるわ）

私が説得したわけではないが、この遣り取りを見ているだけでかなり疲れてしまった。ディーンはなんて忍耐強いのだろう。尊敬してしまう。

第11話 それぞれの修行

ディーンと別れた私たちは結局朝まで、ギルド裏手付近の外壁に並んで座り込んでいた。

ギルドでは私の予想通り野営場所を提供していたが、それは討伐隊参加者用のもので、私たちのような不参加者は門前払いだったのだ。それで仕方なくこの場所で一夜を明かすことにしたのである。

周囲には私たちのような状況の旅人が、かなりいるようだった。皆一様に膝を抱え、通りの片隅で仮眠していた。

それらの殆どの者は私たちと同じように、水の社へ向かう修行中の旅人なのだろうか。私より明らかに歳の若そうな、弟のソーマと変わらないくらいの子供もいる。

「エリスさん、僕、待っている間に温泉巡りがしたいのですが」
「温泉？ でも昨日は入れないかもって、言ってなかったっけ」

「混雑の予想はされるのですが、でももしかしたら入れるかもしれないので、その可能性にかけてみたいかなと思って」。

それにこの村には、美声効果のある温泉もあるらしいので、どうしても入りたいのです」。
もし良かったらお二人も是非、一緒にどうですか？」

エドが隣で、持っていた温泉マップをひらひらと動かしながら誘ってきた。

「温泉、ねえ……アレックスはどうする？」

私が考え込みながらアレックスへ振ると、今まで瞑想していた彼は静かに目を開けた。

「俺は辞退する」

「え、どうして？」

「今の俺には他に成すべき事がある。このような時にこそ魔王を倒すべく、精神と肉体を鍛えねばならないのだ」

アレックスの言いたいことは何となく理解できた。

私も温泉はかなり魅力的であったが、この間に少しでも自身の鍛練を積んでおきたいと思っていたところだった。

「私も今回はパスするわ。今は温泉でのんびりするより、少しでも力を付けたいから」

「そうですか？それは残念です」

エドは肩を落として名残惜しそうに温泉マップを眺めると、やがてのろのろと懷へ仕舞い込んだ。その表情はいつもと違って暗い。余程この村の温泉を楽しみにしていたのだろうか。

「それにしてもこの村には、美声効果のある温泉があるのね。道理でエドみたいな芸術士を、結構見かけると思ったわ」

今まで通ってきた町村でも見かけることはあったが、すれ違う確率はこれほど高くはなかった。

「そうなのですよ。美声効果のある温泉というのは、世界でも珍しいのです」

エドの話によれば、吟遊詩人の間ではこの温泉は有名ならしい。直接攻撃型の術士とは違う間接系の彼らは、いざという時のために仲間をサポートしなければならない。そしてそのためには常に、万全のコンディションを整えておかねばならないという。

だから彼のような巡礼者は、必ずこの温泉へ立ち寄ることが多いそうだ。

「もしかして芸術士の場合はそういうのも、修行の一環なの？」

「勿論です。ただ温泉へ浸かるだけではないのですよ」。

喉を潰してしまったら、吟遊詩人としての生命いのちも絶たれますし、体

調を整えることもまた鍛練なのです」

世の中には多種多様の術士がいるように、それぞれの修行方法も当然異なる。エドも私たちと同様、修行目的で温泉へ行きたいのだ。私にはそれを止める権利がなかった。

「私たちはいいから、エドだけでも行ってきなさいよ」

「え、いいのですか？」

「うむ、それもまた修行であるのなら、俺も構わないと思うぞ。ゆっくりしてくるといいのだ」

私たちの提案に、エドはしばらく迷っている様子だったが。

「分かりました。アレックスさんやエリスさんがそう言われるのなら、お言葉に甘えさせていただきます」

エドはいつもの陽気な表情へ戻りながら「皆さんとは夕方こちらで落ち合いましょう」と言う、荷物を抱えて人混みの中へと消えていった。

第12話 感じる気配

私とアレックスの向かう先は村の外である。

フィオス町方面の門は封鎖されており、その向こうでは討伐隊が戦っているはずだった。だから反対側——私たちがこの村へ入った道から外へ出るのだ。

昨日はそこから直ぐのところで魔物に遭遇した。その辺りならば修行するには十分だろう。

だが。

「門が閉まってる??」

閉じられた門の両脇には、騎士様が守衛として二人配置されていた。しかしアレックスは構わずに近付いていく。当然直ぐに呼び止められた。

「君たち、近付いてはいかん」

「何故だ」

「モンスター・ミストが出現したせいで魔物が集まってきていると、昨日団長が話していたのを聞かなかったのか?」

「でもそれは反対側なんじゃ?」

疑問に思った私は訊ねてみた。昨日の発表では、フィオス町間だけの街道を封鎖するという話だった。それなのにこの場所も同様に封鎖されるというのはおかしい。

「こちら側からも、魔物が徐々に集まり始めているとの報告がある。それを受けてフィオス町方面だけでなく、この近辺一帯もモンスター・ミストが消えるまでは、一時的に封鎖することになった」

守衛は一旦言葉を区切ると、胡散臭いものを見るような目つきで

私たちを見回した。

「何れにせよ、今外へ出るのは危険だ。デートをするのなら、この中でもできるだろう」

「デ……！」

私はその言葉に絶句した。

私たちはどう見ても術士である。装備を外した普段の格好ならともかく、この姿でそんな侮辱を受けるのは心外だ。

私は反論しようと口を開きかけたのだが、ふとあることに気付いて下に視線を落とした。

先程混雑している温泉街を通った時、「また迷子にならないように」とアレックスが言ってきたのを思い出したのだ。そういえばその時から、手を繋いだままである。

（ん？ あれ？ この繋ぎ方って…）

それを見詰めながらここでまたもや、あることに気が付いた。それは彼が推奨してきた「指の外れにくい繋ぎ方」だったのだが。

（そういえばこの繋ぎ方って、確か別名が……）

！
——カップルつなぎ！？

私は実際にやったことはなかったが、街中で仲睦まじいカップルたちがこんな手の繋ぎ方をしているのを見かけたことがある。かなりウラヤマ……いやいやいや、目に付いていたから憶えている。

そのことに気が付いた私は急に恥ずかしくなって、無理矢理手を

振り解いていた。

「ん？ 突然どうしたのだ？」

「な、な、なんでもない…わよ」

私は思わず動揺してしまった。当然である。

昨日もエドとこのようにして街中で、ずっと手を繋いで歩いていたのだ。そして今日はアレックスと。

こんな風に繋いで歩き回っていたら、術士のコスプレをしている、ただの間抜けなカップルにしか見えない。何故もっと早くに気が付かなかったのだろうか。

「やはりどうしても、外へ出してはもらえないのか？」

私が頭を抱え込み、門の片隅で小さくなって反省していると、アレックスのほうはまだ諦めきれないのか、守衛に食い下がっている声が聞こえてきた。

「あんたもしつこいな。団長からは、鼠一匹通すなという命令が下っている。もしどうしても外へ出たいのであれば、討伐隊に参加するしかないな」

「！ ……なるほど」

アレックスは何を思ったのか突然後ろを振り向くと、スタスタと反対方向へ歩き始めた。私は嫌な予感がした。

「アレックス…あんたまさか、討伐隊に参加しようなんて考えてないでしょうね」

「無論、参加する」

当然のこのように、きっぱりと言い放った。

やっぱり！

「昨日ディーンからは、あれほど駄目だって言われていたわよね」

「それは修行ができると仮定した場合の話だ。しかし今は状況が違う。外へ出られぬでは修行にならないからな。このままでは魔王を倒すどころではなくなってしまう」

「んな大袈裟な。出られないといっても、ほんの数日程度じゃない」
エドの話では、霧は約一週間程度で消えるらしい。討伐隊の編制時期から推測すれば、ここに足止めされるのは最低でも一〜三日くらいのもんだろう。

「たかが数日といえども、少しでも身体を動かさなければ感覚が鈍ってしまう。昨日は討伐隊へ参加することよりも、修行のほうを優先した。だがこの状況では参加しながら修行をする以外、道がないではないか！」

いつものように拳を握り、堂々と宣言した。

（アレックスって、修行のこと以外は頭がないのね。クソ真面目なのかただの馬鹿なのか、判断が難しいところだわ）

頭を押さえて呆れていると、アレックスが突然私を抱き寄せてきた。そして素早く建物の陰に連れ込まれる。

そこは表の通りとは違って薄暗く、狭い路地だった。建物間の隙間のような場所である。

「な……急にどうかしたの？」

後ろから抱き竦められた格好になっていたのかかなり焦っていたが、私は何とか冷静さを保ちつつ、警戒するように表通りを窺っている彼に向かって尋ねた。

「うむ。どうも昨日から誰かに見張られているような気がするのだ。それに今一瞬だけだが、殺気のようなものも感じられた」

第13話 襲撃者

「見張られて……てあんた、只でさえ目立つんだから仕方ないんじゃないの」

道行く人々——特に女性は擦れ違いざまに、必ずアレックスのほうを振り向くのである。いつも誰かに監視されているようなものなのだ。

「何を言うか。このように謙虚で人畜無害なこの俺の、何処が目立つというのだ」

私の位置からでは背後にいる彼の表情は全く見えなかったが、声のトーンから察するに、恐らく心外だともいうような顔付きになっていることだろう。

長身な上に美形である。ただそこへ佇んでいるだけでも目立たないはずはないのだが、本人にその自覚がないというのは恐ろしいことだ。

しかし殺気というのは気になる。私には何も感じられなかった。とはいえその緊張感は、腕の中にいる私にも伝わってきていた。

私は念のために意識を辺りに這わせてみる。

刹那——。

アレックスに抱えられ、私は一緒に奥へ飛んでいた。

素早く体勢を立て直してその方向を見ると、短剣ダガーが三本地面へ突き刺さっている。私たちがさっきまで立っていた場所だ。

疑問に思う間もなく、その上へ覆い被さるように黒い影が落ちてきた。

「逢い引きの最中に……よく俺の攻撃が躲せたな」

唸るような声とともにゆらりと揺れると、それは細長く上へ伸びた。

いや、よく見ればそれは影ではない。

人間の男だった。

全身黒いマントのようなものを羽織っている。頭は黒い短髪が覗いていたが、口元は隠すように黒い布で覆われていた。

全身が黒づくめで、見るからに怪しい格好だ。しかも今物凄く、的外れな独り言をぬかしたような気もするが、それに対して突っ込んで良い空気ではない。

「あんた一体、何者なのよ。何でいきなり攻撃してくるわけ？」

私は何処にでもいる一般的な、ただの巡礼者だ。誰かに恨まれる理由など当然ない。

だとすれば、狙いは一緒にいたアレックスなのか。それとも人違いで攻撃されたただけか。

「答える義務はない」

「もしかして人違いじゃないかしら。私、あなたのことなんか知らないんだけど」

「貴様は知らなくとも、俺は貴様らを殺すのが仕事。これ以上の会話は、愚問愚答というものだ」

男はくぐもった声でそう告げると両手に三本づつ、計六本の短剣を持ち身構えた。こちらを睨め付ける双眸には、鋭い眼光が宿っている。

「これ以上の会話は無意味」と、その態度が示していた。

全身から解き放たれる気には、妙な威圧感があった。かなりの手

練れなのかもしれない。

仮にこの男と真正面から戦ったとしても、私には全く勝ち目が無いことを直感した。私は精霊石の嵌め込まれた左腕のブレスレットを強く握り締める。

（精霊術……何とか隙を作れないかしら）

こちらへ向けられる殺気から考えると、いつ攻撃をされてもおかしくはない。

人間相手に、しかもこんな街中であまり術を使いたくはなかったが、この状況ではやむを得ないだろう。

しかし私が術文を口にする前にアレックスが先に動いていた。腰に下げていた長剣を引き抜くと、男に斬りかかっていったのだ。

刃と刃のぶつかる音がする。男がそれを右手に持っている三本の剣で受け止めた。

男は透かさず空いている左手でそれを繰り出してきた。それらを指の間に挟み込むと、モンク（格闘術士）などがよく使う武器「鉄爪^{シンクロ}」のように攻撃してきたのである。格好はモンクではないが、恐らくそれがこの男の武器なのだ。

剣はギリギリのところでアレックスの鼻先を掠めた。

が、それに気を取られていた彼の下半身はガラ空きだった。そこを蹴られ、背後へ吹き飛ばされる。

ヴァイン・シャル・クリン

「風刃鋭鎌！」

かまいたち

私は男へ向けて鎌鼬を放つ。
だが。

「!？」

私は一瞬、自分の目を疑った。

彼は私の放った術を、両腕でいとも容易く振り払ったのだ。服には多数の切れ目が付いていたが、出血の様子は見られない。

「これで術士を名乗っているとはな。笑える冗談だ」

男は無表情な視線でこちらを一瞥したが、直ぐに剣を構えているアレックスの方へと向き直る。

私はその場で愕然としていた。

勿論男の他愛ない皮肉に傷ついたわけではないし、私自身が彼に對して怯えているわけでもない。

（術が……弱い！？）

私は魔物と戦闘する時のように、力を放出したつもりだ。だが今の攻撃力にはいつもの手応えがなく、殺傷能力が皆無なほどに弱かった。

男は私など見向きもせず、真っ直ぐにアレックスへと駆けていく。

「神撃水剣！」

アレックスは属性を剣へ付けると、迎え撃とうと身構えた。

私はその声で我に返り、続けて光弾を放った。

だが。

それは男に当たることもなく、勢いのないままでフラフラと地面へ落ちていくだけだった。やはりいつもの威力がない。

第14話 追撃者

その原因は一つしか思い付かなかった。

この前の魔物に付けられた奇妙な紋様。それしか考えられない。

剣を再び受け止めたアレックスは、それを押し戻した。液体の蒸発するような音を立てながら、男の持つ短剣が斬られていく。

アレックスはそのまま振り下ろしていた。が、それは切っ先を掠めたにすぎなかった。相手が後方跳躍で避けたのだ。しかし口元を覆っていたマントは切られている。

「それが貴様の能力か」

男はここで初めて露出した口端を上げると、折られた短剣を無造作に投げ捨てた。

私の足元に転がってきたそれは、刃の部分が溶けたように真つ二つになっている。属性を付けたアレックスの剣は、金属をも溶かす能力を持っているのだ。

男は新たに同様の剣を懷から取り出すと、再び攻撃を仕掛けていく。一体いくつ隠し持っているのだろうか。

（それにしてもあの人、まだ本気で戦ってはいないわね）

足元に落ちている刃の欠けた柄を見れば分かる。

精霊石が付いていないのだ。

精霊術士以外の術士であるならば、メインの武器には大抵付いているはずである。例えどんな術士であっても、特に魔物との戦闘では属性の力は欠かせないからだ。

私は彼らが戦っている間に、タイミングを計りながらじりじりと後退していった。

「エリスさ〜ん、アレックスさ〜ん!!!!」

私たちを呼ぶ聞き慣れた高音が、背後にある狭い路地の奥のほうから響いてくる。

「逃げてくださ〜いっ!!!」

その声に対して、私は後ろを振り向きたくはなかった。何となく嫌な予感がするのだ。

何故なら、つい最近にも似たような場面に遭遇した気がするのがある。もしかしてこれが世間で言うところの『デジャヴ』というやつなのだろうか。

と、風を切るような音が直ぐ近くで聞こえてきた。

足元にソレが突き刺さるのを見た私は、反射的にその場から飛び退いていた。

振り返ると案の定、エドがこちらへ向かって必死の形相で走ってくるところである。しかもその背後からは、短剣が何本も投げられてきていた。

「な…っ、ちょ、エド!??」

私は咄嗟に風のシールドを張った。それは音を立てて跳ね返される。

「は…:…あれ??」

剣がシールドで阻まれたのだ。つまりは私の術が「正常に機能」しているということになる。

「何で? だってさっきは弱い術しか出せなかったのに」

私は混乱していた。

思わずいつもの癖でシールドを出してしまったが、弱術しか放て

ないとしたら防御もできないはずなのだ。

先程の術と今の術での違いは、攻撃か防御ということだけである。自身の精神力と大気中にある精霊力。それらを精霊石で融合させ増幅し、術文を使い一気に放出する。攻撃と防御に違いはない。使用方法は同じはずだった。

「エリスさん、早く逃げないと敵が来てしまいます」

エドが私の後ろへ回り込みながら叫んだ。

「へ？ 敵？？」

前を見ると、黒い物体がこちらへスピードを上げて向かってくる場所だった。

だが目の前で一瞬にして消えた。

私が慌てて周囲を見回していると、

「むうっ、いつの間に!？」アレックスの驚くような声が聞こえてきた。

私たちに攻撃を仕掛けてきた男。

その横にはいつの間にも現れたのかもう一人、別の男がいたのだ。

この男もマントのようなものを羽織り、口元が布で覆われていた。

背格好や着ている服も、隣の男と全く一緒だ。

第15話 敵の誤解？

「まだ仕留めていなかったのか、ボブ」

「ふ：それはこちらのセリフだ、レグ」

二人は並び、アレックスに向かって構えを崩さずに互いに声を掛けた。

「流石『精霊の加護』を受けた者だ。俺の攻撃を避け、よもやここまで逃げ果せるとはな」

エドを追ってきたボブと呼ばれた男が、苦虫を噛みつぶしたかのような目でこちらを睨んでいる。

「エド、あんたも攻撃されたの？」

「そうなのです。何故かあの人に殺されそうになったのでここまで必死に逃げてきたのです。それでようやくここで皆さんに再会できたのです」

必死に逃げて――。

そういえばエドは、逃げ足だけは速かったのだ。しかし。

（あの人、今確かに『精霊の加護』って言ったわよね）

アレックスにだけある特殊能力。

今の話から察するに、その能力がエドにもあると、あの男は言っているのだ。

（なんであの人、そんな誤解を？ それに）

その能力のことはアレックスの故郷の人間と、私たちのようなごく一部しか知らないはずである。しかも普通なら精霊や魔王関連の話は、伝説としか受け取られていないはずだ。なのにこのボブとい

う男も、それらを信じているということなのか。

「だがそれもここで終わりだ。貴様らには消えてもらおう！」

その言葉を合図に、二人は同時に別れた。

ボブのほうはアレックスへ。そしてレグは私たちのほうだった。

「君たち！」

アレックスが叫びながら私たちへ駆けてこようとしたのだが、当然それをボブに阻まれた。

ワイン・マオ・デユウ
フールド・ザン・デスト
「神風護壁！ 雷風烈破！」

私は風属性の防御術と攻撃術を同時に出した。

しかし攻撃術のほうはレグへ届く前に、自然消滅してしまった。

——ツキイイイン！

音を立て、短剣の刃が私のシールドに当たる。

「グ……ッ！」

瞬間、思わず呻いていた。それでも腹の底から力を振り絞り、何とか堪える。

やはり攻撃力は弱く、使い物にならなくなっていた。が、防御のほうはいつも通りのようだ。

背後で流れていた唄が止まった。どうやらエドの唄（術）のほうも、完成したようである。

身体全体に熱が帯びてくるのが分かる。エネルギーが外部から流れ込んで来ているのだ。

私はそれを体内にある精神エネルギーと融合させ、放出する。シールドがそれに反応するかのように強化されていく。

これは吟遊詩人などの芸術士がよく使う、支援系の術だ。

吟遊詩人の場合、補助術といえど敵味方問わず、唄の聞こえる範囲内のものであれば――クラスなどの制約は抜きに考えて――誰にでも効果が及ぶ。

しかしこの支援系だけは対象者一人にしか効力がないという、特殊な技なのだ。恐らく自身の体内エネルギーを他者に分け与えるという、他には例を見ない能力が関係しているのかもしれないが、私はその仕組みについて詳しくは知らない。

エドは私に言われるまでもなく、事前に支援系の術を唄い始めていた。

唄い始めた時にその系統の術だということは、私にも瞬時に分かった。何故ならこの状況で芸術士が使う技といえば、それ以外考えられないからだ。

しかしレグは強化されたシールドに阻まれていても、絶え間ない攻撃を繰り返してきている。私たちはそれに押され、じりじりと後退していった。

エドも後ろから私を支えているが、この男の力押しは半端ではなかった。二人がかりでどうにか耐えているほどだ。

だが私の消耗も激しい。体力と精神力が大量に削られていくのである。

私はこれほどまでに短時間で消耗するような激しい戦い方を、今まで経験したことがなかった。このままいけばこちらが不利になるだろう。

「エリスさん、耐えて下さい」

いつもの気の抜けるようなエドの声で、私は本当に気が抜けてしまった。

「！　しま……っ」

気付いた時にはもう遅かった。
鈍く銀色に光る先端が、直ぐ目の前にまで迫ってきていたのだ。

第16話 接触

「あだっ！」

私は思わず目を瞑ると、潰された蛙のような声を出していた。何かが額に当たったのである。

しかし私は死んではいなかった。目の前に火花が軽く散った程度だ。疑問に思いながらも額をさすりつつ、足元に落ちたソレを見る。すると。

「???? まんじゅう??」

そこに落ちていたのは、透明な包装紙に包まれた小さな丸い物体一つ。その中心には温泉マークの焼き印まで入っている。

（何故まんじゅうが？ まさか剣が変化した……とか）

一瞬そんなことを考えてしまったが、はつきり言って有り得ない。

「貴様は……」

脇から声がした。レグの声だった。いつの間にか私たちの横へ移動していたのだ。

だがそれは、私たちへ向けられたものではなかった。

私は彼の視線の先へ顔を動かした。

暗がりから出てくる人影。

（あ、あれ？ あの人）

その人物には見覚えがある。というより昨日見かけたばかりなのだから、直ぐに忘れるはずがなかった。

そこに佇んでいたのは、昨日街中で魔物を殺していた隻眼のモンク（格闘術士）だったのだ。

「貴様は、キラール・アイ……名はルティナと言ったか」

「ふん、あたしのことを知っているのか。その呼び名も有名になったもんだね」

ルティナと呼ばれたモンクは平らな大きめの白い箱を小脇に抱え、白い何かを口に入れながら現れたのである。

先程レグの背後から饅頭を投げ付けてきたのは、恐らくこのルティナなのだろう。黒い餡が口元に付いているので間違いはない。

「昨日の騒ぎを見ていたからな。それに俺たちの間では、貴様を知らない者などいない」

「……成る程な」

ルティナは眼光を宿しながら、口端に付いていた餡を親指で拭くと、ペロリと舌先で舐めた。

「なら容赦はしないよ。かかってきな！」

彼女は視線を彼らのほうへ向けたままで、持っていた箱を素早くこちらに投げ付けてきた。私は突然のことだったので吃驚して、反射的に受け取ってしまう。

開いているその中を覗くと、先程と同じ白い饅頭が六個入っていた。

「この箱〱仕切りが三十六個分ありますね〱」

エドも私の背後から覗き込んでいる。

三十六個入りの箱の中で、残っているのが六個。ということはあの女性が一人で、三十個も食べたということか。

（あ、三十個じゃなくて二十九個だ。さっき投げた物もあるから）私は足元に落ちている饅頭を見ながら思う。

「ではこちらとしても、本気を出させてもらおう……ボブ！」

レグはもう一人の名を呼んだ。すると今までアレックスと戦っていた男が、突然レグの横へ姿を現していた。それは一瞬の出来事で、私にはいつ移動してきたのか、速すぎて見えなかった。

「アレックスさん、大丈夫ですか？」

「ハッ、そうだアレックス！」

私はエドの声で我に返った。饅頭の数などを数えている場合にはなかったのだ。

駆け付けるとアレックスが、建物の背に凭れて倒れ込んでいた。私は素早く身体を調べる。

「どうやら、致命的な負傷はないみたいね」

腕や足など、防具で覆われていない部分が切り刻まれてはいたが、急所の外れている箇所ばかりであった。

「ククク：これから楽しくなるところだったんだがな」

ボブはおもむろに着ているマントを脱ぎ捨てた。

瞬間、なんと彼の形態が変わったのだ。先程まで覗いていた形相が緑色の鱗で覆われ、トカゲのような爬虫類系の容姿に変化したのである。

同様に横にいたレグも変わっていた。昨日殺された魔物と同じように、彼らもまた人間に化けていたのだ。

ボブがそのまま腕を上げると、辺りの「気」が一変したように感じられた。

夜でもないのに一瞬で暗くなる。

空から降り注いでいた陽の光が、厚い雲に覆われてしまったかのようにだ。しかし上を見上げれば雲一つない。なのに視界が突然、モノトーンに変異したのである。

肌がビリビリと痺れるほどに、張り詰められた気の流れ。まるで

異界にでも迷い込んでしまったかのような、明らかに異質な感覚。

「な…！？　これは…」

先程までしていた通りの向こうの喧騒も聞こえなくなっている。

私はこのような体験をしたことがなかった。だが講義の時間、父から話に聞いたことはあった。

中位クラス以上が得意とする、結界術。

これを創り出すには、多大な精神エネルギーと精霊力が必要とされるらしい。ボブが自身に掛けていた術を解いたのは、恐らくこれのために違いない。ヒトへの変化にも同様にエネルギーを使うらしいのだ。

フオール・デュー・ザイン
「強硬風拳！」

ルティナは術文で両拳に風を纏わせた。

それを合図にレグが彼女へ向かっていく。と、その周辺の壁が爆砕した。爆風と砕けた壁がこちらにも飛んでくる。

ルティナは壁に穴を空けながらそれを足場に、狭い壁を駆け上がっていった。レグとボブもそれを追いかけていく。

建物の上空で何かが交差しているのが見えた、と思った瞬間。

「！？」

戦っているその場所から、無数の黒い何かがこちらへ降ってきたのだ。それも物凄いスピードだった。

（駄目だ、間に合わない！！）

術文を唱えている時間がなかった。

私はその衝撃に少しでも耐えるべく、無駄なこととは分かっている

たがアレックスの身体に必死でしがみついていた。
案の定、間もなくそれが全身に伝わってくる。

だが。

私はそつと目を開け、上を見上げた。

紋様が見える。

水の紋様が私たちを包んでいるのだ。

「そっか、精霊の加護」

アレックスの特殊能力が、彼を中心に発動していたのだ。

上空から落ちてくる黒い物体は紋様に弾かれるとそのまま地面へ
落ち、爆音とともに穴を空けていた。

精霊の加護が発動しているとすれば、あれは上空で戦っている魔
物の術である。恐らくルティナが彼らの攻撃を防ぎ、その流れ弾が
真下にいる私たちに落ちてきたのだろう。

精霊の加護は魔物の術であれば、無条件で防いでくれるようなの
だ。私たちも彼の側にいたので助かったのである。

だがここで安心はできなかった。

落ちてくるのは魔物の術だけではないからだ。

壊れた建物の残骸や、或いはルティナの術攻撃も同様に落ちてく
る可能性があるのだ。

特にルティナの術攻撃だった場合には、アレックスの命にまで影
響を及ぼしかねない。そうなる前に一刻も早く、この場を離れた方
がいいだろう。

第17話 この状況で

「ともかく二人とも、安全なところへ避難しましょう」

あの魔物たちが彼女に気を取られている間に、何とかここを脱出しなくてはならない。

私とエドは立ち上がり、逃げようとしたのだが。

「アレックス、どうしたの？ 早く逃げないと…」

彼は座り込んだまま、全く動こうとしなかった。俯いているのでその表情は見えなかったが、しかし何やらぶつぶつと呪文のように呟いている声が聞こえてきた。

「まさか俺が……このようなところで……あのような輩に……」

「ぐわあああっ！！ またコイツはあああ！！！！」

「エ、エリスさん、落ち着いてくださいー！」

私はこの場で思わず頭を掻きむしりながら、身悶えしてしまった。アレックスはまたこのような状況の中で、一人落ち込んでいるのだ。一人で落ち込むのは一向に構わないのだが、時と場所を考えてほしい。

ともかく彼が一旦こうなったら厄介である。周囲の言葉など、殆ど聞き入れなくなるのだ。

ここにディーンでもいれば上手く宥めてくれたかもしれないが、生憎今は別行動中だった。

「アレックスさんも、しっかりしてくださいー！」

エドがアレックスを強く揺さぶって正気に戻そうと試みているのだが、効果はなさそうである。

その間にも瓦礫の破片や、先程のような流れ弾も時々落ちてきていた。直ぐに正氣の戻った私の防御術で今のところ防いでいるものの、私も逃げられるだけの体力や氣力は温存しておかなければならない。そのため、いつまでもこの状態ではいられなかった。

これは一番手っ取り早い方法で、アレックスを目覚めさせなければ。

「エド、退いて！」

落下物が来ないタイミングを見計らった私は、押し退けるようにして急いでエドを退かすと――。

ドゴッ！

私はアレックスの綺麗な白い頬を、思いっきりグーで殴っていた。彼は右ストレートをまともに食らい、背後の壁へ上半身を打ち付けていたが、私は構わずにその胸倉を掴んで引き寄せる。そしてよく聞こえるように、その形の良い耳許で怒鳴った。

「いい？ アレックス！」

今はこんな所でヘコんでいる場合じゃないのよ。

こんな場所にいつまでもいたら、あんた本当に死ぬわよ。そんなことになったら、元も子もないでしょう？

あんたが『倒す！』と息巻いていた魔王だって、永遠に倒せなくなるんだものね！」

「……魔王」

彼の身体が反応するかのように微かに揺れると、色素の薄い金色の前髪が額のの上に、はらりと落ちた。

「そうよ。あんたは英雄の末裔だって、自分で言っていたわよね。」

つまりあんたの先祖は精霊に選ばれた、特別な人間なの！

だから代々受け継ぐその使命を果たすため、愛する妹^{リッ}のために、魔王の元へ一人で赴いたんじゃないの！？」

「そう……そうだった。この俺が……精霊に選ばれしこの俺が魔王を倒すことこそ、リアの……そして我が一族の悲願……！」

彼は突然覚醒でもしたかのように、カッと目を見開いた。そこへ透かさず畳みかける。

「だったら、あんなザコ魔物相手にちよつとやられたくらいで、落ち込んでなんかいられないじゃない。

そんなことをしている暇があるんだったら、少しでも鍛練を積みなさい！」

このままだと使命を果たせないどころか、あんたを選んだ精霊や尊敬する偉大な英雄、そして愛する妹にまで愛想を尽かされちゃうわよ」

「――！ うむ、そうであった。

このままでは、我が偉大なる先祖、そしてリアに顔向けができません！……そうだ、俺はここで立ち止まっている時間などなかったのだ！」

ようやく彼の目に、光が戻ってきたようである。

アレックスはこう見えてわりと、精神的に打たれ弱いほうなのだ。少し挫折感を味わっただけでもこのように、絶望的なまでに打ちのめされる。とはいえ『一晚眠れば嫌なことはアツサリ忘れられる』という特技があるので、時間が経てば自然に回復をするらしいのだが。

何故アレックスがこのように打たれ弱いのかという理由は、デイ

ーン曰く「挫折を知らないから」だという。

彼は修行で山へ籠もる以外、故郷の村を今まで殆ど出たことがないらしい。それに修行とはいっても、村周辺にいる自分より弱い下位クラスばかりを相手にしてきただけなので、中位クラス以上とは戦ったことがないという。

私も故郷を出るまでは、アレックスと似たようなものだった。しかし私の場合、本格的に修行を始めるようになってからは、師匠でもある父にいろいろと叩き込まれていた。

アレックスの師匠は上のお兄さんらしいのだが、放浪癖があるらしく、二年前に村を出て以来行方が分からないそうだ。

それにこれもディーン曰く「奴は人を教えるということに全く不向きな男だ。だからアレックスにはあまり、一般常識を教えることがなかった。もつとも、全てを彼に任せていた俺たちにも責任はあるのだが」ということである。そのようなことをつい先日、フードを外したディーンがいつものように、爽やかな笑顔で話してくれていた。

「ところでエリス」

正氣に戻ったらしいアレックスが何故か背けるように、顔を脇下のほうへ逸らしながら話し掛けてきた。

「そろそろ退いてはもらえないだろうか」

気が付けば私は胸倉を掴んだままで、彼の身体の上に乗っていたのだ。

「エリスさん、アレックスさんをいきなり殴るなんて、乱暴すぎます」

「なっ……だってこの場合、仕方がなかったのよ」

呆れたように眉を顰めるエドに対して私は勢いよく立ち上がると、

慌てて反論する。

「どうやら彼を説得するのに熱を入れすぎてしまったようだが、しかし今は些細なことを気にしている余裕はない。」

第18話 結界術

私たちは表通りに向かって駆け出していた。

先頭にいたのは私だったのだが、外へ出たと思った瞬間、少し離れた先にいる二人の後ろ姿が目飛び込んできた。

「エ、エ、エリスさんが突然消えました」

「何っ、また迷子か!？」

目の前で忽然と姿を消した私に驚いているのか、二人がその場で慌てふためいている。

「私なら、ここに居るわよ」

背後から静かに話し掛けると、彼らは幽霊にでも出遭ったかのような表情で更に驚いていた。その辺りに転がっている小石一つ分くらいは、確実に飛び上がっていると思う。

「さっきは前から外へ出て行ったはずですよ。なのに何故後ろにいるのですか？」 エリスさん「何か術を使ったのですか」

「む、そうなのか？ このような非常時に、冗談が過ぎるぞ」

「いや、私のせいじゃないから」

（というか寧ろ、あんたにだけはそんなことを言われたくないんだけど）

心の中でアレックスに対して文句を言いつつ、改めて表通りのほうへ歩み寄ると、外へ出る一歩手前で立ち止まった。

「多分、魔物の結界のせいでしょうね」

私はセピア色に変異した空を見上げながら言った。

上では三人——正確には一人と二匹だが——が、攻防戦を繰り広

げていた。まだ油断は出来なかったのだが、今はそれぞれ戦い方を変えているのか、落下物は最初の頃に比べてあまり落ちてきてはいない。

「結界、ですか」

「そう。さっきあの魔物の一匹が、この辺りに結界を張っていたのよね。

私の推測では恐らくこの場所と、あの後ろにある横道くらいの範囲だと思うわ。

……二人とも良く見ていて」

私はおもむろに右袖を捲り上げると、表通りへその腕を突き出した。すると入った肘から先の部分がすっぽりと、切断でもされたかのように消えていたのである。

彼らは予想した通り、再び目を丸くしていた。

「後ろを見て」

私は背後を振り向いた。

後ろにはかなり遠くまで一本道が続いている。エドが先程逃げた道だ。

間にはそれを分断するかのように横へ入る脇道も何本かあるのだが、一番近くにある脇道に奇妙なものが浮かんでいた。

人の掌である。

「あ、あれは……人の手!？」

「そうよ、正確には私の腕だけだね」

それは私の消えた部分だった。精霊石の嵌め込まれたブレスレットが手首で揺れているのが、真正面からでも見える。

「どうやらこの場所と後ろの横道辺りまでの空間が、魔物の術によ

って閉じられているようなの。

それにこの通りは、後ろのあの部分に繋がっているわ。だから外へ出たと思っても、またここに戻ってきてしまうというわけよ」

二人はきよとした顔をしているが、私は更に続けた。

「簡単に言えば、一定範囲内の空間が大きな硝子張りの箱の中みたいになっていて、出入り口には鍵が掛けられている状態なの。私たちは中へ閉じ込められているから、その鍵——つまり魔物の術を壊さない限りは、ここから出られないっていうわけ」

「あ！ 話には聞いたことがあります。それが魔物の結界というわけですね」

エドはようやく理解したようである。

空間を捻れさせる術は、中位クラス以上なら大抵使えるらしい。

人間では人数と時間も掛かるのだが、魔物では先程のボブでも分かる通り独りで、しかも短時間で出来るのである。つまりヒトと魔族の術力の差が、それだけ大きいということでもある。

「要するに魔物の術の影響で、俺たちはこれ以上先へは進めない、ということなのか？」

どうやらアレックスも珍しく、すんなりと理解したようである。

「それにしてもエリスさんよくこの空間が結界だって分かったね。もしかして閉じ込められたことでもあるのですか？」

「ううん、ないけど。話には聞いていたから」

「僕もお師匠様から話にだけは聞いたことがあったんですけど、実際に体験したことがなかったもので直ぐにはピンと来ませんでした。その冷静な判断力、流石です」

エドは例によって、顔をキラキラと輝かせている。

実のところ私にも、魔物の結界術がどういったものなのかは、あ

まり理解していなかった。話に聞いていた状況と一致しているようだったので「もしかしたら…」と考えたのだが、私も実際に体験したことがなく、半信半疑だったのだ。

本当のことを言えば、最初に結界を通って二人の後ろ姿を見た時点で、腰が抜けるくらいには吃驚していたのである。しかし彼らの慌てている姿を目にした途端、逆にそれが一気に萎えてしまったのだ。

「何事にも動じない、強い心と冷静な判断力、同じ巡礼者として、僕もエリスさんを見習わないといけませんね」

エドはまだ顔を輝かせてこちらを見詰めてきていた。

第19話 破壊

上を見上げれば、相変わらず風と闇が交差していた。

彼らが場所を移動しないのは、この空間がかなり狭いから移動できないのだと思う。ということは、この術を掛けたボブの力量がその程度、ということになってくる。

「私もあのルティナっていうモンクを、手伝うことができればいいのだけれど」

私は齒痒い気持ちを抱きながら、ぽつりと呟いた。

二対一で戦っているのだ。ルティナがどのくらいの強さなのかは分からないが、数ではこちらが不利だった。

「でも僕たちが出て行ってもルティナさんの足手まといになるだけですよ」

「まあ、そうなんだけどね」

特に私など、紋様のせいで攻撃術が使えないし。

外界との境目であるこの場所は、先程まで私たちが居た所よりは比較的安全のようだった。先程は戦闘の真下だったので落下物も頻繁に落ちてきていたが、ここは少し離れているため、殆ど落ちては来ない。

それに上の様子も見ることが出来る。私たちはこの場所で彼らの戦闘を、ただ見守ることしかできないのだ。

「では僕たちはその間にこの結界を破れる方法でも探しましよるか？」

エドがそのようなことを提案してきたが、私にとっては予想外なことだったので驚いていた。

「え、そんなこと可能なの？」

普通こういうのって、術を掛けた張本人を倒さない限りは破れないってというのが、セオリーでしょ」

「でも他に方法があるかもしれないですし。ここでじっとしていても、無駄に時間が過ぎていくだけです。僕たちにだってやれることがあるはずですよ」

いつものように陽気な音楽を鳴らしながら、エドはそのようなことを軽く言ってきた。

だが彼の言うとおりででもある。ただ見ているだけの私たちだが、もしかしたら今できることがあるのかもしれない。

私が思い直して周囲の壁や地面などを調べていると、大通りを見詰めながら顎に手を置き、真剣な表情で何かを思案している様子のアレックスの姿が目に入った。

「アレックスもひょっとして、この結界を破る方法でも考えているの？」

「うむ……こちらからは向こう側が見えているというのに、何故ここを通った物が遠く離れた後方へ移動できるのか、そのカラクリを解いている最中なのだ」

（この男……さっきは理解しているようなことを言っておきながら、本当は全く理解できていなかったというわけなのね）

私が半眼で見詰めていることに全く気付いていない彼は、何を思ったのかおもむろに大通りのほうへ歩き出した。自分でも実際に体験して、確かめてみようかともいうのだろうか。

彼の身体がそこへ入りかけた時、バチッという何かの弾けるような音が聞こえてきた。と同時に、身体上には水の紋様も浮かび上がった。

まるで硝子の碎け散るような鋭い音が聞こえてくる。

静寂だった周辺からは津波の如く、一気に喧騒が押し寄せてきた。目の眩むような目映い陽の光と、行き交う人々。先程までの見慣れた光景だった。

「待て!!」

頭上で怒鳴り声が聞こえてきた。見上げると建物の屋上を伝って逃げていく、二匹の後ろ姿が見える。

恐らく結界が解かれたために、逃げ出したのだろう。

この町は現在近衛兵により、厳重に警備されている。少しでも騒ぎが起されば、直ぐに常駐している騎士たちが駆け付けて来るはずだ。昨日もルティナが去った直後、数名の騎士たちが現れていた。

だから彼らはここに結界を張ったのだ。

魔物が結界を使って戦うのは、戦闘の邪魔をされたくない故に外部の者を遮断するためとか、中は術士のテリトリー内だから有利に戦えるなど、それらの理由が一般的だと言われている。特にこのような街中では余計な騒ぎは避けたいはずだ。

結界は術士が創り出す異空間である。先程私たちが居た空間も建物や風景がこちら側と同じように見えてはいたが、別空間だった。その証拠に崩れているはずのそれらの残骸が、こちら側では全くの無傷だ。

「ちっ、逃げられたか」

舌打ちとともに、ルティナが壁を伝って上から降りてきた。

「……まあいい。どうせ奴ら、またあんたたちを襲いに来るだろうしな」

「て、ソレちっとも良くないじゃない!」

私は即座に抗議の声を上げていた。

第20話 3人への依頼

「あたしはルティナ。ルティナ・マーキス。職業は魔物ハンターだ」
彼女はそう名乗った。魔物ハンターは魔物専門の賞金稼ぎである。

「あ、それで昨日は、あんなに派手に魔物を退治していたのですね」

エドは納得といった表情で両手をぽんと叩いていたが、私は眉を顰めた。

「だからって、あんな風に退治しなくてもあなたが魔物ハンターなら、もっと簡単にスマートな方法があったはずでしょ。いきなりだったから私、凄くビックリしちゃったんだけど」

「アイツがあたしの顔を見た途端に逃げ出したから、そのまま追いかけたまでさ。」

魔物らの間であたしは有名人らしいからね、腰抜けのお嬢ちゃん

愛想もなく言った最後の言葉は、私への皮肉だろうか、やっぱり。ということは昨日彼女の目の前で、座り込んでいたのが私だと憶えていたのか。

「それじゃあ、あんたたち……ええと……」

「私はエリス。エリス・フルーラよ」

「僕はエドワード・ライアンです。そして隣にいるこの方は、アレックス・ヴォングさんと言います」

私たちは口々に自己紹介をした。ただアレックスだけは眉間に皺を寄せて腕を組み、未だに何かを考え込んでいる様子ではあるが。

「ああそう。じゃあ、あたしについてきな」

「……………は？　なんで？？」

ルティナはごく自然な流れでそう言ってきた。だから反射的に
いて行きそうになったのだが、私は寸前で何とか踏みとどまった。
何故会ったばかりの身も知らない彼女に、私たちがついて行かな
ければならないのだろうか。それに「知らない人については行くな」
という言葉は、物心が付く前から言い聞かされている一般常識でも
ある。

「なんでって……あんたたち、狙われているんだろ？　あたしが守
ってやる」

「は……え、ええええー???」

私は吃驚して思わず大きな声を上げてしまった。

確かに先程助けてくれたことには感謝しているし、ありがたいと
も思う。

しかし初対面の私たちに対していきなり「守ってやる」など……
そんなことを軽く言ってくるだなんて、普通だったら警戒するに決
まっている。

私が無言で疑いの眼差しを向けると、それに気付いた彼女はおも
むろに眉を顰めた。そして苛ついたような表情に変わると、少しク
セのある錆色短髪を無造作に左手で掻き回す。

「つたく、分かったよ。正直に言おう。理由は三つだ」

私の言いたいことを察したのか、ルティナはそう言いながら左指
を三本突き立てた。

「まず一つ目は、あんたの持っているソレ、返して貰おうか」

「へ？　……あ、ああ、コレね」

言われた私は、自分が小脇に抱え込んでいる物に視線を落とした。
それは最初にルティナから預かっていた、饅頭の入った箱である。

「まさかまだ預かってくれていたとはな。普通あの状況だったら、途中で捨てているぞ」

「そりゃいきなり渡された物とはいえ、一応他人の物だし。勝手に捨てるわけにもいかないでしょ」

有無を言わず人に頼んでおきながら、そんな言い方をするなんて。

私は明らかにムツとして、箱をルティナに突っ返した。本当は捨ててしまおうかとも思ったのだが、結局ずっと持っていたのだ。

「ああ、それはすまなかった。これは謝礼だ」

ルティナは直ぐに謝ると、私の手の平へ饅頭を三つ乗せてきた。彼女が予想外の行動をしたので、私は呆然とそれを見詰める。

ルティナって、もしかして。

実はわりと『良い人』だったりするのだろうか。外見だけで判断するならば愛想の欠片もなく、一見恐そうな印象ではあるのだが。

「そして二つ目は、あの魔物たちだ。彼奴らはギルドでも指名手配されている」

「え、そうだったの？」

指名手配をされている魔物だというのであれば、それを専門職にしている彼女がこの機を逃すはずはないだろう。

しかし疑問なのは、何故そのような魔物が私たちを狙っているのか、ということだ。

最初はこの前遭った、上位クラスの魔物「サラ」に命令されたのかとも思った。しかしあの時は彼女に『わざと見逃された』のである。

「どうやら私たちは彼女にとって、必要なモノらしいのだ。といっても正確には『アレックスだけが』であるが。」

そして恐らくであるが彼女には、まだ私とエドのことがバレてはいないと思う。でなければ能力のあるアレックスにまで、危害を加えてくるはずがないからだ。

「最後の三つ目。こいつはあたしから、あんたたちへの依頼だ」

「依頼？」

「そうだ。あんたたちにやってもらいたいことがある」

「僕たちにですか？」 ルティナさんに頼まれるようなく難しいことは出来ないと思いますけど」

「なに、実に簡単なことだよ」

首を傾げたエドに向かってニヤリと笑いかけた彼女は、事も無げに言葉を続けた。

「モンスター・ミストを破壊してほしい」

第21話 取引1（前書き）

第2章 追跡者1（ルテナ編）

第21話 取引1

それは近隣町で聞いた噂が発端だった。

『魔物が集まり始めた。討伐隊が近々編制されるらしい』

それがギルドを中心に流れていたのだ。

魔物ハンターであるあたしは当然の如く、その現場であるアクニカ村へ向かっていた。

だが途中で不意を突かれ、魔物に襲われてしまう。

そして魔物の口からその名を聞くことになろうとは、思ってもみなかったのだ。

「貴様の目的――ゼリユーを殺したいのだろうか？」

襲ってきた魔物の女はあたしの顎を持ち上げると、耳元でこう囁いてきた。

それを聞いた瞬間、沸騰するのと思うくらいに全身の血液がざわめき立つ。

ゼリユー。

あたしが長年追い求めている魔物だ。

そしてヤツだけはあたしの手で、どうしても葬らねばならない。それが魔物ハンターという職業を選んだ理由でもあった。

「貴様、一体何者だ？」

あたしは目の前にいる、真紅の瞳を持つ魔物の女を睨み付けた。

真紅――。

そう、ヤツの眼も真紅だった。

それによく見ればこの魔物、顔立ちがヤツに似ていてはいないか。

「ヤツとはどういう関係だ」

そう問い掛けると目の前の魔物――先程サラと名乗っていたが――は、可笑しそうにクスクスと喉の奥で笑いながら、あたしから身体を離して立ち上がった。

「ゼリユーは妾^{わらわ}の兄だ」

魔族とヒトでは種族系統は違うが、生態系や容姿などは殆どの者が類似している。だからヤツに肉親が存在していたとしても、何ら不思議ではない。

「モンスター・ミストがこの近辺に現れたのは、知っているな？」

あたしがアクニカ村へ向かっているのは、魔物が集まっているという情報だけが理由ではなかった。

モンスター・ミスト。

これもあたしの目的だった。

「それを破壊する方法が見つかったとしたら、貴様はどうする？」

「な……んだと!？」

その言葉に、あたしは驚愕した。

第22話 取引2

未だかつて、その内部に入れた者はいないと聞く。
それは魔物であっても、例外ではない。

ヤツのことは術士修行時代から追いかけていたが、足取りを掴むことができなかった。そしてこの場合一番に考えられることは、自分で創った『結界^{せかい}』の中へ雲隠れしているのではないか、ということだ。

ヤツは上位クラスの魔物だ。その可能性が一番高い。

大抵結界というものは、発動した術士の認証を得なければ、外部からは入れないようになっている。

それにあたしたちの目に見えていないだけで、地上の何処かには必ず存在しているものだ。即ち、現実空間と少しずれた場所に、それが存在しているだけだと思えばいいだろう。

しかし、ただ存在しているだけではない。術士が周辺一帯を模し、意図的に創り出している空間なのだ。

だが模造できるのは精々、建造物や木々などの植物くらいで、食物や水、着衣などのようなものを創り出すことは不可能だった。

だから例えヤツがこの中へ雲隠れしていたとしても、永久に閉じ籠もっているはずがない。何故ならヤツもヒトと同じように、食事などといった生理的欲求を持っているからだ。

もし外部との関係を完全に断ち切れるとしたら——伝説で例えるならばヒトや魔物、双方に当てはまらない存在——『精霊』くらいのものでろう。

『結界』とは、そのような場所だ。

あたしは長年ヤツについての情報を集めていたが、最終的に辿り着いたのが『モンスター・ミスト』の存在だった。

ソレが世界各地に最初に現れ出したのは、およそ十二年前。ヤツの消息が途絶えた時期と、ピッタリ一致している。

だからヤツがそこにいるのではないかと睨んで追いかけているのだが、出入りしている痕跡を未だに発見することができなかった。

そのため他の可能性も模索している最中ではあったが、モンスター・ミストがそこへ現れたと聞けば、他に手掛かりが掴めない以上は追うしかない。

サラと名乗った魔物に奇襲をかけられたのは、そんな時だった。

「その方法が見つかったからといって、それがあたしと何の関係がある」

あたしは表面上の冷静さを保ちながら、奴へ静かに問い返した。

「貴様は既に承知なのだろう？」

人間どもがモンスター・ミストと呼ぶアレの中に、貴様の殺すべき相手がいることを」

「……！」

その言葉に絶句したあたしは、変わらず薄笑いを浮かべたままの奴の顔をしばらく凝視してしまった。

「ならば……あの中にヤツが居るとでも言うのか？」

「無論だ。でなければ妾が貴様を生かし、このような情報を与える理由がない」

自信ありげに断言したその言葉から、あたしの中の推測が確信へと変化していくのを感じていた。

「妾が貴様にその情報を提供する。そして貴様はゼリューを殺す。だが断るというのであれば、妾が貴様をこの場で殺す。これが取引だ」

これは一方的な要求だ。無論、取引と呼べるようなものではない。しかしその時のあたしには、そのようなことを気にしている余裕がなかった。

やはりあの中にはヤツが居る！

泉へ投石される波紋の如く「確信」の広がり始めていたあたしには、同様に高揚していく気持ちのほうが大きかった。

だがあたしは冷静さを崩すことなく、保ち続けていた。

「あたしにヤツを殺させる目的は何だ。ヤツは貴様の兄なのだろう？」

「妾たち魔族には、目先の近しい血縁者など意味を為さぬ。重要なのはその先にある、一族繁栄のみ。

ゼリューは我らにとって、その障害となる邪魔な存在なのだ。

我らが繁栄するためには、奴を確実に消さねばならぬ。ただそれだけこと」

あたしの問いに淡々と答えていたサラからは、何の感情も見られ

ない。そこがやはりヒトとは違う。

魔族の中にもヒトと同じように、様々な種族がいる。

奴らにとって何よりも大事なことは、自分の一族が子々孫々まで繁栄することだ。

無論それはヒトでも同じ事であるが、ヒトよりも遥かにその気持ち強い。

何故なら奴らの世界では、弱者は強者に絶対服従。奴らにとってのソレは、適者生存のための習性といっても過言ではないからだ。

「どうやら長話がすぎたようだな。そろそろ貴様の答えを聞かせてもらおうか。

妾の取引に応じるか。それともこの場での死か」

奴の有無を言わせぬ問い掛けが、あたしに直接向けられていた。

第23話 パーティ戦闘

あたしは左眼に違和感を抱くと、眼帯の上から手で押さえ付けた。瞳の中を小さな虫が、無数に這いずり回っているような不快感。いつもの感覚だった。

すると目の前の木陰から現れたのは、二体のゴブリン。先程から戦っているのは、殆どこの種類だ。

いくらこの辺りが奴らの縄張りとはいえ、前に来たときよりも数が多すぎる。やはり、モンスター・ミストの影響が現れているせいなのだろう。

サラに遭遇してから一日が過ぎていた。

奴に精神攻撃を受けてから徐々に体力は回復しているが、それでもいつもより移動速度は落ちている。通常であれば、既にアクニカ村へ到着していても良いはずだった。

あたしはいつものように其奴らを軽く片付けると、視界を遮っている乱れた前髪を掻き上げた。同時に左眼を覆っている眼帯にも、そつと手を触れてみる。

いつもの違和感は消えている。

「眼はいつも通り、か」

あたしの左眼には、特殊能力があった。魔物の気配を感じできるのだ。

これは世間から「呪われたモノ」と呼ばれる、半端な存在のあたしにしか備わっていないものだ。

しかしサラと遭遇した時には、まるでゾンビが現れた時のように何も感知できなかった。

だが奴は、ゾンビやスケルトン・キラーのような傀儡などではない。もしそれらであるのなら、双眸の瞳に光を感じることがないはずだ。

あれは完全に気配を殺していた。

がしかし、果たしてそのようなことが可能なのだろうか。

あたしは奴の気配を探っていたのだが、特殊能力のある左眼でさえも感知できなかった。上位クラスの魔物は数が少なく、遭遇すること自体稀な種族ではあるが、例えば奴らといえども命ある限り「生氣」を完全に消すことは有り得ない。

自分の能力異常かとも思ったのだが、左眼も通常通り感知しているから、原因はそれではないだろう。

レーゲ・フティ・シオン
「雨激天庄！」

フード・ヴァン・デスト
「雷風烈破！」

近くでは術文を唱える声と、地響きなどが聞こえてきた。何処かのパーティが戦っているらしい。

その者たちが戦っているということは、この付近にいる魔物もその場所に集まっているはずだ。つまりあたしがこのまま素通りしても、何の問題もないということになる。

討伐隊などといった特殊な状況を除けば、部外者が戦闘中の他パーティーに途中参戦することは殆どない。

個々のパーティーには、きちんとした連携^{ルール}があるのだ。危機的状況に陥っているのならともかく、途中で乱入すれば、それを崩してしまふことになりかねない。

そんなわけであたしはいつもの通り、この場を立ち去ろうと思ったのだが、途中で何気なくそちらのほうへ振り向いていた。

数匹のゴブリン相手に戦っていたのは、四人のパーティーだった。格好から判断すると、剣士一人に精霊術士二人、そして楽器らしきものを振り回しながら敵に追いかけられている芸術士が一人だ。

「……ん？」

（剣士、精霊術士、芸術士？）

あたしはこの組み合わせに引っ掛かりを覚え、立ち止まった。

『——その者たちは剣士の男、精霊術士の女に豎琴を弾いていた……芸術士の男、だったか』

昨日サラから告げられた、三人の特徴を思い出していた。

更に奴は「剣士の男は妾から見ても大層、眉目秀麗であるぞ。貴様の美的感覚が妾と近似しているというのであれば、直ぐにでも分かるだろう」とも言っていた。

そのことを思い出したあたしは木陰から目を細め、剣士の顔を改めて凝視した。

「……………」

——何だあの、異様にキラキラした顔^モは。

輝いて見えるのは恐らく、飛び散る汗が陽に照らされてそう見えているだけかもしれないが、遠目から見ても明らかに目立つ顔立ちだった。

が、しかし。

このパーティは四人だ。

もう一人、不気味な雰囲気身を纏っている精霊術士がいた。フードを目深に被っており、見ただけでは性別を判断できないが、その背格好から男だと認識した。

四人パーティということは、サラの言っていた特徴と若干の違いがある。もしかしたら奴の話していたのは、此奴らではないのかもしれない。

(に、しても)

このパーティは一目見ただけでも、あまりバランスの取れているほうではなかった。

剣士の男は武器の持ち方、構え方も完璧だし、敵の繰り出す攻撃にも怯まず対応している。

一見すれば、ある程度の手練れにも見えるが、しかし全体的に無駄な動きのほうが多い。これでは直ぐに体力が尽きてしまうだろう。

精霊術士の男は、複数の属性を上手く組み合わせながら戦っていた。

こちらは全くといっていいほど無駄がなく、各属性の術を上手く組み合わせ、的確に使用している。加えて他の仲間のフォローにも回っており、この中では一番場慣れしているようだ。そして恐らく一番強い。

もう一人の精霊術士の女――というより、まだ少女に見えるが――は、一応考えながら戦っているようにも見える。

しかし動きのほうは、まだかなりぎこちなかった。術の威力も中程度だ。

それらのことから判断すると、どうやら巡礼者のようであるから、能力が伸びるのはまだこれからといったところか。

芸術士のほうは逃げてばかりいて、援護支援があまり上手くいていない様子だ。

楽器を持っていることから考えると吟遊詩人のようだが、まだ上手く仲間のサポートが出来ていないのだろう。こちらも巡礼者のようだ。

総合的に見るならば、まだ発展途上中のパーティといったところかもしれない。ベテランの前衛をあと一人くらい追加すれば、多少のバランスは取れそうな気がするが。

と、ここで、こちらに背を向けて一息吐いていた剣士が、突然振り向いた。

「アレックスさん、どうかされましたか？」

「――む、いや……」

「ちょっと、あんたたち。突っ立ってないで、こっちも手伝ってよね！」

剣士はこちらを気にするような素振りで顔を向けながらも、前を歩いていた少女に促されるままに立ち去っていった。

まさかとは思うが、自分たちを見詰める視線に気付いたのだろうか。側には感覚の鋭い芸術士も居たから、あたしは慎重に気配を消していたつもりだったのだが。

あたしは彼らが木々の向こうへ消えていくのを、この場で見送っていた。

この森を抜けた直ぐ先にアクニカ村がある。

あたしもそろそろ、出発しなければならぬ。

第24話 怒りのままに

あたしは予定より少し遅れていたが、アクニカ村へは無事に辿り着いていた。

が、あたしの機嫌は頗る悪かった。

「……つくしよう、あんのクソガキっ！！
今度見つけたら絶対、ブツ殺す！！！」

あたしの放つ殺気に触れまいとするかのように、周囲を行き交う人々が遠巻きに避けながら通り過ぎていく。

いつもならこれほど簡単に撒き散らしたりはしないのだが、それも無理からぬことだった。

財布を掏^すられたのだ。

犯人は混雑中のどさくさに紛れて派手にぶつかってきた、さっきのクソガキ！

いつもなら気付いた時点で捕まえているところだ。

しかしその時のあたしは、この前食べ損ねたアクニカ村名物の『ソフトアイス』を、二本同時に抱え込んでいたために反応が遅れてしまった。

その上ぶつかった衝撃で両方とも、地面に落としてしまったのだ！

兎にも角にも、このあたしの懷から財布を盗むだなんて、かなり良い度胸をしていやがる。

今度見つけたら両手足に、岩男（ロック・マン）を括り付けてす巻きにし、何十もの鍵を掛けた保管箱に閉じ込めて、海底の奥底へと必ず沈めてやる！！！！

あたしがそう息巻いていると、左眼が急に疼いてきた。
どうやらこの近くに魔物がいるらしい。

が、特に珍しいことではない。このような街中の人混みであっても、大抵何匹かは魔物が紛れ込んでいるからだ。

しかし全てを狩るのは大変な労力だ。だからあたしはいつも、賞金首以外の魔物には目を瞑ってきた。

それにあたしの能力では、大勢の中から一つだけを特定することができない。つまり人がこのように大勢いた場合、その中のどの人間が魔物であるのか――そこまでは判別できないのだ。

あたしは辺りに素早く視線を配っていた。

側を通り過ぎようとしていた一人と不意に目が合うと、相手のほうがあからさまに、ビクリと身体を震わせていた。いくらか顔色も青ざめて見えるようだ。

直感の働いたあたしはその人物から視線を逸らさずに、真っ直ぐ近付いていく。

恐らくあたしの形相は、伝説として語り継がれている魔王のように陰しかっただろう。自分でも自覚はしている。

当然男は逃げる。あたしもそのまま追いかける。

互いの距離を保ったままだ。そして眼の違和感も消えてはいない。人混みを掻き分けながら、あたしはその男をしつこく追い続けた。
いた。

「あんた、何故俺を追いかけてくる!？」

とうとう我慢の限界にきたのだろう。男は後ろを振り返ると、逃げながらこちらへ怒鳴ってきた。

「貴様が逃げるからだ。それに貴様の正体、全てお見通しなんだよ！」

「やはりそうか！ その隻眼は……お前があの『キラール・アイ』！」

あたしの通り名を知りながら逃げている、この男。
間違いない。魔物だ。

しかしまさか、あたしが試しにちょっとカマを掛けてみただけで、簡単に引っ掛かってこようとは。

この分かりやすい反応は恐らく、賞金首に掛けられるほどの大物ではないからだろう。一般的な中位クラスだ。

奴が大通りへ出た辺りでようやく捕まえると、予め術の施された手刀を首の付け根付近へ、問答無用でぶち込んだ。瞬間、かなり驚いた顔付きをしていたようだった。

奴にしてみれば賞金首でもない自分が、まさかこのような公道のド真ん中で攻撃をされるとは、露ほどにも思っていなかったに違いない。

騒ぎを大きくすれば、先程見かけた数名の騎士たちが直ぐに飛んで来て、あたしの手柄が横取りされる。

それに魔物にしてみても、あまり目立った行動は避けたいはず。何故なら奴が何の目的もなしで、人間に変化するとは思えないからだ。

中位クラス以上はプライドが高く、日頃から嫌悪感を抱く人間に、自ら進んで擬態する者など殆どいない。大抵の魔物は自分より能力の強い者の命に従って、人間に化けているにすぎない。恐らくは奴も同じだろう。

だから奴は人混みの中、こちらに攻撃を仕掛けてはこなかったの

だ。

それなのに何故あたし自らが、そのような暴挙に出たかといえ、答えはただ一つである。

当然、財布を掏られたせいだ。

このままではどうにも、腹の虫が治まりきれなかった。というわけで代わりに、たまたま目の前に居合わせたこの魔物を、ぶった切ることにした。

しかしこのままではやはり、駆け付けて来る騎士たちに手柄を横取りされ、賞金も手に入らなくなる。

賞金首ではないから金額的には高が知れているし、財布も全てを掏られたわけではなかったが、ここまで派手に立ち回ってしまった手前、途中で横取りされるのは癪に障る。あたしの魔物ハンターとしてのプライドも許されない。

要は騎士たちが来る前に、この場をずらかればいいだけのことだ。そのために急いで遺体の回収に向かった。

あたしが地面に転がっている頭部を持ち上げた時、その前には果然と座り込んでいる少女の姿があった。

焦点の定まらない大きな翠瞳が、あたしの持つ頭部をじっと見詰めている。まるでソレに魅了されてでもいるかのようだ。

（あれ？ コイツ）

肩まである真っ直ぐな、金に近い栗色髪の少女。その顔には見覚えがあった。今朝、道中で見かけた精霊術士だ。

あの時には生氣に満ちあふれていたが、今は土気色の顔で小刻みに震えている。

「まさかこのような場所に、魔物が紛れていたなんて、思わなかつ

たです」

側にいた少し太めの吟遊詩人がそれとは対照的に、朗らかな歌声で唄っていた。

「魔物……」

小さな呟き声が聞こえたあたしは、彼女の顔を肩越しから覗き見る。

すると、先程よりは幾らか顔色が良くなっているような気がした。頬には赤みが戻り、強張っていた表情も徐々に緩みつつあるようだ。

あたしはここで、嘗て一緒に仕事をしたことのあるハンター仲間のことを、ふと思い出していた。

他の職種でも同じだとは思うが、あたしたち魔物ハンターも目標が強敵の場合には即席でパーティを組み、同業者と協力して首を取りに行くことがある。

過去何度か一緒に仕事をしたことがあり、精霊術士だったが、あたしから見てもかなり腕の立つ男だった。

——ある欠点を除いては。

何故そんな彼の顔をここで思い出したのかといえば、似ていたからだ。

遺体を見詰めた時の瞳。表情。

後からその事実を知った時の、憑き物でも落ちたような様子。

巡礼者とはいえ、彼女も精霊術士だ。少なくとも戦闘経験があり、死体にも見慣れているはず。

遺体を前にしたからといって、動揺するはずがない。現に今朝は普通に戦っていた。

なのに先程のあの様子。

もしかしたら……という思いが胸を過ぎっていたが、しかし通りすがりであるあたしには関係のないことだった。

寧ろ今は、最優先でやるべきことがある。

恐らくこの騒ぎを聞き付けた騎士たちが、直ぐにでも駆け付けて来るだろう。

あたしは残った胴体を急いで担ぐと、自然と出来た道を通り、彼らが到着する前にこの場を立ち去ることに成功したのだ。

第25話 遭遇1

この村はモンスター・ミストの影響でしばらくの間、外部との流通を遮断するという。

そのことはあたしも事前に予想済みだった。ヤツがここにいるということとは、その規模も大規模なものだと容易に予測できた。

こちらに残された時間は、あまりない。いつモンスター・ミストが姿を消すのか分からないからだ。

そうなってしまったら、今度は何処に現れるのか予測できない。そしてそこに必ずヤツが居るとも限らない。

その間、例の三人組パーティを捜すことにした。この村に必ず居るはずだと、サラが言ってきたのだ。

あたしは先程買った『温泉まんじゅう』の箱を小脇に抱えつつ、温泉街を彷徨っていた。

何故温泉まんじゅうを買ったかといえば、『温泉Ⅱ（イコール）まんじゅう』に決まっているからだ。

温泉に来れば必ず饅頭を買うのが、世間一般での定番であり鉄則だ。でなければここに来る意味がないといっても過言ではない。

あたしがその場所を通り過ぎようとしていた時、

「貴様らには消えてもらう！」

その声とともに、金属の触れ合う音が聞こえてきた。あたしは反射的に建物の陰から、その路地を覗く。

ヴァイン・マオ・デユウ フード・ヴァン・デスト
「神風護壁！」 雷風烈破！」

術文を叫んでいるのは、昨日地べたで震えていた精霊術士の少女

だ。

しかし攻撃術のほうは、相手に届いていないようだった。あたし
が一目見ただけでも出た瞬間に、その威力が皆無だったのが分かる。
(やはりそうか)

昨日彼女に感じた『勘』は、どうやら当たっていたようだ。

だからといって、他人であるあたしにはどうすることもできない。

ただ一つ言えることは、今の状況では確実に彼女たちのほうが殺
されるということだった。

シールドで防いでいたが、明らかに押されている。別の奴と戦
っている剣士も防戦一方で、共に劣勢なのが一発で分かった。それ
に何より、相手の黒装束たちのほうが戦い慣れしており、能力にも
差がありすぎだ。

「さて、どうするか」

あたしはその光景を眺め、独り言を呟きながら饅頭を口に運んで
いた。

が、考える間もなく手が先に出ていた。黒装束の背後に向けて、
思わず饅頭を投げ付けてしまったのだ。

目の前で弱者が一方的にいたぶり殺されるのを見るのは、あまり
寝覚めの良いものではない。

だから何となく、邪魔をしたくなかったという気持ちもあった。

第26話 遭遇2

「貴様は、キラー・アイ……名はルティナと言ったか」

この黒装束は通り名だけでなく、あたしのファーストネームまで知っていた。どうやら只者ではなさそうだ。

あたしが前に進んで奴らに近付いた時、左眼にはいつもの不快感が襲ってきた。先程は距離があったため、魔物の気配を感知できなかったようだ。

精霊術士と吟遊詩人は昨日あたしの近くに居たが、感知してはいない。それに仲間である剣士の可能性も低い。

そう考えれば自ずと魔物は、黒装束の奴らだと断定できる。ならばこちらの専売特許だ。

奴らはあたしが気付いたと思ったのか、あっさりとその正体を現していた。そしておもむろに腕を上げ、フィールド結界を創り出す。

あたしは精霊石の埋め込みである両手袋グローブに術を掛け、近くの壁に穴を空けた。同様に上にも窪みを作り、それを足場にして屋上へと登っていった。あの狭い通路内で挟み撃ちにされたら厄介だ。

広い空間に出たあたしは、素直に追いかけて来た奴らの洗礼を早速受けた。

奴らの放つ複数の黒い刃がこちらへ向かってくる。

あたしは能力を纏った拳で、正面から叩いて横へ薙いだ。それらは勢いをつけたまま地上へ落下していったようだが、まあ、あたしの知ったことではない。

その間にも奴らは、次々と攻撃を繰り出してくる。

前からはナイフの攻撃。それを躲せば背後からの術攻撃。

勿論あたしもその度に反撃をしているが、相手もなかなか隙を見せない。何より、奴らのコンビネーションプレイは完璧だった。

（面倒だな）

あたしは二匹同時に倒す方法を模索し始めていた。

このままではこちらの分が悪すぎる。ここは一旦、体勢を立て直した方が良さそうだ。

ヴァイン・ドウル・ボワニ
「風雷破拳！」

新たに雷撃の附加した両拳を、それぞれの方向へ飛ばした。

二匹には直前で躲されたが、その隙にあたしは奴らより十分な間合いをとる。

「貴様らは確か、ランドラプトルだったな」

ここであたしはおもむろに、奴らへ話し掛けた。

ランドラプトル。

指名手配書によれば、危険ランクDの魔物。

五段階ランク中の『D』だから、度数はそれほど高くはないのだが、指名手配の魔物であることに変わりはない。

しかしこの『ランドラプトル』という種族、主に生息しているのは海を渡った先にある、サラマタル大陸。

取り分けその大半を支配している、セルフィール帝国周辺のはずだ。つまりこのアステラス大陸では、殆ど見かけない魔物だった。

「ほう、我らを知っているのか」

「当たり前だ。あたしも伊達に長いこと、この仕事をやっているわけではないからな」

などとハツタリで返答していたが、単に数週間前までセルフィール帝国へ滞在していたから、たまたま知っていたにすぎない。

指名手配書というのは魔物の場合、生息地域限定でギルドに提示される仕組みになっている。だからこの大陸を拠点にしているあたしには馴染みがなく、海を渡らなければ知ることのない種族だった。

「それが何故、あいつらを襲う。誰の命令だ？」

「貴様の知るところではない」

（やはり簡単には口を割らないか）

だがその上の魔物――力の強いモノの命令で動いていることは、間違いないだろう。魔物自らの意思で生息地域を移動するというのは、滅多にないことだからだ。

「しかし倒すのは貴様が先だ。なあ、ボブ」

「そうだ、レグ。あいつらならここに居る限り、いつでも殺れるかな」

（……そういうことか）

結界を創ったのは勿論、外部との切断目的もあるに違いない。が、恐らくあの三人をここへ閉じ込めておくのも、理由の一つなのだろう。

「キラー・アイ。貴様の噂は、俺たちの耳にも入っている」

「へえ、サラマタル大陸にまであたしの名が知れ渡っているとはね。でもサインはやらないよ」

「確か貴様の胆きもを摂取すれば、至 strongest になれるという話だったな」
あたしの気の利いた冗談をあっさりと無視したレグが、下卑た笑みを浮かべながら言った。

その噂がこの大陸にいる中位クラス連中の間で流れていることは、あたしも知っていた。

過去、それに絡んで戦いを挑んできたものも数多くいたが、その都度撃退していたのだ。

「それはあくまでも噂だろう？ あたしはこの通りピンピンしているし、胆も取られたことはないよ」

「だが、そうだ……貴様にはこんな噂もあったな。知っているか？
ボブ」

「レグ、もしかしてアレのことか？」

ボブと呼ばれた魔物は、ちらりとあたしのほうを見ながら答えた。
「キラー・アイが極めて特殊な、『半魔半人』の身体を持つという、
アノ話」

あたしのこめかみが反射的に、ピクリと反応してしまった。が、
奴らの様子に変化はない。どうやら気付かれてはいないようだ。

「そうだ。」

通常の『半魔半人』は『母体』が我ら魔族でなければ、この世に生まれ出ることができないと言われている。

ヒトの身では器である母胎が、その精霊力に耐えきれないからな。
しかしキラー・アイはその逆で、『母体』が人間。

しかもその胎内を破壊せず、死産にさえならず生まれ出でたという」

「それもただの噂だ。事実とは限らない」

「確かに。我ら魔族の血を受け継ぐ者が人間の胎内から生まれ、
何十年も生き長らえているなど、今まで聞いたことのない非常識な
話だ」

（……こいつら、喋りすぎだ）

あたしはお喋りな奴は嫌いだった。胃がムカつくほどに。

だが奴はこちらの反応を楽しむかのように、まだ喋り続けている。
「噂であれ何であれ、この大陸に広まっている話が我らの所にも伝わってきた。」

ならばここで貴様に出会ったのも、何か運命を感じるとは思わないか？」

『運命』——これが恋人に言われた科白セリフならば心躍るところなのだろうが、こんな奴に言われているかと思うと反吐が出る。

「だから貴様らはそれが真実かどうか、ここで確かめると言うのか」
「そうだ。もしそれが事実ならば、我が最強になる！」

奴らは互いに交差しながらこちらへ駆けてきた。あたしは再び「風」に電撃を附加させて、奴らの持つ短剣ナイフを両手で受け止めた。

あたしはそのままの体勢で、口角を上げる。

「お前らもお目出度いな。そんな定かでないものを欲するために、あたしに殺られたいというのか」

「真実は貴様を食すれば分かることだ。それに噂のあるところに、火種がないとも限らないしな」

あたしは後方へ飛んで再び間合いをとる。しかし奴らは透かさずこちらへ向かってきた。

片方の魔物は、真正面から術を放ってくる。

あたしはもう片方の繰り出してくるナイフを受け止めながら、その術を躲す。が、今度はあたしの脇腹を掠った。

そろそろあたしの体力が持たなくなってきたようだ。動きも先程より鈍くなっている。

それは奴らも同じはずだ。先程までは攻撃に手応えを全く感じていなかったが、今は拳に奴らの感触を微かに感じるようになった。それにあたしと同様、動きも鈍くなっている。

だがあたしは攻撃の手を緩めることができなかった。

2対1。

無論数の問題ではないが、気が少しでも緩んでしまった時、恐らくそれがあたしの最期だ。

あたしは攻防を繰り返しながらも、奴らを如何にして同時に倒せるか考える。

（こうなったら、下の建物でもぶち壊してみるか？）
要は何か、突破口さえ見つけられれば良いのだ。

——だが突如。

何かの碎け散るような鋭い音とともに、空が割れていた。

第27話 彼女の理由（前書き）

第3章 魔物討伐（エリス編）

第27話 彼女の理由

「モンスター・ミストを破壊してほしい」

彼女——ルティナは、ごく普通の日常会話的な流れで、私たちにそう言ってきた。

「えーっと……じゃ、まあ、そういうことで」

私も同様に、ごく普通の自然な動作で踵を返したのだが、即座に背中の外衣^{ロレフ}フードを掴まれていた。

「おい待て。いきなり何故逃げるんだ」

「や……だって、何言っているのかよく分からないし」

「あんた、あたしの言っている意味が解らないのかい？」

その言葉に対して、私は深い溜息を吐かずにはいられなかった。

「じゃなくて、出来もしない依頼はお断りってことなのよ」

「そんなことはないだろう。これはあんたたちには、簡単なはずだろ？」

さも当然といった表情で、ルティナはさらりと言ったのける。私は眉根を寄せた。

「何で私たちが？」

私たちは一般的な、ごく普通の巡礼者なのよ。破壊できるわけじゃないじゃない。

そんな簡単に壊れるものならば、他の誰かが既にやっているわよ」
彼女に向かってそう訴えた。ルティナは考え込みながらも、そん

な私をまじまじと見詰める。

「確かに一見そう見えるが……しかし、あの結界を破ったのはあんなたちだろうか？」

ただの巡礼者がそんなことをできるはずがない」

「あ…」

私は先程の出来事を思い出した。そういえば、アレックスがいとも簡単に破ってみせていたのだ。

彼には魔物の術が効かない。身体に当たる寸前で、周囲には精霊の結界が張り巡らされた状態となり、術を弾く。

先程は『術』である結界に彼が触れた途端、その能力が発動した。故に弾かれた術はその形態を保つことができなくなり、破壊されたのかもしれない。

無論この考えは、私の憶測にしかすぎないのだが。

（ルティナも私たちのことを、何か勘違いしている？）

今彼女は「あの結界を破ったのはあんなたちだろうか？」と訊いてきた。

「あんなたち」——つまり、また私とエドのことまで数に含まれているのだ。先程の魔物たちと同じである。

確かに今は三人で行動しているが、エドは結界を通らなかったのだからにしろ、私は破ることができなかった。

やってみせたのは、アレックス一人だけである。彼女はそれを見ていなかったのだろうか。

「さっきの結界を破壊できるということは、モンスター・ミストも破れるということになる」

「それはつまり、モンスター・ミスト自体が、魔物の結界術で出来ているということなの？」

「無論、そうだ」

「でもだからって、破壊できるとは限らないじゃない」

「アレはさっきの結界術と、何ら変わらない代物だ。破るためにはそれを作った張本人——魔物を倒すか、或いはソイツに無理矢理にでも解かせるしかない。」

だがその張本人である魔物は現在、その中に隠れていて外へは全く出てこないのさ。つまり、外部からアレを破壊するのは不可能というわけだ。

だからそれをできる、あんたたちの協力が必要だ」

その説明で彼女の依頼理由は分かったのだが。

(にしても何だか、やけに詳しいのよね)

モンスター・ミストは中に入って調査ができないので、その正体は殆ど分かっていない。なのに目の前にいる目付きの悪い女性は何故か、あの霧は魔物の結界だと自信たっぷりに言い切ったのである。

「むう、どういうことだ」

ここで初めてアレックスが口を開いた。

「何故ここにあるはずの手が、後ろの離れた場所へ、瞬時に移動するというのは」

「あんたまだそれを考えとったんかいッ!!!!」

一応ツツコンでおいた。

とはいえ彼のことだから、ある程度の予想はしていたけれど。

第28話 初対面??

「ところで君は一体、誰なんだい？　いつからそこにいたのだ」
アレックスはルティナに気付くと、いきなり不躰な質問をしてきた。彼女は当然、怪訝そうな表情をしている。

「さっきからずっと居たが……それに名は既に名乗ったはずだ」
「む？　名乗っただと??？　俺には全く、名乗られた憶えがないぞ」

真剣な表情でキツパリとそう返したアレックスに対して、エドが代わりに答えた。

「この方はルティナ・マーキスさんといって、魔物ハンターだそうですよ」

「魔物ハンター？　それは一体、どのようなものなのだ??？」
（そこから説明しないといけないのか…）

正直、面倒だ。

私がうんざりして沈黙していると、エドがまた代わりに口を開いた。

「魔物ハンターというのは、ギルドにおいて……（以下略）」
エドの長々しい説明が始まった。

私にとって彼の説明は、長く退屈なものでしかなかった。途中で横道に逸れるし、更に要領を得ない話が延々と続くのだ。

しかしアレックスにとっては逆にそれが、とても分かりやすいらしいのである。なので彼への説明が必要な場合には、時間さえあれば大抵エドにしてもらっていた。

その間暇を持て余していた私は、常に携帯している懐中時計を眺

めながら、意味もなく時間を計っていた。が、二分が経過した頃になって物音に気付いた私は、ふと何気なく隣へ顔を向けてみる。

先程までのルティナは、残りの饅頭を頬張りつつ彼らを無言で見ていた。しかし今は前を向いたままで、その空箱を力任せに千切っている。

無意識でやっている動作なのかは分からなかったが、無表情のままで千切っては破りを繰り返しているその行為は、端から見れば異様な姿だ。鬼気迫るものがあって、かなり恐かった。

これはヤバイ。もしかしたら限界が来ているのかもしれない。

この状況に慣れてしまった私には、特にどうということでもなかったのだが、彼女にとってはかなりきつい状態に違いない。

取り返しがつかなくなる前に、何とか手を打たなければ。

私は気を静めるべく彼女の肩へ、そっと手を置いた。

「ルティナ、あの二人のことはあまり深く考えないで。ほんのちょっと待ってくれさえすれば、直に終わるはずだから。ともかく、もう少しだけ我慢して」

「は？」

懇願するかのようにお願いした私に対して、彼女は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていた。今は分からずとも、すぐにこの言葉の意味が分かるだろう。

「――…と、いうわけなのです。それでルティナさんはモンスター・ミストの破壊を、僕たちに依頼してきたのです」

説明を始めてから五分程経過した頃、ようやく終わりそうな雰囲気になってきた。

私は安堵し、ほっと息を吐いた。

その間私とルティナは肩を並べ、無言で彼らの遣り取りをずっと見ていた。といっても私の場合、いつルティナがキレてしまうか気が気ではなかったため、上の空で内容を全く聞いてはいなかったが。

「モンスター・ミスト？ それは一体、どのようなものなのだ？？」

「モンスター・ミストというのは、ルティナさんの話によれば……（以下略）」

また別の単語説明が始まったようである。

私はガクリと首を項垂れるのだった。何故か振り出しに戻ったような気分だ。

ここで再び、恐る恐るルティナに視線を移してみると、眉間の皺が先程よりも更に深くなっているような気がする。それに覗いている翠眼には、怒りに燃える赤い炎がチラチラと揺れて見えた。

組んでいる指も苛々と落ち着きなく動き、今にも全身から殺気が噴出しそうな気配だ。

これはもう、本気でまずいかもしれない。

「あ、あのさあ、ルティナ」

「なんだ」

ビクビクしながら話し掛けた私に対して、彼女は前を見据えたまままで機嫌の悪そうな返事をした。

その威圧感に気圧されそうになったが、いや、ここで怯んではない。けない。

「ええと……良い天気、ねえ」

「天気はさっきから良いだろうが。今更言うことではない」
「……………」

いやいや、ここで怯んではいけない。

「あの……あ、じゃあさ。ルティナの左眼って、何で眼帯しているの？　もしかして、怪我か何か？」

口に出してから直ぐに、物凄く後悔した。

その質問を訊いた途端、彼女が無言で睨んできたのだ。氷のように冷ややかな視線だったため、私は一瞬で氷結してしまっていた。

いやいやいや、ここで怯んでは――――。

―――てか、それはもう完全無理だしッ！

これ以上、会話も続きそうにない。

第29話 英雄

私がルティナの放つ鬼雪妖精スノーデビルのような視線に動けず、射殺されそうになっていた時。

「成る程！ 魔物の術かつ！！！」

アレックスの叫び声が聞こえてきた。

どうやら説明のほうが終わったようである。私にとっては正に、天の助けだった。

すると彼は振り向いて、こちらへずんずんと向かってきた。そしてグローブを嵌めているルティナの両手をガシッと力強く掴むと、真剣な表情は崩さずに、勢いのままで迫っていった。

「分かった、引き受けよう！」

「へっ！？」

吃驚した私は、反射的に変な声を出してしまっていた。

「ちよっ、ちよっと待ってよ！ 引き受けるって、モンスター・ミストの破壊を！？」

「当然だ！」

彼は胸を張って堂々と答えた。いつもの如く、かなりやる気に満ちている顔だった。

「話に聞けばモンスター・ミストという術は、外部からの攻撃を一切受け付けないというではないか。

それを破壊し、魔物から世の人々を助けたいと願う彼女の気持ち心意気に、俺は甚いたく感銘を受けたのだ。

ならばそれを助け、救済するのが、英雄としての俺の役目ではないか！」

アレックスは拳を振り上げながらいつものように、熱く演説をしていた。

それにしてもエドは一体、どのような説明をしたのだろうか。この口振りから察するに、恐らくは多少の脚色を加えているのかもしれないが。

時々忘れそうになるのだが、彼は何と言っても吟遊詩人なのである。

「英雄？ 何を言っている」

「何！？？ 君はまさか、あの偉大なる英雄を知らないというのか！！！！」

訝しんだ様子で訊き返した彼女の手を取りながら、再び凄い勢いで詰め寄っていくアレックス。

「いや、そうではないが…」

急に迫られたルティナは、戸惑いの表情とともに眉根を寄せると、顔を横へ逸らした。

「英雄といえば、アノ話だろう」

彼女は後退りながらアレックスの手を振り払うと、慌てるかのよう後ろを向く。

「精霊に守護されし六英雄が、魔王を倒したとかいうアノ話」

「おおっ！ 何だ、君も知っているのではないか」

「知っているも何も、有名なお伽話だからな。」

それを本気で信じているのは大抵、トイーズダレマ大陸にいる精霊崇拝者かカルト信者くらいなものだが……あんた、信者なのかい？」

「信者？」アレックスは首を傾げている。

「俺は英雄の末裔だが」

「……………は？」

「わーっ、そ、そ、それより、モンスター・ミストの話よっ！」

私は眼を丸くしているルティナと、不思議そうな顔で首を傾けているアレックスの間へ、慌てて割って入った。噛み合わない二人にこれ以上会話をさせたら、話が余計にややこしくなりそうな気がしたのだ。

「ああ、そうだったな。ではついてこい」

「うむ、了解した！」

突然一人で歩き出したルティナの後を、アレックスが足取りも軽くついていく。まるで尻尾を振りながら主人の周囲でまわりつく、飼い犬のようだ。

そしてその場に残されたのは、私とエド。

「エリスさん、どうしようか？　僕たちも行きますか？」

問い掛けられた私が彼を見ると、何かを期待しているような顔付きをしていた。

その瞳が分厚いレンズで覆われていても分かる。明らかに「行きましょう！　是非ッ！！」と、力強く訴えかけている表情だ。

「全く……分かったわよ」私はその迫力に気圧されて、渋々承知した。

それにあのアレックスを勝手に行かせたりしたら、何をするか分からないというのもあった。

彼の身に何かあれば、恐らくはディーンに怒られ……いや、それより以前から度々話に聞いているアレックスの妹、リアに殺されるかもしれない。

私は気が進まないながらも、仕方なく二人の後を追うのだった。

第30話 エドの体験

「エリスさん、アレックスさんたちはどうやらギルドの中へ入っていったようですよ」

私たちがようやく二人に追い付くと、彼らは丁度その中へと消えていくところだった。

相変わらず中は混雑している。外から見てもそれは明らかだ。

「僕たちも入りますか？」

「いえ、それは止しましょう。多分外で待っていれば、その内出てくるんじゃないかしらね。この混雑じゃ長時間、中へは居られないはずだから」

と、何だか昨日も同じ会話をエドとしたような気がする。

「でも外は危険です。何故なら僕たちはまだ狙われているのですから」

「なら、余計にここは安全な場所かもしれないわよ。流石に人が大勢いる中では、攻撃を仕掛けてはこないでしょう」

「そんなことはくらないと思います」

エドは辺りを見回しながら、急に不安げな表情になった。

「実は今日、エリスさんたちと別れてから、温泉へ入るために外まで続いていた、行列へ並んでいたのですが、その時……」

——それから約七分が経過した。

「……と、いうわけで、エリスさんのところに合流できたのです」

「な……成る程」

彼の話 요약するとこうだった。

エドが行列へ並んでいると、横から何かが割り込んできて、いきなり突き飛ばされたのだという。

そのまま道路脇へ吹き飛ばされたエドが、直ぐさま身を起こして見てみると、なんと胸にナイフが刺さっているではないか！

だがそれは丁度、胸に下げていた楽器^{ハープ}に突き立てられていた。

その直後、前で人の気配がしたので反射的に見上げると、黒ずくめの男が自分に向かって、更にナイフを突き立てようとする瞬間だったという。

一瞬でも気付くのが遅かったなら、確実に殺られていたらしい。

「それでエドは命からがら、私たちのところにまで逃げてきたというわけなのね」

「そうなのです。路地裏を滅茶苦茶に走り回っていたので、攻撃も上手く避けられ、何とか助かったようです。それにこの村には、路地が多くて、不幸中の幸いでした。その上、運良く皆さんと合流できて、良かったです」

「けどその行列の場所では、騒ぎにはならなかったの？」

「今さっき、そこを通ってきましたが、どうやら、なってはいない様子でした」。

恐らく、誰も気付いていなかったんじゃないでしょうか。僕でさえ、気付く間もなく、突き飛ばされていましたので」

エドは自分が殺されそうになったというのに、相変わらず明るい表情で音楽を奏でている。

「本体のほうは、多少挟れてしまいましたが、弦が無事で良かったです。コレ張り直して調整するのに、多少時間がかかるんですよ」

」。

危うく皆さんと一緒にくモンスター・ミストをく見に行けなくなる
ところでしたく」

「見に行くって…」

見物するために向かうわけではないのだが。それにナイフが弦の
ほうに刺さった場合、エドは確実に死んでいたはずだ。

「ですが本体はくそのうち修理に出さないとくいけないですけどね
く」と、エドが呑気な歌声で唄っていた時、人混みの中から私たち
を呼ぶ声が聞こえてきた。

「君たち。遅くなってしまったが、もう登録は済ませてきたから安
心するのだっ！」

アレックスは私たちに近付いて来るや否や、闘志を燃やしなが
ら力強く拳を前へ突き出した。その様子から、彼がギルドへ入って
いた理由を確信した。

「登録って、まさか」

「うむ。無論、討伐隊への参加申請だ」

彼らがギルドへ入った時点で、何となく予想していたことでは
あったのだが。

「ちよつとルティナ、どういうことよ。

モンスター・ミストを破るだけなのに、何で討伐隊へ参加しなく
ちやならないのよ！」

遅れてやって来た彼女に、私は食って掛かる。

「あそこへ近付くには、それが一番手っ取り早い方法だからだ」

「でも私たちが討伐隊へ参加するのは、物凄く都合が悪いのよ」

「それはあんたたちが、まだ駆け出しの巡礼者だからかい？」

「う…：…まあ、そんなところね」

何故私たちが「駆け出し」だと分かったのだろう。
いや、そんなことはどうでもいい。

今の私は腕に付けられた刻印のせいで、かなり術力が落ちている。
それにアレックスの特殊能力のこともある。

人間の術にかかりやすいということもあるのだが、もし彼が術文
もなしで術を防御している場面を他人に見られてしまったなら、即
「魔物」だと疑われる心配もあるのだ。

（あれ、でも）

私はふと、あることに気が付いた。
ルティナは疑問に思わないのだろうか。

『何故私たちがあの結界を、簡単に破れるのか』ということを。

「ともかく場所を変えよう。ここは落ち着かない」
彼女は周囲を見回しながらそう言うと、先頭を切って歩き出した。

第31話 つかの間の休息1

（うわ、マズっ）

私はそれを口に入れた途端、思わず顔を顰めていた。

その場所は温泉街の外れにある、あまり綺麗とは言い難い建物の一角にあった。

人ひとりがやっと通れるくらいの、薄暗くて狭い階段。地上から下っていくと、一枚の扉が現れる。

そこに掲げられていたのは古ぼけた小さな木製板で、表面には『喫茶フェアリー』と書かれていた。

しかし内装は「フェアリー（妖精）」という名には、ほど遠かった。

狭い店内にあるのは小さなカウンター一つに、五つテーブルが並んでいるだけのシンプルなもの。

誰の作品だか分からない絵画が壁に掲げられていたり、花や観葉植物が生けられていたり、吟遊詩人による緩やかな調べが店内を流れていたり——というようなことも全くない。

ましてや、『妖精』から連想されるようなファンシー系調度品なども一切なく、何故そのような名を付けたのかと、疑問に思わずにはいられない店だった。

その上、出てきた料理も不味い。

運ばれてくる時間はそれ程遅くはなかったし、見た目も悪くはないのだが、一口食べただけで辟易するくらいの不味さである。

メニューの種類もあまり豊富ではなかった。パスタも三種類しかなくて、他にはサラダとトーストがいくつかあるだけなのだ。飲物

も香茶と黒豆茶、フルーツジュースくらいしかなかった。

私たちはこれから討伐隊へ参加するということで、少しでも腹の足しになりそうなもの――パスタを注文していたのだが、まさかこれほどまでに不味いとは思わなかった。

私が頼んだのは海鮮パスタなのだが、麺が水っぽい上に、歯ごたえの全くない食感なのである。

当然の如く、私はそのままフォークを置いていた。

「なんだ、もう食べないのか」

目の前で同じように食事をしているルティナは、そんな私に気付くと睨んできた。

もしかすると怒っているのかもしれない。何故ならこの食事が、彼女の奢りだからだ。

「ごめんなさい……ちょっと食欲が湧かなくて。疲れているのかも」肩を窄めながらも、申し訳なさそうに言い訳をする私。

「僕もちよつと食欲ないです」

隣で食べているエドも眉を顰めつつ、どさくさに紛れて便乗してきた。彼は普段であれば人一倍食欲旺盛なはずなのだが、流石にこの料理には手を付けられないようである。

「何！？ エド、君が食べないとは珍しいな」

その前では海鮮パスタにかぶり付いているアレックスが、吃驚した表情でエドを見詰めていた。因みに彼は、「今までに味わったことのない珍味だ」と言いながら食べている。

彼女のほうは、こちらの苦し紛れの言い訳に気付いている様子もなく、私たちの皿を両手で掴むと、無言でその中身を自分の皿へと

移し替えていた。

彼女はこんな不味い物を、二人分も追加で食べようというのか。

しかも私が注文したのは海鮮パスタであるが、エドはホワイトパスタ、ルティナはミートパスタである。

異種類の一つの皿へ同時に放り込み、更には満遍なく掻き混ぜているのだ。それらは食欲の削がれる色へと、明らかに変化しつつあった。

これは完全に怒っているのかもしれない。

「それなら、飲物はどうだい？」

「え？」

「少しくらいは腹に入れておかないと、これから先の体力が持たないぞ。旅を甘く見るな」

彼女は私たちにそう忠告すると、再びソレらを黙々と食べ始めた。(あれ。もしかして、怒っているわけじゃない……のかな)

言葉はかなりぶっきら棒だったが、こちらを責めている様子ではないような気がする。

私はしばらく迷っていたが、折角なので彼女の言葉に従うことにした。

他の三人も頼むというので、私がマスターに声を掛ける。今までカウンターの途中で新聞を読んでいた彼は、早速準備に取り掛かった。

しかしこのマスターも、ルティナ以上に愛想がなかった。

年齢は大体三十〜四十歳代くらい。ドッシリとした大柄な体型に、口から顎にかけて毛むくじやらの赤髭に覆われていた。

これで大きな荷物を背負っていたならば、完全に山男である。或いはヒトであれば熊、魔物であればベアベアに間違われる山男、といった具合か。

何れにしても、確実に客商売をしているようには見えない。

おまけに出てくる料理も不味い。

それらのせいだとは思いますが、客は私たち以外には誰もいなかった。他に従業員もいないようだし、この状態で店が潰れたりはしないのだろうか。不思議に思った私は早速、ルティナに尋ねてみた。

「このお店って一体、何年前から営業しているの？」

「は？ 何故それをあたしに訊く」

ルティナは口へ運んでいた手を止めると、吃驚したような顔で私を見詰めた。

「だってルティナは、あのマスターと知り合いなんですよ」

「おい、いきなり何故そう思うんだ。あたしはあのマスターの知り合いでも、この店の常連でもないぞ」

「え。じゃあルティナはこのお店のこと、何で知っているの？」

私は驚いて訊き返していた。

地上に店の看板は見当たらなかった。故に知り合いや常連でもない限り、この場所を知ることなどあまりないような気がしたのだ。

「ここはこの前訪れた時、ギルドから紹介してもらった店だ」

「ギルドから紹介って……えっ！？ ギルドって、そんなこともしてくれるの??」

「それは初耳です。僕も知らなかったです」

私とエドは同時に驚きの声を上げていた。

「ああ。格安の宿とか郷土料理の美味しい店とか、尋ねれば一応教えてくれる。

だが提携店を無作為に選んでいるだけだから、当たり外れも多い。だからあまり期待はできないけどな」

ルティナはそう続けたが、私にとっては良い情報だった。いつか私もそのシステムを、利用する時が来るかもしれない。

「でも『当たり前外れが多い』と言っておきながら、ルティナがまたここに来ているのは、どういった訳なの？」

何となく小声になりながら、彼女へ更に訊いてみた。私にはどう見てもこの店が、「外れ」としか思えなかったからだ。

彼女は手に持っていたフォークを再び休めると、怪訝な表情を浮かべながらこちらへ視線を向けてきた。

「だからさっきも言ったように、この前紹介してもらったのを思い出したからだ」

「思い出した……って、それだけの理由？」

「それだけだが、他に何かあるのか？」

「そりゃあ、ここは喫茶店だもの。料理が美味しいからまた食べたくなったとか、店の雰囲気良かったからとか、そういうのもあると思うのだけど」

「料理、か……まあ、不味くはないと思うが」

「えっ!??」

私とエドが再び声を上げた。カウンターで作業をしていたマスターが私たちに反応して、顔をこちらへ向けたようだったが、直ぐにまた戻っていった。

「どうかしたか? 変な声を出して」

ルティナは私たちの顔を凝視しながら、眉根を寄せている。

「……いや、ええっと……」

「な、な、何でもありません。ルティナさんは僕たちのことなど構わずに食事が続けてください」

どうやらエドが珍しく、空気を讀んだようである。
彼女はまだ訝しんでいるようだったが、直ぐに食事を再開した。

第32話 つかの間の休息2

無表情な顔のマスターがテーブルの上に、無言で黒豆茶入りのカップを四つ並べていく。

メニューにはアイスとホットの両方が書かれており、私たちは四人ともホットを頼んだ。

室内は片隅に置かれている、古ぼけた小さな暖炉のお陰で少し暖かかったが、外は肌寒い。やはりこの季節、身体の暖まるものが欲しくなってくるのは自然の摂理といえよう。

目の前に置かれているものは世間一般で広まっている、ごく普通の黒豆茶。黒々とした液体が小さなカップへ、なみなみと注がれている。

黒豆茶というのは、苦味のある黒豆から抽出されるお茶のことだった。そこへは、たっぷりのミルクと砂糖を加えるのが常識である。それが苦味と上手く調和され、芳醇な香りを漂わせるのだ。

しかし目の前にあるソレは、少し違っていた。

湯気とともに立ち上っている香りも、確かに普通のお茶である。が、一口飲めば舌先には、ざらりとした感触が伝わってきた。それだけで言うならばまるで、砂を間違えて舐めてしまったかのようなものである。

加えてともかく苦かった。普通なら、黒豆本来の味と上手く混ざり合うために美味しいはずなのだが、これは甘味と苦味が分離しているかのようだ。

恐らく液体が豆から抽出しきれずに、苦豆そのものの中に混ざってしまったのかもしれない。このお茶は茶殻を完全に取り除かなけ

れば、不味くなるのだ。

一口飲んだだけで思わず、吐き出しそうになってしまった。しかしルティナがカップを持ったままで、先程からこちらをじっと見ている。そのことに気付いていた私は、何とかそれを踏み止まった。

（取り敢えず、飲めないことはないのよね）

何かの罰ゲームだと思い込むことにした私は、目を強く瞑ると、それを思い切って喉に流し込んだ。奥へ異物が入り込んでしまったかのような感触だった。

隣にいるエドのほうに、ふと眼を向けてみる。私と同様に苦しそうな表情で、カップへ恐る恐る口を付けているところだった。こちらに向けられている彼女の視線には、彼もやはり気付いているらしい。

一方アレックスはといえば、「独創的且つ斬新な味だ」と言いながら、珍しいものでも見るような顔付きで飲んでいた。

そんな私たちのことを見届けた彼女は、そこでようやく視線を外してくれた。

実を言うと私は猫舌なのだが、無理矢理熱いお茶を飲み込んでいたのである。お陰で喉の奥や舌が少し、火傷をしてしまったかもしれない。心なしか、視界もぼやけているようだ。

「ようやくこれで、落ち着いてきたな」

ルティナはカップ中のお茶を一気に飲み干すと、軽く息を吐きながらそう口を開いた。

彼女は全く表情も変えずに飲んでいた。しかもその後で三杯も、お代わりをしているのだ。

「上に居ると、こちらへ向けられる視線が気になって、かなり居心地の悪い思いをしていたからな」

と、ちらりとアレックスのほうを一瞥する。

ルティナも注目される原因が、彼だということには気付いているようだった。気付いていないのは、本人だけである。

「それより、ちゃんと説明をしてくれないかしら」

「ん？ ……ああ。」

あたしたちの出陣は、日の落ちる夕方頃だ。それまではゆっくりと、身体を休ませておくんだな」

「いえ。討伐隊ではなくて、モンスター・ミストの話よ。モンスター・ミストを破壊する、本当の理由が聞きたいの」

私は彼女の右目を真っ直ぐに見据えた。

「それは世の人々を助けたいと願う、善意の思いからではないか。さっき話していたことを、君は聞いていなかったのか？」

「じゃなくて……っていうかアレックス、今は黙っていて。ルティナと話しているんだから」

アレックスが言っている理由は、エドが吟遊詩人として話の内容を少し誇張し、いつもの思い込みで間違った認識をしているだけにすぎない。私はルティナの口からは一言も、そんな話を聞いてはいないのだ。

私はエドにも口を挟まないように言うと、意外にも二人とも素直に了承してくれた。

途中で彼らに口を挟まれると厄介なことになりそうだったので、先に釘を刺しておいたのだ。これで当分は大人しくしてくれるはずである。

私の真剣な眼差しを受け取ったルティナは、何かを諦めたような

表情で深い溜息を吐くと、自身の頭を左手でカリカリと掻いた。

「それはあたしが、あの中にいるヤツに用があるからだ」

「あの中っていうと、モンスター・ミストの中ということ？」

「そうだ」

私は一瞬黙り込んだが、直ぐに疑問に思ったことを口にした。

「さっきルティナは、モンスター・ミストの中にいるのが『魔物』だと言っていたわよね。何でそう言い切れるの？ その根拠は？」

私の質問で、今度はルティナが黙り込む番だったが、ややしてから重そうな口調で答えた。

「あんた、あたしの仕事を言ってみろ」

「へ？ 魔物ハンター……でしょ」

「それが全ての答えだ」

そう言うとき彼女は椅子の背もたれに身を預け、両腕を組んで再び黙り込んでしまった。目を閉じた彼女の次の行動をしばらく待ってみるが、それ以上の反応はない。

魔物ハンターは、魔物を狩るのが専門の職業である。

当然、私のような半人前の術士では知り得ない情報を持っているも、何ら不思議ではないのだが。

私はまだ、納得のいかない思いを抱いている。

とはいえ彼女の様子を見れば、これ以上の答えを聞き出すのは難しいだろう。

第33話 開門直前1

日も落ちかけてきた頃になって、私たちは村出入り口の集合場所に辿り着いていた。

ルティナの話によれば、日が山の向こうへ完全に隠れる瞬間が、私たちの出陣の合図だという。

周囲にいるのは、如何にも屈強そうな術士たちばかりだ。皆一様にして殺気立っており、私たちのような見習い風情の姿は流石に見かけない。

私は精霊術士だからまだ良いが、吟遊詩人であるエドは完全に場違いだった。

パーティ内で支援援護を担当している芸術士が、このような現場に参加することなど滅多にないのだ。芸術士が参加する場合は主に、ギルドへ戻ってきた術士たちを治療する、救護要員としての役割である。

そのように、かなり浮いた存在の私たちだったが、幸いなことに周囲では誰も気に咎める者などいなかった。恐らく皆、目の前にぶら下がっている餌のことしか見えてはいないのだろう。

討伐隊に参加するのは、その日暮らしのためや修行目的などといった理由が大半を占める。賃金はかなり安いを手軽に路銀を稼げるし、更にスキルアップを図るには丁度良い仕事なのだ。

ただし自分の身は、自分で守らなくてはいけない。

乱戦が予想されるからである。

個々の能力がある程度高くなければ、生き残れないというのだ。

「しかし人が多いな。エリス、君は大丈夫なのか？」

「は？ 大丈夫って、何が？？」

先程から落ち着きなく辺りを見回していたアレックスが、突然私に尋ねてきた。

「この人の多さでは、また迷子になってしまうぞ」

「だから私は迷子になって……」

「ご安心下さいアレックスさん！」

私の言葉を遮るようにエドが前へ出ると、自分の胸をドンッと叩き、自信に満ちあふれた顔をアレックスに向けた。

「僕がエリスさんの手をしっかりと握って離しませんからあゝ！！」

「どわっ、いつの間にッ！？」

下に視線を落とすと、例のカップルつなぎで手が繋がれているではないか。全くもって、油断も隙もない。

私は必死に振り解こうと試みてみるが、ガッチリと組まれた指は意外にも、簡単に外れなかった。最初の頃に比べれば何だか繋ぎ方が、格段に上手くなっているような気がする。

「うむ。でかしたぞ、エド！ これで一安心だな」

「ちよっと、何が一安心なのよ」

振り解くのを途中で止めて口を尖らせると、それを宥めるかのよう
にアレックスは私の両肩に手を置いた。

「エリス、君がエドを守ってやってくれ。この人数での戦闘では、エドの術が全く役に立たないだろうからな」

神妙な顔付きは崩さずに、澄んだ碧瞳をこちらへ向けてくる。アレックスでも流石にこの状況は、飲み込んでいるようだ。

「本来ならば俺がエドを守るべき役割なのだが……しかし未だ修行

の足りてない俺とでは、逸れる可能性のほうが高い。
それにエリス、君ならば防御術が使える。恐らく俺というよりは安全だろう」

確かに乱戦が予想される中で、他人を守りながら戦うというのは難しい。

しかしそれを言うのなら、いくら防御術が使えるとはいえ、私もアレックスと同条件のはずなのだが。

私がそのことを言うと、ここでルティナが口を開いた。

「あんたたちは、戦闘に参加しなくていい」

「え、どういうこと？」

「あたしたちの目的を忘れたのか。魔物討伐のために参加するわけじゃないんだぞ」

そういえばそうだった。

モンスター・ミストの破壊。これが当初の目的である。

「あんたたちは、あの方角へ真っ直ぐに向かうだけでいい。そこにモンスター・ミストがある」

ルティナの指差す方向を見れば、丁度日の落ちていく場所である。彼女は「真っ直ぐに向かうだけでいい」と簡単に言っているが、乱戦の中を潜り抜けなければならないのだ。戦闘に参加しないとはいえ、ただで済むはずがない。

「ルティナ……やっぱり私たちも、参加しないと駄目かな？」

「当然だ」

「けどその……非常に言いにくいんだけど私、今防御術しか使えない状態で……攻撃術が全く、役に立たなくなってしまったのよね」

私は思いきってルティナに告白してみた。

術士が術を使えないというのは、翼のない鳥と一緒にである。かなり恥ずべきことではあったが、手遅れになる前に言っておいたほうがいいと判断したのだ。

「知っている。昼間のあんたたちの戦いを、ずっと陰で見ていたからな」

彼女は腕を組んだままで胸を張り、偉そうな態度で堂々と言った。

第34話 開門直前2

しばらく彼女を凝視していた私は、静かに口を開いた。

「ルティナ……それって、胸を張って言うことじゃないわよ」

瞬間、彼女はバツの悪そうな表情をする。そして直ぐに、半眼気味の私から視線を逸らした。

「あたしは以前、あんたと同じような症状の奴に会ったことがあるんだ。

あたしの勘が正しければ、あんたは奴と同じ理由で一時的に、術が使えなくなっているだけだと思う」

「それ、どういう意味？」

「あたしが口で説明しても、ソレに気付いていないあんたには理解できないだろう。そういったものは、自分で気付いて直すよりほかないからさ」

ルティナの言っている意味こそ全く理解できなかったが、攻撃術が使えなくなった原因を知っているような口振りで話しているのは、間違いない。

私は勿論のこと、アレックスやエドの二人でさえ、腕に付けられた紋様を彼女には見せていないはずだ。つまり、そのことを知っているわけがないのである。

「それよりあんたたち、例の場所へ着いたら宜しく頼むぞ」

ルティナは私たちを見回すと、念押しするように言ってきた。

「そのことですが、ルティナさん」

エドがのんびりとした口調で、楽器を鳴らしている。

「僕とエリスさんは、結界術を破ることができませんよ」

その言葉を聞いた瞬間、ルティナの表情が凍り付いたかのように見えた。

そしてしばしの沈黙。
が、やがて。

「……何？」

「昼間の結界を破ったのはアレックスさんだけなのです」

「うむ、当然のことをしたまでだ。何せ俺こそが精霊に選ばれし、無二の者であるからな」

自慢げに胸を張るアレックス。逆にルティナのほうは、顔色が徐々に曇っていくようにも見える。

「おい、結界は三人とも破壊できるんじゃないかったのか？」

彼女は真顔で訊ねてくる。それに対して私は困惑し、眉を顰めた。

「は？ 一体どこ情報よ、ソレ。結界を破ったのはアレックス一人だけよ。」

少なくとも私には、そんな能力はないわ。エドは試していないけど、恐らく同じだと思うわよ」

「つまりこの男だけが、モンスター・ミストを破れるということなのか？」

「まあ……あなたの話だと、そういうことになるわね」

「な……」

彼女は私の言葉で、どうやら絶句している様子である。

理由は見当も付かないが、やはり私たちに對して、妙な勘違いをしていたようだ。

とはいえ、何をそんなに驚いているのだろうか。私からすれば、モンスター・ミストを破壊できるという話のほうが、驚愕するべきことであると思うのだが。

「あたしの聞いている話と……いや、あれは元々あの魔物おんなが……何故疑いもしなかったのか……やはり頭に血が……正常な判断が……」ルティナは額を押さえながら、何やら一人でぶつぶつと呟つぶいていた。

だが突然顔を上げると、決意を含んだような目で、私とエドのほうを見る。

「よし。それじゃあんたたちとは、ここでお別れだ。あたしはこの男だけを連れて行くことにした」

彼女はそう言って、アレックスの腕を強引に自分の方へと引き寄せる。

「なに、少しの間借りるだけだよ。あんたたちは街で大人しく待っているだけでいい」

私がそれに対して答える前に。

ピイイイッ！！！！

耳みみを劈つんざくような笛の音が、辺りに鳴り響いた。途端、目の前で閉ざされていた門が、ゆっくりと開かれる。

同時に、周囲もそれに向かって動き出していく。

その流れに逆らい、外からこちらへと傾れ込んでくる者たちもいた。私たちのいる部隊と交代するために、役目を終えて戻ってきた術者たちである。

私はあつと言う間もなく、交差するそれらの人々によって、揉みくちやにされていた。

ここから抜け出すには、もう既に手遅れだったのだ。

第35話 踏みつけられて？

ヴァイン・マオ・デユウ
「神風護壁！」

「エリスさん、こちらです」

私は防御術を掛けながら、エドの後に続いた。そして付近に生えている樹木へと隠れる。

既に周囲は闇に包まれていた。

村周辺には大勢の術士がいるので非常に明るかったが、私たちは外れのほうまで来ているので、灯りは自分たちで用意するしかなかった。

私は光属性で作った光球をいくつか周囲にまわりつかせ、光属性の武器を持つエドはそれを本体に灯しながら、二人とも慎重に歩みを進めていた。

当然、その間にも魔物には襲われている。

私は防御術で敵を弾き飛ばしては逃げるという行為を、その都度繰り返していた。

敵の不意をついて逃げるのは、かなり原始的なやり方である。同じ敵には一回しか通用しないし、確実に逃げられる保障もないが、かなりの割合で成功率が高いのだ。

他人から見ればワンパターンな方法だとは思いますが、私にとってはこれが最良の策なのである。

「……たく、次から次へと……」

一体これで、何度目になるだろうか。

私の息はもう既に切れ気味であったが、まだ文句を言うだけの余力は残っていた。

「僕がエリスさんに『アブソープライフをかけられれば』良いのですが」

「あれは！ アレックスにしか効かないものでしょうがっ！」

疲れているせいで、語気を強めて返答してしまった。しかしエドは特に気を悪くした様子でもなく、相変わらずのんびりと旋律を奏でていた。

彼は戦闘に参加していないとはいえ、私と一緒に敵から逃げ回っているのだ。そんな状況下で、よく落ち着いていられるものだと、こちらが逆に感心してしまう。

「ですが最近の僕の術『エリスさんたちにも少しは』効いていると思うのですが」。

この前ディーンさんに『僕の腕が少しずつですが』上がってきていると言われたんですよ」

「けど、直ぐに寝ちゃうでしょ」

「そうなのです。僕もまだまだ修行が足りなくて……」

と、何故かエドは空を仰ぎ見ながら呑気に言いかけたのだが、その瞬間、いきなり私を突き飛ばしてきた。

当然前に倒れる私。大量に落ちている落ち葉の中に思わず、頭を突っ込んでいた。

「ちよっ、何す——！？」

窒息しそうになった私は、直ぐに起き上がって抗議をしようとした。が、今度は背中に衝撃が走り、またもや倒れ込んでしまう。

「ちいっ！逃がすかっ！——！」

その背中の遥か頭上から、怒声が聞こえてきた。

「ぎゃああっ！」

悍ましいほどの鳴き声とともに、慌ただしく動かしているかのような羽音も、直ぐ近くから聞こえてくる。

程なくして羽音と足音は、同時に遠ざかっていった。

一方私はいえ、背中から伝わってくる激痛と、上から押さえ付けられているかのような圧迫感のせいで、身動きが全く取れなくなっていた。

私は何者かにより、後ろから背中を思いっきり踏みつけられたのだ。

恐らく他の術士だとは思いますが、向こうはこちらのことなど全く眼中にない様子だった。顔は確認できなかったが、その声の雰囲気から容易に察することができる。

このような状況なので、当然と言えば当然だった。だからそのことに關しては、全く腹は立たなかったのだが。

「ふー、危なかったですねえ」

エドが安堵の溜息を漏らす声が聞こえてきた。

「危なかったって、あんた……私を突き飛ばす必要なんて、なかったじゃない」

突き飛ばされたお陰で、通りすがりの術士に背中を踏みつけられ、痛い思いまでしたのである。

「いえー、狙われていたのは僕たちですよー」

第36話 空からの攻撃

「は？　どうということ？？」

「先程真上で、殺気のようなものを感じたのです。さすがエリスさんは気付いていないようでしたので、咄嗟の判断で突き飛ばしました。」

僕の行動が、あと少しでも遅れていたのなら、攻撃を受けていたところでしたよ。」

私は空を見上げてみた。

そこには満天の星空が見渡す限り広がっていたが、その奥では何やら蠢く影が。

飛行型の魔物が何体か、上空を旋回しているのだ。

魔物は当然地上だけでなく、空からもやってくる。

しかし鳥類に属する飛行型の大半は夜目が利かないため、魔物としては珍しく、夜間は殆ど行動をしない。それに例え昼間であったとしても、地上へは滅多に下りることがなかった。

だがここには現在、モンスター・ミストがある。通常であれば下りてこないにしても、それを嗅ぎつける鼻はあるはずだ。

村周辺では上空を見張っている術士や騎士たちがいるので、比較的安全ではあった。しかし集団で襲ってきた場合には、流石に一般人も避難せざるを得ないだろう。

それなのに、未だ避難勧告が出されてはいなかった。ということは、そのような気配がまだないということでもある。

「攻撃されそうな感じがしないんだけど」

魔物は遙か上空で旋回しているだけだ。今のところ下りてくる様子がない。

「僕が殺気に気付いて空を見上げた時、先程の魔物がエリスさんに向かって、物凄いスピードで落下してくるのが、見えたのです。その時に林の向こうから、槍が飛んで来て、一瞬で仕留めたのですよ。」

しかし攻撃が、どうやら浅かったようです。

致命傷を負わずに、魔物のほうはそのまま逃げていったらしく……」

私はエドの話を前半、半分くらいしか聞いてはいなかった。しかし大体の状況は理解できている。

つまり飛行型の魔物がこちらに向かって、一直線に降下してきたというのだ。

辺りの木はもうすっかり葉も落ち、上空を遮るものなど何もなくなっていた。飛行型がこちらに気付いても、おかしくはない状況である。

それをたまたま近くにいた術士がを見つけ、武器を投げつけてきたのだ。

その種類からして、恐らく「スピアラ（槍術士）」だとは思いますが、私を助けたというよりは寧ろ、降りてくる魔物に偶然気付いたために、攻撃を仕掛けてきただけのような気がする。でなければ通り道にいた私をわざわざ、踏み付けて行ったりはしないだろう。

「それよりエド、よく殺氣のことに気が付いたわね。私には何も感じられなかったわよ」

私は彼の説明を途中で強引に遮ると、話題を変えて訊ねた。

「それは僕たち芸術士とくエリスさんたち一般的な術士とはく鍛え方が違うからですよ」。

何故ならエリスさんたちがく相手に直接作用できる能力にく重点を置いて鍛練を積むのに対してく僕たち芸術士はく場の気配などを読む能力――即ち『感性』を重点的にく鍛えているのです」

(……そういえば)

私が本格的に修行を始める前に、父から注意を受けたことがあった。

一般的な術士は視覚的能力を主に養っていくが、芸術士は目に見えない力――感覚的な能力に重点を置いて修行をする。そのため、希望する術士の選択は慎重に……などというようなことを言われたのだ。

他の術士は修行初期段階であれば、種類を途中変更することも可能だ。しかし芸術士の場合は根本的に修行方法が違うので、私たちが途中で芸術士に変更――或いはその逆も然り――することは、例えば修行初期であっても容易にはできないらしい。

私の希望は最初から精霊術士だった。だから選択時において迷うことが一切なかったので、この話を今まですっかり忘れていた。

「ですからエリスさんがく例え感知できなかったとしてもく仕方ないのです」

と唄いながらエドは、素早く横に移動した。

私も同時に彼の前に移動しながら、術文を唱える。

彼の背後から黒い影が、躍り出てくるのが見えたのだ。それと一緒に放たれている殺気も。

このくらいなら、私にも直ぐに感知できる。

「ここに長時間留まっていたら危険ですう」

「ええ、そのようね。早く目的地へ急ぎましょう」

魔物を弾き飛ばした私たちは、奴が追いかけてくる前に急いでその場を離れた。

第37話 敵襲、再び！

「で、ちゃんと目的地には向かっているんでしょね」
私はここで、エドに向かって訊ねていた。

辺りを窺いながら慎重に歩いていた私だったが、途中で心配になったのだ。

星明かりと光球で足元が見える程度には明るかったが、道の向こうまでは照らし出すことができない。この先は闇が広がっていて何も見えないし、道標さえもない。

この状況で果たして無事に、目的地へ辿り着けるという保障はあるのか。

「ではこの辺りで確かめてみることにします」
彼はそう言いながら自分の懐付近を、何やらゴソゴソとまさぐり始めた。しかし突然その手を止めると、私を覗き込むようにして顔を上げる。

「そういえばエリスさんは方位を感知できるような術って使えますか？」

「……え」

突然何を言い出すのだろうか、この男は。

私がしばらく何も答えないでいると、再度訊ねてきた。

「どうされました？ 使えるのでしょうか？」
「う……いや、ええっと……」

私は口籠もっていた。

それは方角を指し示すだけという、ごく単純な初歩の術である。それを使えないと言うのは、かなり恥ずかしいことなのだ。

「アレはその……私には合わない術っていうか……だから……ええと——」

「やっぱり方向音痴のエリスさんではく使えないんじゃないかとく思っていましたよ」

私の渾身の言い訳を最後まで聞かず、何故か納得したかのように頷きながら、エドはいつもの笑顔をこちらに向けてきた。

……ああ、このニマニマ顔を踏みつけたい。

「ですが、ご安心を。僕は良い物をく持っているのです」

続けて胸を張って取り出したのは、一枚の薄いカードだった。

「あれ、これって……」

スピリットカード

「そうです。精術札なのです」

『精術札（スピリットカード）』。

この術札には——例えば「火をおこす」「風をおこす」などといった、ごく単純な精霊術が封じられていた。しかも一般的な雑貨屋の店先へ並んでおり、属性の精霊石さえあれば術士でなくても、手軽に使用できる魔術道具の一種である。

但し攻撃術などのような、強力な技は使えない。それに一回限りの使い捨てなので、無駄遣いができないというのも難点だった。

「これはく方位探査用の術札です。僕が巡礼に旅立つ時にく両親

が餞別として何枚かゝ持たせてくれました。

エリスさんたち精霊術士もゝパーティに居ますしゝその間は使うことがないと思ってましたがゝ、まさかここで役に立つとは思いませんでしたよゝ」

最後の言葉は方位探査術を使うことの出来ない、私に対する嫌味なのだろうか。普段通りの歌声からでは、真意がさっぱり読めない。

「というわけでエリスさんゝ、土属性精霊石をゝ貸していただきたいのですがゝ」

「へ？ 他の石、持ってないの？？」

「旅の必需品としてゝ一通り持ち歩いてはいますがゝエリスさんたちと一緒に行動しているのでゝ他の荷物と一緒にゝ迂闊^{うかつ}にもゝ宿屋へ置いてきてしまいましたゝ」

エドは相変わらず、へらへらと明るく笑いながら言ってきた。

確かに精霊術士が傍に居るのなら、術札を使う機会は殆どないかもしれない。しかし私とはぐれてしまった時には、一体どうするつもりだったのか。これはかなり迂闊すぎる。

「あんた……仮にも私たちは、討伐隊へ参加しているのよ。いざという時の必需品が使えなくて、どうするのよ」

私は呆れつつも、腕輪^{ブレスレット}から石を取り外してエドに手渡した。

彼は描かれている紋様を表面にして地面へ置くと、重石のように石を乗せる。

更にその上に指先を触れさせた。すると一瞬だけ周囲の気が、僅かに動いた。

直ぐにエドが精霊名を唱えると、彼を中心にして地面から光の円が現れ出でる。

外縁の一端が四方へ伸び、その末端部分に古代文字^{ルーン}も浮き出てき

た。この文字は学校や修行での必修科目だから、ある程度のものならば私でも読めるものだ。

「この方角からすると、ルティナさんの仰っていた方向は、こちらになりますね。」

エドは私に石を手渡しながら、右方向へ人差し指を突き出した。

「それじゃ、新たな魔物が現れる前に、早く目的地へ急ぎましょう」

「エリスさん、そちらは違いますよ。こちらです。」

「あ、そうなんだ」

何故かは分からなかったが、左方向へ身体が勝手に動いてしまった。私だって、たまには間違えることもあるのだ。

「この辺りには、あまり魔物がないようですね。」

「多分、他の術士たちが外側で、押さえているからかもしれないわね。村周辺では特に、かなりの乱戦だったものね」

「アレックスさんのほうは、大丈夫でしょうか。」

「そうね。私たちでさえあの中を抜けてくるのは、大変だったもの」

「ルティナさん、と、一緒に良いのですが。」

「それはどうかしら。あの混雑で既に、はぐれているかもしれないわよ」

「そうですね。僕もエリスさんと手を繋いでいなかったら、はぐれていたはずですから。」

確かにそうである。

エドと手を繋いでいなかったなら、今頃は一人で途方に暮れていたことだろう。たまにはアレックスのアイディアも役に立つようだ。

「ですが、アレックスさんがちゃんと目的地へ辿り着いていれば

「何とかなると思うんですけど」

「だからそれが、一番の問題なのよ。当初の目的を途中で忘れて、あの中で戦っているかもしれないでしょ」

「あのアレックスさんですからもしかしたら大丈夫かもしれないです。何と言っても英雄の末裔ですし、『精霊の加護』も守ってくれているはずですから」

アレックス崇拝者であるエドは、力強くそう断言した。根拠はなに等しかったが、その言葉は今の私には心強かった。

「そうよね。あの殺しても死にそうにないアレックスだもの、きっと大丈夫よね。それに無事でいてくれないと困るわ。でないと、ディーンに合わせる顔がないもの」

ディーンは私たちを信頼して、一人で討伐隊に参加したのだ。それなのに私たちも参加した上に、彼にもしものことがあれば、ディーンに顔向けができない。

今私たちは祈るような気持ちでアレックスのことを信じ、ルテナの指示した場所へ向かうしかなかった。

あの乱戦の中で探すよりは、目的地へ直接向かったほうが、合流できる確率も高いと判断したのだ。但し先程も述べたように、彼が目的地へ向かうのをすっかり忘れ、途中で寄り道をしてさえないなければ、の話だが。

「そういえばディーンさんとは一度も会うことがありませんでしたね。ディーンさんのほうは？大丈夫なのでしょうか」

「ディーンのほうなら、恐らく大丈夫でしょ。私たちの部隊とは別部隊なのかもしれないし。」

それに彼は私たちとは違って、旅をしていた頃に、何度も討伐隊へ参加していた経験があるって言っていたもの。きっと心配いらない

わよ」

彼は巡礼初心者の私たちとは違う。或いは私たちがいないほうが、思い切り戦えるのかもしれない。

「それもそうですねえ。僕たちがく心配するようなことではくな……」

と、エドは言いかけたのだが、突然私を突き飛ばしてきた。
またもや、である。

「ちよっ……今度は何——!？」

落ち葉の上で四肢をついた私は、再び抗議の声を上げながら肩越しに振り返る。すると、私が先程まで立っていた地面の落ち葉が、下から勢いよく吹き上げられるのが目に入った。

それらは天高く舞い上がると、間もなく引力で下へと落ちてくる。このままでは落ち葉まみれになることによりやく気付いた私は、慌ててその場から離れた。

「くくく……よもや二度までも回避されるとはな」

不気味な笑い声とともに現れたのは、昼間私たちを襲ってきた魔物だ。但し今はその形態ではなく、最初に遭ったときのように人間の姿に変化している。

「あんたは確か……ボンバー!!!!」

その姿と声が現れた途端、私は思わず指を突きつけていた。
しかし。

「ボンバー……とは何だ」

「あ、あれ、違った? ……じゃあ、レバー!」

「……だから何だ、ソレは」

「と、これも違うか。ええい、それなら、ビバ!!!」
「……………」

魔物は険しい顔付きで、私を睨んできた。そこから、無言の威圧感が感じ取れる。

その様子から私は確信していた。

適当なアタリで名前を言ってみたところ、全てがハズレだったという事実を！

（そういえば、もう一匹はどうしたのかしら）

昼間は二匹いたはずだが、私の見た限り、ここにいるのは一匹だけだ。

だが油断はできなかった。

ただ姿を見せていないだけで、こちらの様子を何処からか窺っているのかもしれない。もしかしたらこの魔物と同様に、地面の下へ潜んでいる可能性もある。

私が緊張感を崩さずに魔物の行動を見守っていると、短剣数本を懐から取り出すのが見えた。
そして。

問答無用でこちらへ突進してくる。

第38話 辿り着いた場所

精霊術士が身の危険を感じた時、咄嗟に出てくるのは普段使い慣れている術文である。

だからこの瞬間で私が唱えるであろうものは、本来ならば先程まで使いまくっていた、風属性シールド防御術であるはずなのだが。

ヴァン・ヴォレ・ヴィン
「烈風天駆！」

瞬時に口をついて出てきた言葉は、意外にも予想に反したものだ。った。

これはただ強風が吹き荒れるだけで、殺傷能力も皆無に等しい術文である。つまり戦闘時においては、あまり役に立たないのだ。

しかも攻撃術でもあるため、今の私では普段の能力が出せない。それなのに何故出てきたのか、言った瞬間に自分でも戸惑っていた。

自分の過ちに気付いた私は、思わず目を瞑る。
だが。

聞き慣れた轟音が耳許で唸っていた。

「エリスさん、今のうちに、こちらですう！」
それとともに聞こえてくる高音ボイス。

弾かれるように開けたその目で見たものは、落ち葉のように上空へ舞い上げられている魔物の姿だった。

私はその光景で再び、呆気にとられそうになっていた。が、今が逃げるチャンスだということによりやく気付くと、エドから放たれる光に向かって夢中で走り出していた。

いつもの術力だった。

咄嗟のことだったので加減が出来ず、出力時には強い負荷がかかっていたはずだ。

その手応えを確かに感じていた。

つまり私の術力が、いつの間にか戻っていたのである。

『一時的に、術が使えなくなっているだけだと思う』

彼女の言葉を思い出す。

本当に一時的なものだったのだろうか。それとも偶々、使えるようになっただけなのか。

何れにせよルティナには、後で詳しく訊いてみなければならなかった。しかし今は逃げることに専念しなければならない。

息が上がってくる。意識も朦朧として、前もよく見えなくなってきた。

いつ背後から攻撃をされるのか分からない。敵がどのくらいの距離まで縮めてきているのか、それを確認する余裕さえもなかった。

心臓から伝えられる鼓動が、有り得ないくらい速さで動いているのが分かる。それでも今の私は余計なことを考えず、限界まで足を動かすしかないのだ。

だが自分の意に反し、地面へ向けて身体が傾いていた。

どうやら何かにつまずき、足がもつれてしまったようだ。直ぐに体勢を立て直そうとしたが、疲れ切った身体ではどうにもならなかった。

そのまま勢いよく倒れ込む私。顔面から滑り込んだために皮膚を擦り剥いてしまったが、そんなことに構っている時間はない。

私は起き上がろうとした。が、焦る気持ちとは裏腹に、一度崩した身体は、言うことを聞いてはくれなかった。
しかし。

「……は……あれ？」

私は異変に気付き、顔を上げた。そして肩で息をしながら辺りを見回してみる。

周囲の闇が一面、いつの間にか白濁色に変化していたのだ。

おまけにエドの後ろ姿も見失っていた。後方にいた敵の姿も見えなくなっている。更に先程まで宙一杯に広がっていた星々までもが、この白濁色に遮られているかのように確認できなかった。

だが唯一、周囲に樹木が生えていることだけは分かる。

この突然の異常事態で、私はいつの間にか冷静さを取り戻していた。

私は息を整え、やがてゆっくりと起き上がる。そして付近に生えている樹木の感触を確認しながら、改めて恐る恐る辺りを見回してみた。

「一体、どうなっちゃったの？」

エドは何処へ行ってしまったのか。

敵も何処へ消えたのか。

耳を澄ませてみるが、生き物の気配がまるで感じられなかった。この世にたった一人、自分だけが取り残されてしまったかのような感覚だ。

どうしてこんなことになってしまったのか。先程まで夢中で走っていた私には、状況がさっぱり分からない。

「ええと、確かエドと一緒に、走って逃げていたのよね」

私はわざと大きな声で確認してみた。声を出していないと、とてつもない不安感が襲ってくるような気がしたからだ。

「で、それからどうなったんだっけ？」

私は首を捻ってみた。

知らない間にエドと敵が消え、周囲が闇から白に変化している。その原因を頭の中で探してみたが、一向に解決できなかった。しばらくその場で考え込んでいた私だが。

「……仕方ない。エドを探すか」

考えても分からないのなら、先へ進むしかない。

そう判断した私は、樹木を辿りながら進むことにした。

恐らく先に行けば、エドと合流できるはずだ。

根拠のない一筋の希望を胸に抱きながら、私はそれを支えにゆっくりと歩き出していたのだが――。

不意に視界が広がる。

そこは辺り一面、赤や青、黄色に紫ピンクなど、色とりどりの名も知らない花が無数に咲き誇っていた。気が付けば、周囲を取り巻いていた白濁色のものが消えている。

「花？ この時期に??」

私は眉を顰めていた。鮮やかな花々が今の寒い時期に、咲くはずがない。

しかも————。

「何で昼間？」

上空には雲一つない青空が広がっている。辺りも明るい。

今は「夜」のはずなのに、だ。

周囲にはこの色彩空間を取り囲むように、青々とした樹木も立ち並んでいた。この光景を見れば、少しくらいは暖かくても良さそうだが、妙に肌寒かった。

私は戸惑っていた。が、今の状況を把握しておかなければ、何も解決はしないのだ。

そう自分を奮い立たせた私は、足首ほどの高さに咲く野花を踏みしめ、慎重に歩みを進めていた。

だが何故だろうか。

足を一步前へ出す度に、全身が重くなっていく。視界も徐々に狭まってきているようだ。足取りさえも覚束無くなっている。

気が付くと私は、咲き誇っている花々へ顔を埋めるようにして、地面に倒れ込んでいた。

全身に力が入らない。それに起き上がるという気持ちも、何故か全く湧いてはこなかった。

（あー、このまま寝ちゃおうかなあ）

いろいろと面倒くさい。大体こうやって、考えること自体が面倒

だ。それにこの体勢も、何だか妙に心地良い感じだし。

私は柔らかいクッションへ身を委ね、そのまま眠りに入ろうと目を閉じたのだが。

「やはり人間か」

頭上で声が聞こえてきた。

第39話 悪夢（前書き）

第4章 追跡者2（ルティナ編）

第39話 悪夢

炎――。

辺り一面、火の海だった。

幼いあたしがその中を彷徨っている。

（お父さん、お母さん……何処？）

あたしは何度も瓦礫につまずき、充滿している煙で噎せ返りながらも、両親の姿を探し求めていた。

その最中、破片が何かに引っ掛かったのだろう。既に片方の靴が脱げ、足の裏も血だらけになっていた。

歩く度に痛みも伴ってきた。だがあたしは、沸き上がってくる不安感とともに、小さな身体で必死に耐え続けている。

しばらくすると、煙の隙間から黒い影が姿を現してきた。

少し浅黒い日焼けした肌に、漆黒の流れるような長髪。彫りの深い端正な横顔。

見知った顔だ。

ゼリユー。

一人心細かったあたしは安堵して、その男に駆け寄ろうとしたが、ここで異変に気付く。

彼はそこへ佇んだまま、足元をじっと凝視していたのだ。

視線の先を何気なく辿ったあたしは、それが視界に入った途端、足を止めていた。

そこには折り重なるように倒れている、両親の姿があった。側にいる彼の指先からは、滴り落ちる赤い液体。

一体何が起きているのか分からなかった。ただ頭が混乱して、そこで制止しているだけだ。

だが気付いてしまった。

ヤツの背に、黒い大きな翼が生えていることを。

(――!! 魔物!!?)

魔物なら見たことがあった。行商人である父の雇った護衛術士が、あたしたちの目の前で戦っていたからだ。

それらは全てヒトとは違う、異形の姿をしていた。そして人間に変化する魔物がいることも、以前から話には聞いていた。

ゼリユーはヒトのような容姿をしていた。しかし人間には翼が生えていない。

その上『人間』だった頃にはなかった、刺青のような模様が、頬

付近に浮かび上がっている。

不意にヤツが、ゆっくりとこちらに顔を向けた。

真紅の双眸。

今までに見たことのない、射貫くような冷たい瞳。

いつも優しく微笑みかけてくれる、そんな眼差しではない。
それ以外を、あたしは知らない。

目があった途端、あたしは急に恐ろしくなった。思わず後ろへ身を動かしていた。しかし落ちていた瓦礫に足を取られ、転んでしま
う。

この場から逃げ出したかった。だが身体は動いてくれない。
そこには両親の姿が見える。もう動かないであろうことは、幼い
あたしにも直感で分かっていた。

——それをやったのは誰だ。

殺したのは誰だ。村を焼いたのは誰だ。

……誰だ……誰だ……——。

「っ！？　ぐ……っ」

熱い……。

……痛い！

あたしは声にならない悲鳴を上げながら、左眼を押さえてその場

へ蹲っていた。何か異物のようなものが暴れ出し、そこから強引に這い出してこようとでもしているかのようにだった。

……助けて。

痛いよ。

お父さん、お母さん――。

先程の光景が浮かび上がってくる。

これはきつと夢だ。悪い夢だ。

目が覚めれば、そこにはいつものように両親が居る。

あたしの頭を撫でながら「もう大丈夫だよ」「お父さんたちが居るから、安心していいんだよ」と言ってくれる。

気付いた時あたしは、両手首を強い力で押さえ込まれていた。はつきりしない頭で、それを眺めていた。

痛みと熱さで意識が朦朧としている。

虚構と現実の認識が曖昧になっていた。視界も真っ赤に染まっていた。

だが視線は、手首を掴んでいる腕に傾けられていた。それを辿るかのように、ゆっくりと顔を上げる。

殺したのは誰だ。

村を焼いたのは――。

「――ナ………さいよ」

強い力で揺り動かされたあたしは、突然現実に戻された。
「もう出発する時間なのよ」

目の前には覗き込んでいる彼女――エリスの顔があった。
あたしは左眼を押さえながら、むくりと起き上がる。手の平に当たっているのは、いつもの感触。

「ちょっと、あんたたちもほら、さっさと起きなさい」
彼女は直ぐに場所移動をすると、狭いソファで折り重なるように、仰向けで寝ている二人のことも起こしにかかっている。

だが二人――アレックスとエドは、強く揺さぶられていても、一向に起きる気配がなかった。
一体どんな夢を見ているのか。二人とも幸せそうな顔でスヤスヤと、気持ち良さそうに熟睡していた。全く呑気な奴らだ。

エリスが揺すっていた手を、ぴたりと止める。そして息を静かに吸い込み、深く吐き出したかと思った瞬間。

「はっ!!」

ドゴッ!!!!

気合いを入れるかのような掛け声とともに、二人の顔面へ両拳を垂直に、勢いよく振り下ろしたのである。

流石のあたしでも、その光景には目を疑っていた。

何故なら彼女の正拳突きが、素人にしてはかなり綺麗に決まっていたからだ。

——て、いや！ ……勿論、そんな理由ではなく。

彼女は何処にでもいるような、普通の少女にしか見えない。乱暴な行動を起こすとは思えないほど、外見上では十代半ばくらいのごく平凡な少女だ。

「おい、どんな起こし方をしているんだ。二人とも鼻から流血しているぞ」

「あら、手っ取り早く目覚めさせるには、この方法が一番効果的なよ。

故郷ではこのやり方で、なかなか起きてくれない父を毎朝起こしていたし。

でもシーツも汚れちゃうから、毎日の洗濯が大変なのよね」

振り向いたエリスはにこやかな表情で、平然とそんなことを言うてきた。

これでは娘に起こされる父親のほうも、毎日が災難だ。永遠に目覚めなかったらどうする——というようなことを、彼女は考えたことがないのだろうか。

（てことはまさか、あたしもさっき目覚めていなかったなら……）

ようやく目を覚ました彼らを眺めながら、まだぼんやりしたままの頭で考える。

第40話 出陣前

（それにしても）

あたしは隣にいるエリスを横目で一瞥した。彼女は先程から術士たちの集まっている人混みを、物珍しそうに眺めていた。

（あんなに討伐隊への参加を嫌がっていたわりには、時間になったらきっちり起こしていたな）

昼間魔物の結界が破壊された時、あたしはこの三人の誰かがやったのだと確信した。

あの中にいたのは、あたしと戦っていた魔物二匹以外には、彼女たちしかない。結界を破壊する瞬間は見えていなかったが、それに間違いはないだろう。

だからあたしは無理矢理、三人を討伐隊に参加させることにした。我ながら多少強引な方法だったとは思うが、今のあたしには手段を選んでいる余裕がなかった。

討伐は朝昼晩、三交替での編制となる。今回現れたモンスター・ミストが、それほど大きなものだということだ。

あたしたちの出発は夕方だった。本当ならば、魔物の行動力が比較的鈍る「朝」の出陣が良かったが、こちらには選択権がないため仕方がない。

それまでの間に少し時間があったため、あたしたちは宿屋で仮眠を取っていた。

宿はこの前ギルドに紹介してもらった、喫茶店のマスターが兼営している所だ。他の宿屋は満室だったが、そこは店の看板が目立つ場所へは掲げていないためか、運良く空き室があった。

「ねえ、ルティナ」

あたしが腕を組んでじっと考え事をしていると、エリスが不意に話し掛けてきた。

「さっき何だか酷くうなされていたようだったけど、もう平気なの？」

「さっき？ ……ああ、それなら大丈夫だ。心配はいらない」

「そう。なら良かった」

エリスは心配そうな表情から一転すると、いつもの少女らしい柔らかな笑顔に戻っていった。

彼女は世話好きなのか、ただお人好しなだけなのか。どちらなのだろう。

いや、余計な詮索は止めておこう。

あたしはこれから彼女たちを利用し、ヤツの元へと乗り込まなければならぬ。

ヤツにはいろいろと訊きたいことがあったし、最終的には戦うことになるはずだ。

上位クラスとは真正面から殺り合ったことはなかったが、勝てる見込みは皆無に等しかった。しかしいつかは対峙しなければならぬ相手でもある。

だからなのだろう。

先程あんな夢を見てしまったのは。

「——だからね、いくら私が防衛術を使えたとしても、あの中で戦うことは初心者私では難しいのよ」

エリスがアレックスに対して、何やら言い聞かせているような声が聞こえてきた。途中の会話を聞いてはいなかったが、何か揉めているのか。

あたしはここで口を挟んだ。

「あんたたちは、戦闘に参加しないでいい」

その言葉を聞いたエリスは、大きな翠瞳を更に見開き、こちらを凝視してきた。その表情から「何で??」という問い掛けが聞こえてきそうだった。

やはり彼女は自分たちが討伐隊に参加する、当初の目的を忘れているらしい。これはどうやら、それを思い出させる必要があるだろうだ。

しかし脇からエドが、陽気な音楽を鳴らしながら言ってくる。

「僕とエリスさんは、結界術を破ることができませんよ」

その言葉の意味を理解するのに、数秒の刻を要した。

「おい、結界は三人とも破壊できるんじゃないのか?」

あたしの問い掛けに、エリスも即座に否定する。

サラはあの時に言っていた。

『結界を破壊できるのは、その三人』だと。

だがよく考えてみれば、奴は魔物だ。あたしに対して真実を言うとは限らない。或いはその情報自体が、何らかの罠だという可能性もあった。

何故そのことに今まで気づきもしなかったのか。魔物ハンターである、このあたしが。

本来なら魔物の言葉など、耳を貸さないが普通だ。その時のあたしは、ヤツを倒すことだけで頭が一杯になり、正常な判断力が鈍っていたのかもしれない。

だが今更そんなことを考えていても仕方がなかった。

もう後戻りはできない。それにあたしには、どうしても成し遂げなければならぬことがある。

例えそれが罨だとしても、前へ進むしかないのだ。

第41話 魔物の霧1

「ルティナよ。俺たちはいつまでコソ泥のようにコソコソと、隠れていなければならぬのだ?」

「あと少しの辛抱だ。目的地は直ぐそこだからな」

あたしは辺りを警戒しながら、アレックスの質問に答えた。

今のあたしは彼と行動を共にしている。他の二人のことは、既に見失っていた。

最初はこの三人の中で、誰か一人でも目的地へ辿り着くことが出来れば良いと考えていた。

しかしそれはあたしの思い違いで、結界を破壊できるのは彼だけだと言う。だから門が開く直前で、咄嗟にアレックスの腕を掴み、手を離さなかった。

何故なら三人の中で一番信用できないのが、この男だったからだ。それは今までの彼らの会話を聞いていれば分かる。

そしてあたしの勘は、やはり正しかったらしい。

外へ出たと同時に彼は率先して、侵入しようとしている魔物と戦い始めていた。

それだけであれば、まだ良かったのだが。

放たれる魔物の術を、何もせずに跳ね返していた。

無論、術文も精霊石も使用せずに、だ。

長年魔物ハンターをやっているあたしだが、このような人間に出会ったのは初めてだった。

もしあたしが彼の能力を知らなかったなら——そしてこの左眼が

なかったならば、真っ先に「魔物」だと疑っていたはずだ。事実、周囲で戦っていた術士たちがそれを目撃した途端、一斉にこちらへも攻撃を仕掛けてきた。

「しかしこれくらいの怪我、俺には根性でどうとでもなるのだがな」
「脂汗を流しながら何を言っている。痩せ我慢も程々にしないと、後で痛い目みるぞ」

左腕上腕部を押さえながら、汗を額に滲ませている彼を横目で睨み付けた。

術士たちが攻撃を放った際、その中の光の矢がアレックスの肩を掠ったのだ。

そこは防具に覆われていない『継ぎ目』と言われる部分で、術は丁度そこを通っていったらしい。

破れた服の下には青痣が覗いており、大きく腫れ上がっていた。上から軽く押しただけで彼の顔は歪み、その感触で骨が折られていることに気が付いたのだ。

しかしあの時、術は確かに腕を掠っていた。直撃はしていない。それはあたし自身が証人だ。

だが何故か皮膚は裂けずに、中の骨だけが綺麗に折られている。

彼の話では「人間の術に掛かりやすい体質になっている」らしい。世の中にはそういう人間も確かにいるが、掠っただけでそこまでの効果があるのだろうか。とはいえ「結界を破壊できる能力」も聞いたことがなかったから、強ち嘘ではないのかもしれないが。

「う……むむむう……これしきのことで悔しいが、俺もまだまだ修行に精進せねばなるまいな」

その辺に落ちていた棒きれで固定している腕を押さえ込みながら、

アレックスは悔しそうに顔を歪ませていた。

しかしそれもつかの間。腰に携えている剣を直ぐに引き抜くと、右腕を高々と掲げて宣言する。

「だが！ 俺は諦めないぞ。

例え腕一本へし折られていたとしても、奴らを倒してみせる！
それが精霊に課せられた、英雄としての俺の使命だっ！！」

「待て待て待て。その前に、誰かが来るようだ」

あたしは今にも、勢いで飛び出そうとしている彼の襟首を捕まえ
ると、そのまま奥へ引き摺り戻した。そして後ろから口を塞ぎなが
ら、身体を羽交い締めにする。

ここで誰かに見つかるのは面倒だった。先程のような事態は、成
るべくなら避けたい。

今回あたしが討伐隊に参加した目的は『モンスター・ミスト』の
中に入るため、そしてヤツを倒すためだ。余計な戦闘で、体力や時
間を取られたくはないのだ。

程なくして、金属の触れ合う音と、人の話し声のようなものが聞
こえてきた。

「この付近で、人間に変化した奴も潜んでいるらしいぞ」

「ああ。本人は人間のつもりらしいが、どうやら人間離れした容姿
の奴らしい」

（人間離れ……）

あたしは腕の中で抜け出そうと必死に藻掻いている、アレックス
の後頭部を見上げた。

確かにこの顔立ちならば、人間離れしているとは言えなくもない
が――。

その声主たちは、互いに短い会話を交わし終えたと、それぞれ相手にしている魔物と戦いながら左右へ散っていった。

（もう既に、変な噂が広まっているようだな）

このような場所であっても、術士同士で互いの状況を交換し合い、戦闘を進めていくことも珍しくはない。無論、余裕のある状態でなければ出来ないことはあるが。

「いきなり押さえ込んでくるとは、非道いではないかっ！」

あたしの腕からようやく抜け出せたアレックスは、早速抗議をしてきた。

第42話 魔物の霧2

あたしは着ている道着の内ポケットから、光属性精霊石と『精術札』^{カード}を取り出した。そして石を重ね合わせ、意識を瞬間的に集中させる。

精霊名を唱えると同時にカードが消え、代わりに光球がひとつだけ現れた。

「ほら、目的地が見えているぞ。すぐそこだ」

彼の抗議を軽く無視したあたしは、浮遊させているソレを前へ掲げてみせた。アレックスは「む…そうか」と呟きながら、釣られてそちらを見遣る。

前方一面、広い範囲にまで広がっている白濁色の濃い霧。木々の隙間から光球に反射し、その姿をくっきりと浮かび上がらせていた。それがモンスター・ミストだ。

あたしはこの方向から、ずっと強いエネルギーを感じていた。近づくにつれ、あたしの眼の疼きも徐々に強くなっている。

下位クラスの魔物が集まってくるのは、その影響であり本能的なものだ。

とはいえ、この付近で魔物が彷徨っている様子はなかった。ここへ辿り着く前に、投入されている他の術士たちに狩られているからだ。

それに見張りの騎士も居ないようだ。もっとも、今までも見張りを置いていなかったから、今回も居ないだろうとは思っていたが。周囲では術士が戦っており、この場所へ近付く魔物やヒトも殆どいない。仮にいたとしても、両者とも霧の中へは入ることができな

いのだから、余計な人員を割いてまで見張りを置く必要がないのだ。

「成程。これが例の何とかミストとかいうやつか」

アレックスはモンスター・ミストの前へ立つとしばらく観察していたが、おもむろに右手を前へ突き出した。

するとそれを中心にして、霧は逃げるように外側へ弾かれていく。

その部分だけ穴が空くような形になった。昼間戦った魔物の結界は完全に破壊できたが、どうやらこの場合、そこまでには到っていないようだ。

だが中へは入れそうだった。それだけでもあたしには十分役に立つ。目的はあくまでも、中に居るヤツを倒すことだけだからだ。

——と、背後の森から爆発音のようなものが聞こえてきた。

かなり近い。何処かの術士が付近で、戦っているのかもしれない。

「よし、俺も加勢に行くぞ！」

「って、待ていッ！ こっちの仕事のほうが最優先だ！！！」

同じように音を聞き付けたアレックスが、早速駆け出そうとしたが、寸前で押しとどめた。なんて血の気の多い男だろう。

「む、仕事だと？ 俺に何をさせるつもりだ」

「簡単なことだ。そこから後ろへ移動してみてください」

「？ ……こうか？？」

彼は言われるまま素直に移動した。丁度霧の中へ身体ごと、突っ

込むような格好になる。

案の定それは彼を避けるかのように、周囲へ弾かれていった。先程手を突っ込んだ時よりも、遙かに大きな穴が空く。

「じゃあ、あんたはしばらくここにいてくれ。そうすれば直に、他の二人とも合流できるはずだ」

「何？ 君はどうする気だ」

「あたしは先に行っている」

「何だと！？ ならば俺も同行するぞ！」

「いや、今は大丈夫だ。あんたはあの二人を待っていてくれ」

「しかし……俺も君の手伝いをしたいのだ。それが果たさねばならない、英雄としての義務でもあるからな」

アレックスは真剣な表情でじつとこちらを見据えてきたが、直ぐに視線を逸らすと大袈裟な溜息を吐いた。

「とはいえ今の俺は、遅れてやってくる仲間を待たなければならぬ。いい。」

英雄としての責務と、大切な仲間を待つという役目。

ぐぬぬぬう……ここで苦渋の選択を迫られることになるうとは！」

彼は右手に握り拳を作ると、それに向かって心底悔しそうに顔を歪ませていた。

しばらくこの男と行動を共にして分かったことだが、考え方や動作の一つ一つが、どうも大袈裟すぎるようだ。

あたしは呆れつつも、彼に提案した。

「だったら二人と合流してから、あたしの後を追ってくだればいいだろう」

「おおっ！ 成る程、その手があったかっ……！！」

確かにそれならば、両方の実現が可能だ。

うむ、流石はルティナだ。実に合理的な考え方だ！」

アレックスは急に何かに目覚めたかのように、顔を輝かせていた。

しかしこの男と長時間話していると、何故か疲れる……。

——森のほうでは、再び爆発音が聞こえてきた。

今、他の術士に見つかるのはまずい。こんな場所で、ぐずぐずしている時間はない。

あたしは急いで、穴の空いた結界へ入ろうとしたのだが。

「おおっ！ 君たち、ようやく来てくれたか」

アレックスの嬉しそうな声がしたのと同時に、バタバタと複数の激しい足音も聞こえてきた。

（！ もう来ちゃったのか）

正直、あたしはあの二人がこれほど早く、この場所まで辿り着けるとは思っていなかった。

村からここまではそう遠くない距離だが、乱戦の中をかくぐらなければならぬ。だからどうしても、迂回しなければならなかったのだ。

振り向けば少し後方の暗がり、複数の光がこちらへ近付いてくるところだった。前方には激しく動いている光と、後方には複数の光球が見えた。

それに照らし出されている顔を見てみれば、何故か必死な形相のエドを先頭に、続いてエリスもこちらへ駆けてくる。

だがその背後には――。

フオール・デュー・ヴァイン
「強硬風拳！」

術文を唱え、あたしは前へ飛び出していた。

あたしの術を纏った拳を、奴は二本の短剣で真正面から受け止める。奴の踏ん張っている両足が、放たれた重い拳により地面へめり込んでいく。

「ちいつ、もう少しで殺れたものを！」

相手が忌々しそうに舌打ちをした時、

「おい、君たち、何処へ行くのだ!？」

アレックスが何事か叫んでいる声が聞こえてきた。

敵から意識を逸らさずに横目で見ると、駆けてきた二人の背中が霧の中へと、消えていくところだった。直後、彼もまた彼女たちを追っていく。

アレックスという「解錠器具」を失った霧は、徐々にそこも侵食しつつあった。再び結界が閉じられようとしているのだ。

このままではまずい。

あたしは咄嗟の判断で相手を押しのけると、後方へ大きく飛んでいた。

第43話 彷徨う者たち1

一面の白濁色。

全身に纏わり付くような、ヒンヤリとした空気。

ここにあるのはそれだけだ。

周囲は何も見えず、視界が非常に悪い。方向感覚もまるで役に立たない。

加えてこの中には、強い気配が充満していた。

それは外にいた時から感じていた気配。無論、あたしの眼もずっと疼いている。

そのせいで、それ以外の「気」を感じ取ることもできなかった。これでは一緒に入ってきた敵が何処に潜んでいるのかさえ、探ることも難しいだろう。

それにもう一つ、気がかりなこともある。

実は結界が閉じる寸前で、正体不明の黒い影を目撃していたのだ。

攻撃から逃れるために後ろを振り返った時、それらが数体ほど中に飛び込んできたのが見えた。その時には駆けだしていたから遠くて確かめられなかったが、あたしたちの他にも何者かが入り込んでいる。

だがここがモンスター・ミストの中である以上、いつまでもこの場所で立ち止まっているわけにはいかなかった。それらの問題は一先ず置いておくとして、今は慎重に歩みを進めるしかない。

一体どのくらいの時が経っただろうか。時計を持っていれば確認できるのだろうが、あたしは時間に縛られたくないほうだから、普段から持ち歩かない主義だ。

それでもしばらく手探りで歩いていたのだが、不意に微かな音が聞こえてきた。立ち止まって耳を澄ませてみれば、それは何かのメロディのようでもある。

（敵？ …… 罠か？）

ここはヤツの空間。

当然あたしたちが中へ入り込んだことも、既に把握しているはず。とはいうものの、変わらない風景の中を歩くのにも、流石に飽きてきたところだ。例えば罠だとしても、ここから抜け出せるのであれば何でも良い。

しばらくすると前方からは、明かりも見えてくる。点滅して光っているようだ。どうやら音はその方向から聞こえてくるらしい。

徐々に視界も鮮明になってきた。

そこには辺り一面、緑色の景色が広がっていた。

霧もいつの間にか晴れていて、あたしは少し拓けた場所に立っていた。

足下には膝丈ほどの草が、地面を覆い隠すかのように生えている。この場を囲むように、鬱蒼と生い茂っている木々も立ち並んでいた。周囲をざっと見回しただけでも、季節感が狂っているのが分かる。

上を見上げてみると、青空も広がっていた。季節ばかりか、時間までも狂っていやがる。

ここはやはり、結界の中なのだ。

「あ、ルティナさんです」

「何？ ルティナ？？」

声主たちを見れば、エドとアレックスがそこに居た。

エドは木に凭れるようにして豎琴を弾き、アレックスはその前でこちらに背を向けて立っていた。

「おお、君ともようやく出会えたな」

「おい、あんたたち、こんな場所で何をしている」

あたしは訝しんで、彼らに近づいていった。

「僕はいつの間にか、エリスさんとはぐれてしまい、一時間以上も白い場所を彷徨っていたのですが、ようやくそこから抜け出せたのです」。

本当はそのままエリスさんを探したかったのですが、方向音痴のエリスさんのことなので、行き違いにでもなったら大変です。そのようなこともあって、もしかしたら近くにゝいるかもしれないと思っ、音楽と灯りで導くことを思いついたのです。そうしたらゝ」

「俺も導かれて、ここへやってきたという訳なのだ。やはり君も、そうなのだろう？」

「あれ、ルティナさん、どうされました？」

あたしはその場に四肢をついていた。突然、極度な疲労感に襲われてしまったのだ。

「それにしても、まさかアレックスさんとルティナさんが近くにゝいるなんて、知りませんでした」

「うむ。あとはエリスだけだが、しかし……」

「そうですね。」

先程のアレックスさんの話だとエリスさんはどうやら無事なようなので一先ず安心をしているのですが、しかしエリスさんの方向音痴は筋金入りですから。もしかしたらまた隣村に、行ってしまわれているかもしれせん」

「隣村？」

あたしは地面から顔を上げて、エドを見上げた。

「ここはモンスター・ミストの中だ、外には簡単に出られない。あんとエリスは結界を破れないのだろう？」

「はい、破れるのはアレックスさんだけです。」

でもモンスター・ミストの中とは一体、どういうことなのでしょう？

彼はあたしの問いに答えると、吃驚した表情で首を傾げている。

「まさか、気付いていなかったのか？ あんたたちは走って、この中へ入って来たんだぞ」

「そうだ、エド。確かに君たちは俺の呼びかけにも全く答えず、横を素通りしてこの中へと入っていった。俺はそれを追いかけてきたのだ」

「ええええええ！？ 本当にですか？？」

僕は敵に追いかけてられて、命からがら逃げていたのですが、その時に隠れられそうな場所を、何とか見つけ、夢中でその中へ飛び込んで行きました。

敵から逃げるのに必死でアレックスさんたちのことなど、全く気付かなかったです」

彼は裏返った声を上げ、更に驚いていた。この様子では本当に、

気付いてなさそうだ。

「それにしてもここがーモンスター・ミストの中なのですねー。ではーあの白い場所もー霧の中だったという訳ですかー。納得ですー」
エドは周辺を感慨深げに見回すと、そんな感想を述べた。

「となるとー昼間の結界とは違ってー桁違いの規模ですねー。

このような空間をー創り出すことができるとはー一体どのような魔物なのでしょうかー。

ルティナさんはー知っているのですかー？」

「……ああ」

あたしは短い返事をするそのまま立ち上がり、歩き出す。

先程霧の中を抜けた途端、この方角で更に強烈な気配を感じていた。

場所を移動する度に、左眼の疼きも段々と非道くなっていくのだ。恐らくそこにヤツがいる。あたしは確信していた。

「ルティナさんー待ってくださいー。突然、何処へ行かれるつもりですかー？」

二人が走ってあたしを追いかけてくる。

彼らにはこの気配が分からない。何故なら、人間である彼らには感じ取ることのできない、魔物特有のものだからだ。

雌の放つフェロモンに引き寄せられる生殖時の昆虫のように、特に下位クラスの魔物はそれに惹かれやすい。

あたしは彼らが近づいてくるのを見ると、足を止めた。

「あんたたちはエリスを見つけたら、直ぐにでも外へ出るんだ」

第44話 彷徨う者たち2

そして一呼吸置くと、続けて言った。

「この先には元凶である、強敵が潜んでいる。そいつを倒すのはあたしの役目だ。あんたたちは必要ない」

「む、それは何故だ？ 俺も君と一緒に戦うぞ。

モンスター何とかという、魔物を引き寄せる得体の知れない霧から――そしてその原因である敵から、周囲の人々を守るのだ。

それを途中で放り出すことなど、英雄であるこの俺に出来るはずがない！」

拳を振り上げ、熱の籠もった瞳であたしを見据えてきた。

そういえば彼は昼間「世の人々を助けたいと願う…」などと、あたしのことで妙なことを言っていたような気がする。

「あんたは何か誤解をしているようだが、あたしは他人を守りたいだとか……生憎とそのような、偽善的な正義感は持ち合わせていない。

ただヤツに個人的な恨みがあるから、それで倒したいだけだ」

「個人的な恨み、ですか？」

「そうだ。あたしはヤツに両親を殺された。その復讐のためだけに動いている。

だからあんたたちの言うような、大層な理由なんて、一切ないんだよ」

あたしが淡々と話している間の彼らは一様にして、驚きと戸惑いの表情を浮かべていた。だが構わずに言葉を続ける。

「それにあんたたちと元から馴れ合う気はないし、一緒に戦うつも

りもない。あたしに仲間なんて必要ない。
アレックス、あんたのことはこの結界を解いた時点で、既に用済みだしな」

もしかしたら失望させたかもしれない。
だがそれでいい。

そのほうが、こちらとしても好都合だ。このまま一緒に行動していても、彼らはあたしにとって、邪魔な存在にしかない。

ややしてから彼は難しい表情を崩さず、おもむろに口を開いた。

「例えそうであっても、君は俺たちの仲間だ。
その仲間が成し遂げようとしていることを手助けしないで、何が『仲間』と言えるのか。

いざという時に窮地を救うのが、真の『パーティ（仲間）』というものである」

「おい待て。あたしの話を聞いていなかったのか？
いつからあたしが、あんたたちの仲間になったんだよ」

眉間に皺を寄せ、真剣な表情でおかしなことを言う男だ。

「む、違うのか？

『パーティ』とは共に協力し助け合い、深い絆で結ばれた信頼し得る、唯一無二の存在なのではないのか？」

小首を傾げながら不思議そうな表情で、こちらを見詰め返してくるアレックス。それに対してあたしは重い何かが、全身へ徐々にのし掛かってくるような、そんな感覚を憶える。

「それにこの何とかミストとかいう霧を発生させている元凶が、ここに居る魔物なのだろう？

ならば仲間の窮地が救え、尚且つ英雄としての役目も果たせる。

これで全てが、丸く解決できるのだ！」

アレックスは力強くそう言っていると、右手の人差し指をあさっての方
向へ天高く掲げてみせた。

……何なのだろう。今までに味わったことのない、この奇妙な疲
労感は。

と、ここで、風の切る音を微かに感じたあたしは、考えるより先
に身体を動かしていた。

無数の黒い閃光が、さっきまであたしの居た場所を通り過ぎてい
く。その先は森のような場所になっていて、そこに生えている数本
の樹木を刻んでいった。

飛んできた方向に顔を向けてみる。

するとそこには、昼間戦った黒装束の男。……いや、今は魔物の
姿に戻っている。

魔物はこちらの様子を窺うように、ゆっくりと近づいてきた。

「やはり貴様とは、縁があるようだな」

奴は懷から短剣を二本取り出した。刀身が全体的にスパークして
いるようだ。それ自体に術を掛けたらしい。

あたしは溜息をひとつ吐いた。

コイツもあたしと同様、先程の演奏に導かれてきたのだろう。

「では俺が、君の楯となろう」

アレックスは腰に下げた鞘から剣を引き抜くと、あたしの前に立ち塞がってきた。

「そんな！ アレックスさんゝ無茶ですゝ。怪我しているんですよ」

エドが悲鳴にも似た声を上げる。

アレックスは左腕を骨折し、まともに使える状態ではない。

しかし今は先程のように、痛がっている様子はなかった。恐らく怪我してから大分時間が経過しているため、感覚自体が麻痺しているのだ。

「俺ならば心配はいらない。

ルティナ、君は君の成すべきことをするのだ。そのための楯ならば、俺は喜んでなろう」

「でもアレックスさんゝそれは自殺行為というものですよゝ」

「はっはっはっ、下手な冗談だぞ、エド。俺は無論、最初から死ぬ気などない。

例え腕一本使えずとも、君たちの期待に応え、立派に努めを果たしてみせるつもりなのだ！」

アレックスはエドの忠告を軽く一蹴すると、片手で長剣を掲げ、闘志を辺りに撒き散らしながら胸を張っていた。
しかし。

（コイツ、分かって言っているのか？）

あたしは半眼で彼を見詰める。

現実問題として、エドの言っていることが正論だ。

この状態で戦ったとしても、恐らく足止めにさえならない。敵の能力を考えるならば、間違いなく瞬殺だろう。

本当にコイツは『顔だけ熱血無鉄砲バカ』だ。

第45話 解放

「貴様だけでは話にならない。俺はその女とも戦いたいのだがな」

そんな彼を尻目に、敵はこちらへ視線を向けながら言ってきた。どうやら相手は、こちらと一緒に倒すつもりらしい。やはりこれ以上余計な時間を取らせないためにも、自分が前へ出るしかないだろう。

そう判断したあたしは、意識を集中させるかのように深々と息を吐くと、アレックスの前へおもむろに一步を踏み出した。それを見た彼が、慌てた様子で更に前へ飛び出してくる。

「ルティナ。ここは俺に任せて、君は先を急ぐのだ。君は自分の成すべきことを、最優先させるのだ！」

あたしの前へ右手を広げ、再び肩越しから熱い眼差しを向けてくる。

この男、自分があたしの邪魔になっていることが分からないのか？
あたしは苛立つ気持ちを何とか抑えながら、諭すように静かな口調で言葉を発した。

「……アイツはあたしも指名している。あんただけでは役不足なんだとさ」

「そうですね〜アレックスさん〜。相手は〜ルティナさんとも戦いたいのです〜」

「む……だがしかし」

「あたしなら大丈夫だ。それともあんた、『仲間』であるあたしが信じられないのかい？」

「仲間？」

「さっきあんたは『パーティ（仲間）』とは、信頼し得る唯一無二の存在だ』とか言っていただろう。今の行動は、その言葉と矛盾しているぞ」

「む……むむむ……??？」

彼は途端に、苦悶の表情を浮かべた。

「あんたは今、怪我を負っている。その状態で敵とまともに渡り合えるとは思えない。

確かにあたしの目的やあんたの役目とやらも大事だろうが、それは目の前の敵を倒してからでも遅くはないはずだ。

だから今は『仲間』である、このあたしを信頼してくれ」

「そうですよアレックスさん。ここは『仲間』であるルティナさんを頼るべきです。

それに、ディーンさんのことは信頼して、ルティナさんのことは信頼しないつもりですか？」

二人とも同じパーティ（仲間）じゃありませんか？」

アレックスは突然何かに気付いたかのように、目を見開いてエドを凝視した。そして直ぐに苦悶の表情に戻ると。

「むむむ……正しく……」

『仲間（パーティ）』とは即ち、信頼関係。

それを失うということは、最早パーティは、その機能を果たせなくなるという意味でもある」

アレックスは何やら、難しい顔付きのままで呟き始めた。

そして程なくして――。

「うむっ！ 俺はようやく目が覚めたぞ！」

その碧い瞳に目映い光を宿しながら、彼はあたしの手を力強く掴んできた。

「そうだ。このような時だからこそ、仲間を信頼せねばならぬのだ。君は仲間である俺のことを、これほどまでに想っているというのに……なのに俺は君のことを……済まなかった。ここは君に任せるべきだったな」

「ま……あ、分かればいいんだ」

あたしは近づいてくる、一点の曇りのない澄んだ碧瞳から顔を背ける。無駄に綺麗な容貌は、何となく苦手だ。

本当のことを言うにあたしには、アレックスがどうなろうと知ったことではなかった。それにいつもなら「邪魔だ、そこを退け！！」の一言だけで済むところだ。

しかし彼を相手にしていると、怒るのが何故か馬鹿らしくなってくる。

だから適当な御託を並べてみたのだが、まさかこんなつまらない言葉で、あっさり納得するとは思わなかった。なんて単純な男だ。

「……貴様ら、さっきから何をコソコソとやっている」

声の主を見てみれば、あたしよりかなり苛立った顔付きをしていた。それなのに会話が終わるのを待っていたとは、魔物のくせに律儀な奴。

「全員まとめてかかってこいと言っているんだ。そのほうがこちらとしても余計な手間が省けるし、仕事も早く片付けられるからな」
「どうやらコイツも『危険』なこの場所から、直ぐにでも立ち去り

たらしい。あたしも精神力で今の状態を何とか保ってはいるが、長時間は持たないだろう。

「偉い自信だな。だが先鋒はあたしだ」

「ほう？ 他の二人は介入しないのか」

「あんたがあたしを指名したんじゃないのかい」

「うむ。それに一对三の戦いになると不公平であり、術士としての誇りをも穢すことになってしまうからな」

「……………」

あたしはアレックスを無視し、無言で目の前の敵を睨み付けた。戦闘時において冷静さを欠き、尚且つそれを相手に悟られてしまったなら、確実にこちらが負けるだろう。

「ところで、もう一匹はどうしたんだ？ 姿が見えないようだが」

「ああ、ボブのことか。さあ、どうだったかな」

（何かを企んでいるのか？）

その表情を見ても、真意を量ることができない。それに蔓延する気配が邪魔をしていて、周囲を探ることも難しい。

だが条件なら相手も同じ。
ならば。

あたしは左眼帯に右手を添え、同時に左拳も強く握り締めた。

こちらとしても、戦闘を長引かせたくはなかった。それに余計な術力も使いたくない。

もし敵が何かを企んでいたとしたら、実行させる前にこちらから

仕掛ける！

あたしは相手のほうへ真っ直ぐに向かって、地面を蹴った。
フォール・デュ・ヴィン
「強硬風拳！」

左拳に精霊力を注ぐ。

相手がそれに対して口角を上げながら、いつものように身構えているのが目に入った。

この術は奴の目の前で何度も放ち、その度に受け流されている。敵にとっても「何を今更」という感じだろう。

あたしは近づくにつれて徐々に術力を上げていった。

そして拳を放つ直前で、左眼を『解放』した。

第46話 告白

「！ 貴様、その眼は！？」

奴は驚きの声を上げたがそれには構わず、あたしは左拳へ集中的に術力を注ぎ続けている。

敵は次の行動へ移そうと身体を動かした。

が、それは既に計算済みだった。だからこそ、このタイミングでソレを外したのだ。

あたしは奴の鳩尾へ向かって拳を叩き付ける。その手前では、二本の短剣をクロスさせるように防^{ガード}御していた。いつもならこの攻撃は通用しない。

しかし。

術が施してあり、通常より強固なはずの剣中心部は、拳に纏う風の威力で粉々に砕け散っていた。

耳元では、まるで複数の狂犬が激昂しているかのような、唸り声が聞こえている。自分自身でさえも、その威力に吹き飛ばされそうだった。

当然左拳も、意図しない方向へ持って行かれる。全身の骨も内側から軋んでいく。身体も引き裂かれそうになる。

だがあたしは辛うじて、それらを押さえ込んでいた。そして奴が次の行動に移す直前で、そこへ叩き付けていた。

たった一匹の獲物へ群がる獣たち。

周囲の草木をも巻き込んで、一気に激しさを増しながら丸呑みしていく。

「……ぐっ」

あたしはその衝撃に耐えきれず、左眼を眼帯で押さえ付けながら、地面へ顔を擦りつけるかのようにうずくまっていた。

一度に解放したのだ。両手はもとより、全身にさえ力が入らなくなっていた。

しかしそれはほんの一時的なものと、今までの経験上から知っている。今は貧血のような症状が現れてはいるが、体力や気力と同様でやがて回復する。

あたしは霞む右眼を無理矢理細めると、倒れている敵のほうへ顔を向けた。

そこに生えていた草木は、獰猛な獣にでも食い散らかされたかのような痕跡を残し、一本の道筋のようになっていた。

奴の通った痕だ。あと

その終着点。

敵は薙ぎ倒されている木々の間にいるはずだが、ここからでは遠すぎてその姿が見えない。

手応えはあった。土手っ腹に風穴を開けたのも確認している。

だが僅かであるが、急所が逸れてしまった。恐らくまだ生きている。

中位クラスであれば体内に宿る精霊力を使い、何れ自己回復をす

るはずだ。

しかし今は動く気配はない。当分の間、起き上がることのできないダメージは、受けているだろう。

だがトドメを刺す気にはなれなかった。

こちらはまだそれだけの回復をしていない。それに今のあたしの目的は、目先の魔物を倒すことでもない。

「ルティナさん……今のは……」

しばらくして掠れるような声に振り向けば、二人が驚愕の表情を浮かべ、呆然とこちらを凝視しているところだった。

「ルティナさんの片方の眼——紅い……」

（！ やはり、見られていたか）

あたしはその場でしばらく動かなかった。二人もそれ以上、口を開いてはこない。

予想通りの反応。このような状況には、昔から慣れている。

ようやく力の戻りつつあったあたしは、深く息を整えると、ややしてからゆっくりと身を起こし始めた。

そして――。

「あたしの身体は半人半魔。……半分、魔物の血が流れているのさ」

彼らが口を開く前に、あたしは自ら告白していた。

第47話 復讐心

「なんと！ 魔物の血が！？」

驚きの声を上げているアレックスを尻目に、あたしはそのまま踵を返して歩き出した。

「あ、ルティナさんく待ってくださいく」

「待つのだ、ルティナ！」

彼らは再び、あたしを追ってこようとしている。

「何故、まだついて来る」

「無論、君と同じ目的だ。俺も君の手伝いをするぞ。それが英雄たる俺の使命でもあるからな」

「僕も勿論く何かお役に立てることがあればくお二人のお手伝いをしたいですく」

あたしは歩みを止め、変わらずに胸を張っている彼らに顔を向けた。

「あんたたち、さっきの話で分かったんじゃないのか。あたしが本当の仲間ではない、ということを」

彼らは黙り込んだ。しかし直ぐにアレックスが首を傾げ、口を開く。

「君が仲間ではない？ 先程自ら、俺たちの仲間だと宣言したばかりではないか」

「さっきと今とは状況が違うだろう。あたしには魔物の血が流れている。つまりあんたたちにとっては、異質な存在だ」

「しかしルティナさんは人間にしか見えませんく僕としてはくまだ半信半疑なのですがく」

通常の半魔^{ハイフ}半人は、母体が魔物だ。つまりその子供の容姿もソレだというのが、一般的だった。
だがあたしの場合には母体が人間。生まれてきた容姿も人間と大差ないものだ。ただ外見上で唯一違うところといえば、左右の瞳の色だけだった。

これはヒトから生まれてきたあたしだけの、特殊な身体のようなだ。例え半魔半人であったとしても、左右の瞳の色は、同色で生まれてくるのが普通だからだ。

「疑うのであれば、疑えばいい。だがあたしは嘘を付いてはいない。だから仲間にはならない」

「ですがもし魔物の胎内から生誕したとしても、僕たちと同じくヒトの血も入っていますし」

「うむ。それに俺は一度言った言葉を、後から撤回などしない。例え君の身体に魔物の血が流れていたとしても、俺は今でも君のことを、大切な仲間だと思っている。だから安心してくれ」

「安心も何も――！？ ……くっ」

反論しようとしたあたしだったが、その途中で地面へ蹲っていた。

再び力の抜けるような感覚。

先程、自身の強大な能力を解放した。そのせいで少し、外部からの『毒』の侵入を許してしまったのだ。

加えてこの能力^{ちから}は今でも、不安定なままだった。

これを最初に解放したのは、約十二年前。

当時はあたしもまだ普通の子供で、修行も開始していなかった。

実際、現場に居合わせた師匠に助けられなければ、このように生きてはいなかっただろう。

だが今のあたしは修行を重ね、ある程度の力は付いていた。そのための調整も重ねてきている。

それでもこの能力は、一度に二回が限度。

母体が魔物であれば簡単に制御できるものなのだろうが、人間であるあたしには、修行を積んでいてもこれが精一杯だった。

ヒトの身でありながら、内にある魔族の能力を解放する。ちからつまり精霊力を自ら持つことの出来ない、ヒトの肉体の限界値を超えてしまうということだ。

最初は自身を生んだ母親を恨んだりもしたが、逆に今では感謝をしている。

能力が暴走するということは、限界を超えるということ。限界値を超えるということは、予想外の能力が生まれる確率も高い。

上位クラスの魔物を、あたし一人だけで倒せるかもしれない。

とは言うものの、この能力に関しては、あたし自身も熟知しているわけではなかった。それゆえ、確実に勝てる見込みは皆無だ。

しかし例え一欠片であったとしても、その可能性を取り出すことはできるはずだ。

そのためだけにあたしは今まで生きてきた。

ヤツと戦うのは一度だけ。

その能力さえあれば十分だ。

「ルティナさん、大丈夫ですか？　凄い汗です。顔色も悪いですよ」

「大丈夫だ……問題はない……」

あたしは伸ばされたエドの手を払い除けると、氣力を振り絞って立ち上がった。

この程度で立ち止まることはできない。

十二年前にあたしを――両親を裏切ったあの男を、決して許さない。

「ルティナよ、君は何をそんなに独りで頑張っているのだ？」

「何？」

「両親の敵を討ちたいという気持ちなら、俺にもよく分かるのだ。出来ることならば、俺の両親を殺した敵である憎き『流行病』^{やまい}を、俺自らが手を下して抹殺したいと思っているのだぞ！

「アレックスさん、『流行病（やまい）』は抹殺なんてできませんよ」

勢いよく拳を振り上げたアレックスに対して、エドは即座に突っ込んだ。

「む……む無論だ。俺もそのくらいは分かっているつもりだ。それと同等の気持ちで、自分でも持ち合わせていると、言いたかっただけなのだ」

アレックスは直ぐに咳払いを一つしたが、その白い頬には少し、赤みが差したようにも見える。

「だが復讐からは何も生み出さないし、得るものなどもないはずだ」
「……何だあんた、今頃あたしに説教するつもりかい」

「いや、説教などするつもりは毛頭ない。
だが今の君を見ると、何故か生き急いでいるような気がして仕
方がないのでな」

第48話 信じる心

アレックスが真っ直ぐな瞳をこちらに向けてくる。その煌めきに耐えきれなくなったあたしは、何となく視線を逸らしていた。しかし彼はそのまま言葉を続けた。

「パーティとは、喜びも悲しみも共に分かち合い、信頼し助け合う仲間のことだ。

もし君の苦しみを、少しでも分けてくれるというのであれば、それを受け止めよう。

君が魔物であろうとなかろうと、それはほんの些細なことだ。

俺は君を信頼すると……仲間だと最初に言った。その信念はこの先も、決して曲げることがない。

何故なら俺はそんな自分自身を、一番に信頼しているのだからな」

アレックスは胸を張って、堂々と宣言した。

ああそうか、この男は―――。

この全身から溢れんばかりに漲る自信。

それは自分自身を心底、信頼している証なのだろう。

『信頼』などという、陳腐な言葉を口にするのは簡単だ。

だがこの男はそれを、心の底から信じ込んでいる。

自分の感じたこと、行為そのものを――全てを信じている。だからこそ、そんな自分の信じている他人も同様に信頼できる。

故に日頃からこれほどまでに真っ直ぐで、目が眩むほどの自信に満ち溢れているのだ。

「……あんた、お目出度いな」

「そうだ、俺は目出度い男なのだ。

だからこそ君が何を言おうとも、俺は君の手伝いをする。

俺自身が、そう決めたのだ」

「僕もアレックスさんを信じています。だからルティナさんにもうついていくです」

コイツらには、あたしの皮肉も通じないというのか。

本当にお目出度い奴らだ。そして脳天気な馬鹿どもだ。

ようやく少し気力の回復したあたしは、そのまま無言で歩き出していた。その後ろから彼らも平然と、当たり前な顔でついてくる。

「しかし問題は、エリスのことだが……」

「そうですね、何処に居るのでしょうか」

二人とも心配そうな声を上げていたが、直ぐに。

「ですがエリスさんのことです。きっと大丈夫ですよ」

「うむ、そうだな。この中には確実に居るのだ。そのうちまた会えるだろう」

彼らは傍から見れば、根拠のない自信とともに明るい調子に戻っていた。が、突然エドが、怯えたような声を出してくる。

「な、なんだかこの先、変な気配がします。この先へは行きたくないようなく……そんな変な感じですよ」

「変な気配……うむ、それなら俺も感じているぞ」

ようやくここにきて、二人とも気付いたようだ。

この中に蔓延している気配——瘴気の存在に。

「しかしこの禍々しい気配、外にいた時から疑問に思っていたのだが、一体何なのだろうな。この強力なもののせいで、他の気配が何も感じられぬ」

「！ 何だと！？」

「ど、どうしたというのだ、ルティナ。いきなり吃驚するではないか」

勢いよく振り向いたあたしに対して、アレックスが目を丸くしているようだった。しかしあたしは、それ以上に驚いていた。

「あんたは外にいた時からこの気配……瘴気に気付いていたというのか！？」

「それがどうしたというのだ。というより、これは『瘴気』と言うもののなか？」

人間は瘴気の発生場所へ近付かなければ、感知できない。それを排除しようとする本能が、無意識下で働くからだ。

例え感覚の鍛えられている芸術士であつたとしても、近付かなければ感知できないのが普通である。

芸術士の感知能力というのは、自身に向けられる殺気にのみ有効なだけだ。それ以外は他の術士と、何ら違いはない。

それなのに彼は人間でありながら、更に外界からも感知できたというのか。

「この何だか嫌な気配……これが瘴気なのですか」。

魔物には麻薬のような症状が出ますが、ヒトにとっては毒にしかないと思います。」

僕のお師匠様も中位クラスと戦った時、それを浴びたことがあると聞きました。その禍々しさゆえ、直ぐに逃げ出したくなったそうです。」

「それは恐らく中位クラスが、人間を威嚇するために放ったものだろう。」

瘴気というのは、あたしたちが術発動時に必要な精霊力と同様、通常、空中に拡散されて浮遊している。それは知っているだろう？」

「はい。ですが濃度がかなり低いため、人体には殆ど影響がないと言われています。」

「そうだ。例えば魔物であっても、意識していなければ感知はできない。」

それはあたしも例外ではなかった。

あたしも他の魔物と同様に、濃度の高い瘴気は感知できる。しかし普段生活している上では、あまり意識することがない。

「それでもこのように高濃度のものが蔓延していれば、知らずに体内を蝕まれてしまう。特に人間というものは、その影響力を直に受けやすいからな」

「では、その中にいる僕たちは、大丈夫なのでしょう？」

「それは何とも言えない。だが一説によれば、何者にも屈しない強い心、精神力を持つ者だけが、瘴気の影響力を弱めることができるらしい」

「うむ。ならば何も心配はいらないぞ、エド。」

強い心、精神力であれば、俺たちに常時備わっているものではないか」

「そうでした。アレックスさんの言うとおり、僕たちには心配
無用なことでしたね」

彼らは再び明るく笑い合いながら、自画自讃していた。

そんなことをしている間にも、あたしたちは歩みを止めてはいな
かった。

徐々に目的地へと近付いていく。あたしの足は、自然と速くなっ
ていた。

もうすぐ。

もうすぐだ。

長年の悲願を果たす時が、ようやく来たのだ。

背後で二人が何かを言っていたようだ。だがあたしは振り向かず、
足を止めることもなかった。

周囲で変わることのない緑色風景が、一段と加速していく。
そして不意に途切れたその先には――。

――ヤツだ。

ヤツがいた。

漆黒の髪。切れ長の瞳。

面長気味な彫りの深い端正な顔立ち。浅黒い肌。

問い詰めねばならない。

何故、友人でもある両親を殺した？

何故、村に火を放った？

何故、人の姿であたしたちの前に現れた？

何故、あたしの眼を封じた？

何故、『母親』を裏切った？

だが十二年前と変わらぬその姿を見た途端、それらが綺麗に無くなっていた。

今まで積み重ねてきた思いごと、頭の中から全てが吹き飛んでいった。

代わりにヤツの名を叫ぶ。腹の底から叫んでいた。

そしてあたしは――。

第49話 精霊の加護（前書き）

第5章 異なる者（エリス編）

第49話 精霊の加護

「やはり人間か」

地面で微睡^{まじろ}みに飲み込まれそうになっていたが、その声で無理矢理覚醒させられた。

頭を動かしたくなかった私は眼球だけを傾ける。
無数に咲く色とりどりの花の隙間から、黒いブーツのようなものが覗いている。先程聞こえてきた低音は男性のものだ。

人間？ 或いは魔物か？

だが今の私にとってはどうでもいい。それを確かめる気にもならない。

「ここはヒトが来て良い場所ではない」

声は頭上で聞こえてきた。先程よりも近い。

「どうやら既に、瘴気には侵されているようだな」

（瘴……気……）

私は朦朧^{もつろう}としている意識の中で、その言葉だけを反芻^{はんすう}していた。それが意味のない行為だということが、頭の何処かでは分かっている。しかし何故か止められない。

閉じかけた瞼^{まぶた}の裏側では、黒い影が蠢いているような気がした。

すると、身体が急に軽くなる。意識も鮮明になってきた。

「な……今、何を……！」

驚いた私は、そのまま勢いよく身を起こした。

私を覗き込んでいたのは、切れ長の緋眼。長い黒髪。深い端正な顔立ち。

頬や腕など、薄手の布地の下から現れている浅黒い肌には刺青いれずみなのか、濃紺色の幾何学模様のペインティングが数ヶ所に施されている。

外見上では二十〜三十歳代の男性だった。簡単に一言でいってしまふと、近寄りがたい感じの「美形」である。

アレックスやデーモンも美形だが、彼らのような柔らかい雰囲気は感じられない。深紅の瞳の奥には凍て付くような鋭い刃と、触れれば一瞬で燃やし尽くされそうな焰ほのおが混在している。

それはもしかしたら、彼が魔物だからかもしれない。

そう、魔物だ。

背後に携えているのは漆黒の翼。それが少し距離を置き、私の視線へ合わせるかのように真っ直ぐに、こちらを見詰めている。

双眸は炎のように紅々としていたが、眼差しは氷のように冷たく感じられた。

「君は一体、どうやってこの中に入り込んできた？」

美形の魔物は私の眼を覗き込みながら、逆に訊いてきた。

「この中には俺以外は誰も入ってこれないはずだ。それなのに君

はどのような手段でここへ来た？

他にも複数の者が入り込んでいたな。この結界を解いたのは君なのか、或いは他の者か？」

結界―――。

『あたしが、あの中にいるヤツに用があるからだ』

不意に彼女の言葉を思い出す。

そうか。もしかしたらこの場所は、そしてこの魔物が。

「ルティナの言っていた……」

「ルティナ？」

思わず口に出してしまったことに気付き、私は慌てて顔を逸らした。

魔物ハンターである彼女の『用』というのは、素人の私でも簡単に想像がつく。なのに部外者である私が敵の前で、不用意にその名を口走ってしまった。

「成る程な」

(……あれ？)

その声に驚いた私は、反射的に顔を上げた。

たった一言の呟き。先程までは冷たい印象だったが、その言葉の

中には少し、柔らかさのようなものも含まれている気がしたのだ。
だが表情を見ると先程同様、冷めた眼差しを向けている。私の気のせいだったのだろうか。

「大陸三大国、何れかの差し金かとも思っていたが……あの娘か」

魔物は私から身体を離すと、背を向けた。

だが私は見た。後ろを向いた瞬間に、彼の口角が少し上がっていたのを。やはり先程のアレは、気のせいなどではない。

「ルティナを知っているの？」

「当然だ。隻眼の魔物ハンター『キラ・アイ』の名は、俺の元にも届いているからな」

再び抑揚のない口調が返ってくる。

「再度問う。結界（モンスター・ミスト）を破ったのは、君の能力ちからか？」

先程よりも、更に強い口調だった。翼越しからこちらを窺うように覗いている瞳も揺らぐことなく、冷ややかだ。

「え……ええと、それは……」

私は迷っていた。本当のことを言うべきかどうか。

いつの間にか入り込んでしまっている私だったが、モンスター・ミストの結界を解いたのはアレックスだと思っている。そしてルティナも同行しているはずだ。

何故なら彼が誰の干渉も受けず、一人でこの結界を破るとは考えられないからだ……多分。

勿論ここへ来る途中で彼らに出会わなかったし、その場面を見た訳でもなかったが、何となくそんな気がする。

それに目の前にいる魔物は恐らく、上位クラスだ。

何故そう断言できるかといえば、先程私にかけた術のようなもの。あれは何らかの精霊術だろう。

そして先日出遭った上位クラスの魔物——サラが唱えていた術文と、似たようなものも唱えていた。

しかもこの魔物、サラと顔立ちや瞳の色が似ているような気がする。もしかしたら同じ種族なのかもしれない。

サラには私にもアレックスと同じ能力、『精霊の加護』が付いていると思ひ込ませていた。そして恐らくはそのお陰だと思うが、私たちは殺されずにすんだのだ。
だからもしかしたら今回も——。

「この結界を破壊できるのは、俺が許可しているモノと、もう一つ。術効力を無効化できる能力——今のところ考えられるのは、精霊が英雄に与えたと言われている『精霊の加護』のみ」

第50話 その能力

思った通り、である。この魔物もサウたちと同様、『精霊の加護』を知っていたのだ。

私の顔を眺めていた魔物が、少しだけ眼を細める。

「やはりそうか。

術無効化は、ヒトにも魔族にもない能力だ。

かつてこの能力を、意図的に創り出そうとした者たちがいた。ヒトは魔族に、魔族はヒトに対抗する手段として」

この話は初耳だ。そのような能力を意図的に創るなど、聞いたことがない。

「だがそれは両者とも未だに成し得ていないはず。

『精霊の加護』という術無効化能力には、『精霊の意思』が必要不可欠だからな。地上に居る我らが簡単に創り出せるものではない」

（精霊の意思？）

何のことだろうか。

……それに。

（術無効化？）

この魔物は今『精霊の加護』が、「術効力を無効化」できると言った。

だが実際に、私が目の当たりにしたアレックスの能力は、「術効力を防御」していただけに過ぎない。つまり効力を消失せずに防御

術と同等の能力——ただ攻撃を防いでいただけだった。

『無効化』というからには当然、相手の術効力も消失させなければならぬ。それは防御能力とは異なるはずだが、この認識の矛盾は一体何なのだろうか。

私が疑問に思っていると、頭上から微かな羽音のようなものが聞こえてきた。

そこに居たのは、黒くて丸い目玉が一つ。両脇にはコウモリのような羽も生えている。

この前、サラヤリチャードと一緒にいた小魔物に似ている……というか、恐らく同じものだろう。

同じく見上げていた魔物の元に、ソレはふわふわと揺らめきながら降りてくる。

手の届く範囲にまで来た時、彼は少し距離を置いた状態でその頭を右手で翳した。次いで小魔物の全身が、黒く光り出す。

しばらく彼らはそのまま佇んでいた。が、やがて小魔物のほうは巢立ったばかりの雛鳥のように、不安定な動きで羽ばたきながら、木々の向こう側へと消えていった。

魔物は私に背を向け、それが視界から消えるまで見送っていたのだが。

「この場所には瘴気が充満している。君もその知識はあるのだろうか？」

こちらへは振り向かずに訊いてきた。

瘴気。

父から受けていた講義で、何度も出てきた言葉だ。

術士や魔物が術を使用する時に必要な精霊の力は、この地上の大気中に存在している。そしてその中には「瘴気」も含まれている。

瘴気は通常、低濃度で浮遊しているため、人体への影響は皆無である。だが濃度がある程度高くなった場合には、徐々に体内へと入り込んでしまう。

嘔吐や頭痛、悪寒、恐怖心、気力低下、全身麻痺、圧迫感、破壊・暴力衝動……などなど、人によって症状は様々であるが、それらを引き起こし、最悪の場合には死に至る——と、この程度の知識ならば私にもあった。

「君は瘴気に侵されていた。俺がそれを中和して、影響力を一時的に防いでいる。が、およそ三時間程度の効力しかない」

「え！？ 防いでいる???」

「君の身体に、防御用の薄い膜を張った」

私はその言葉で、自分の両手や体中を見回してみた。それらが先程から何故かキラキラと輝いて見えていたが、もしかしたらこれがそうなのか。

「但し体内に瘴気が入り込まない代わりに、精霊術も使えない。それにこれはあくまでも、瘴気を防御するためだけの処置だ。外部からの攻撃を防ぐこともできない」

つまり今攻撃を受けてしまうと、防御さえもできないということなのか。

私は愕然とした。精霊術を使えない精霊術士なんて――。

「あ……あなた一体、何を企んでいるわけ？」

「企む？」

「そうよ。術を封じて、その隙に私を一体、どうしようって言うの！？」

混乱しつつも精一杯張った私の虚勢に対して、魔物は少し吃驚したような顔付きを見せた。しかし直ぐにまた元の険しい表情に戻る。

「どうもしない。ただ君を殺す理由がないだけだ」

それだけを言うところらを振り向きもせず、そのまま前へ歩き出そうとする。

「ちょ……！ それって、答えになっていないわよ！」

その返答に納得のいかない私は走り寄って、思わず彼の翼に触れようと手を伸ばした。

が。

雷のような轟音とともに、私は地面へと投げ出されていた。

痺れと全身を暴れ回るような激痛。もし「大きな雷に打たれる」

とするならば、こんな感覚なのだろうか。

「精霊術は使えないが『精霊の加護』ならば発動するはずだ。君はその能力を使って、この場所から早々に立ち去るがいい」

魔物は何事もなかったかのようにそう言い残すと、木々の間へと

消えていった。横たわったまま、呆然と後姿を見送っている私だけが、その場に取り残されていた。

彼は私には『何も』していない。こちらに敵意も見せなかったし、攻撃も――指一本さえも動かさなかった。

単に私が彼に触れようとしただけである。それともアレは私にかけたものと同じ、防御術の類だろうか。

だが相手は上位クラスだ。私の知らない術を使っていたとしてもおかしくはない。その辺りのことは、あまり深く考えない方がいいのかもしれない。

しばらくの間、全身に感じる痺れと痛みで、立ち上がることもできなかった。あの激痛でよく死なずにすんだものと、我ながら感心してしまう。

ようやく何とか起き上がった私は、早速掌へ意識を集中させてみる。

ヴァン・ヴォレ・ヴィン

「烈風天駆」

他にもいくつか思いつくままに術を唱えてみたが、何れも駄目だった。昼間の時は弱いながらも使用できたが、今回は精霊石さえも反応しない。

『精霊術は使えないが、「精霊の加護」ならば発動するはずだ』

何故あの魔物は、そう断言できたのだろうか。それに人間である

私を瘴気から保護し、ご丁寧に忠告まで添えて、殺さずに放置するのは何故だろう。

考えられるのは、私のことを『精霊の加護保持者』と思っていることくらいだ。

もし翼の魔物がサラの仲間だった場合には、その可能性が一番高い。彼女もまたそのような理由で、私たちを殺さなかったのだから。

それにサラと同種族のような感じだったし、何より同じような術文も唱えていた。

……あれ？ 同じ術文？

私は左腕を押さえる。

もしかしたら彼ならば、サラに付けられたこの「紋様」が何なのかを、知っているのだろうか。

しかし。

彼の消えていった方向へ目を向けた。

—————あそこへは行きたくない。

それは本能的なものだろう。そして何故そのように感じているのか、理由を私は知っている。

瘴気だ。

私は幼い頃に、中位クラスから放たれる瘴気を浴びたことがあった。その時のことは今でもあまり思い出したくはないが、畏怖の念を抱いたことを強く憶えている。

当時はその感覚が何なのかを知らなかった。しかし後にその時の状況を父へ話した時、それが魔物の放つ「瘴気」だと教えられたのだ。

先へは行きたくない。けれど、腕に付けられた紋様の効力を知りたい。

私がある場でしばらく悩んでいると。

「……ハア……ハア……」

不意に背後から、獣の荒い息遣いのようなものが聞こえてきた。

それが耳に入った瞬間、私の身体は無意識に動いていた。そして前方にある木陰へと滑り込んだ。

ここは「モンスター・ミスト」——つまり、魔物の創り出した結界の中だ。獣など居るはずがない。居るとすれば恐らく、結界を解いたであろうルティナたち、そして先程の魔物と私たちを追ってきた敵だ。

しばらく私はそこへ隠れて様子を窺っていた。息遣いは確実にこちらへ近付いている。

後方の木陰から黒いものが現れる。遠目からもその姿を捉えることができた。

黒装束に身を包んだ、トカゲの顔をした魔物——私の予想通りだ

った。

しかし徐々にその姿が大きくなるに従って、何処か様子のおかしいことに気が付いた。

酔っ払ったかのような覚束無い足取り。顔を前へ突き出し、不恰好に丸められた背。

剥がれたマスクから覗く口元は、だらしなく開けられ、血走った焦点の定まらない眼は動かずに、真っ直ぐ前を向いたままだ。

「……臭う……臭うぞ……」

魔物は口から涎よだれを垂れ流して、そのような言葉を呟きながら、私の直ぐ脇を通り過ぎていく。こちらには全く気付いていないようだ。私は魔物が茂みの奥へ消えていくのを、そのまま見送っていた。

何が「臭う」のだろう。確かにこの奥からは、瘴気を感じているけれど。

私はここで覚悟を決めることにした。

どちらにせよ私には、「精霊の加護」がないのだ。勿論アレックスが居なければ、ここから抜け出せるはずがない。

昼間のルティナの話から考えると、彼女は先程の翼の魔物の元へ行くつもりなのだろう。ということはそこに行けば、或いは彼女たちに会えるかもしれない。

それに今の敵の様子も気になるし。

「取り敢えず、行ってみるしかないわね」

私は気合いを入れるかのように呟くと、思い切って茂みの中へ足を踏み入れた。

第51話 瘴気の森1

道のない場所をただひたすらに、私は気配の感じる方向だけを目指していた。

途中で何度も遠ざかりそうになってしまい、その度に補正しつつ歩いている。

足を踏み入れてから一時間くらいは経過しているが、一向に景色の変わる様子もない。

しかも何だか先程から、同じ場所をグルグルと廻っているような気も——いやいやいや、ここで弱気なことを考えてはいけなかった。

瘴気はそのような「隙」が生まれる瞬間に入り込んで、精神を狂わせるという話である。例えあの魔物の術で防いでいたとしても、なるべく「ポジティブ思考」で行かなければならないのだ。

私はそのことを肝に銘じながら、慎重に茂みを掻き分けていた。

そんなことを色々考えている間にも、ようやく薄暗かった空間から一転、目映い光が飛び込んでくる。

すると急に黒い影が、視界を遮ってきた。次いでソレと目が合ってしまう。

ひとつ瞬きをする、大きな黒いつぶらな瞳。

突然のことに吃驚した私は、腕を思いっきり振り回しながら悲鳴を上げてしまった。そんな私に更に驚いたのか、ソレは慌てた様子で……しかし風船のようにふわふわと、上空へ浮かび上がっていく。

「君は……やはりまだ居たのか」
溜息混じりの声とともに、視界の戻った私の前に現れたのは、黒い翼の魔物だった。

「結界の開いた気配がないから、まだ中に居るとは思っていたが……ここに来るとはな」

「あなたは一体ここで、何をしているの？」
私は反射的に尋ねていた。

目の前にあるのは奇妙な光景だった。

魔物の前には黒くて大きな球体が、地面すれすれの位置に浮かんでいる。

大きさは彼の身長と同じくらいで、一見すると丸い形状の球である。しかしよく見れば霧状になっていて、その集合体が球状に形作っているようにも見えた。それらが全体的にゆらゆらと、小刻みに揺れている。

更にその一端が紐のように、魔物に向かって細長く伸びている。魔物のほうはそれを受け止めるかのように、両手の平を胸の前へ突き出す体勢だ。

「それはこちらのセリフだ。俺のかけた術が有効な間に、ここを離れているはずじゃなかったのか。それに今まで何をしていた。あれから随分時間は経っていると思うが」

「それは……あなたにいろいろ尋ねたいこともあったし。だから今までずっと迷路のような、あの森の中を彷徨っていたのよ」

「迷路のような森の中？」

彼は怪訝そうな表情を浮かべながら、眉根を寄せた。

「一応用心のために軽い足止め程度の罠トラップならば、入口に仕掛けてはいたが……しかしそれは、外部からの侵入者対策用だ。中心地であるこの場所や周辺部、出口には何も置いてはいない。それに君が先程居た場所からここまで、直線距離にしたとしても、ものの五分とかからないはずなんだが」

「……………」

「……………」

やはりそうかつ！

辺りに充満している瘴気のせいで、方向感覚まで狂わされていたのだッ！！

「それより……いや、だが丁度いいかもしれない。君にも手伝ってもらおう」

「手伝う？ 一体何を」

私は驚いて訊き返していた。

「魔物——しかも上位クラスが人間に頼み事をするなんて、有り得ない。」

「この中心にあるモノを破壊してほしい」

「中心？」

私は黒い球へ出来るだけ近付き、覗き込む。

中心にあるのは鈍い光を放つ精霊石ほどの、小さな黒いガラス玉のようだ。それが周囲で蠢く黒い集合体の隙間から、見え隠れしていた。

まるで霧の渦が、ガラス玉を包み込むような形で存在している。

「これは『瘴霊の種』と呼ばれるものだ。これがこの付近一帯の瘴気を生み出している源泉だ」

第52話 瘴気の森2

私は一瞬、困惑してしまった。

今まで『瘴霊の種』などというものを一度も見ることがなかったし、聞いたこともなかったからだ。

それに瘴気を排出する場所は確か――。

「そうだ。瘴気は通常、精霊の社近辺にある『瘴気の穴』から噴出されるものだ」

『瘴気の穴』はどの社にも、必ず数ヶ所は存在していると言われている。その場所は鉾山付近が殆どで、この辺りでいえば「水の社」を挟んだ、反対側の山に位置するという話だ。

しかし噴出量は年二〜三回程度と少ない。それに大気中で蔓延しているものと同様、低濃度の排出量でしかなかったはずである。

「『瘴気の穴』から噴出されるものは低濃度なため、魔物もそこへは群がってこない。

だがこの『瘴霊の種』には、瘴気の穴から噴出する濃度の、約数百倍の瘴気が凝縮されている。だからこそ魔物が、この場所に集まってくる」

モンスター・ミストが出現すれば、魔物は湧いてくる。それが瘴気のせいだとは知らなかったが、「魔物を引き寄せる霧」――その正体が瘴気の塊であるのなら納得できる。

しかし解せないのは。

「それじゃあこのモンスター・ミストが、『瘴霊の種』を生み出し

ているってこと？　なのに破壊って？？？」

「モンスター・ミスト自体が、種を生み出しているわけではない。この霧は外部へ漏らさないための結界だ。

しかし種から噴出される瘴気濃度が高いために、完全な遮断は難しいがな」

するとこの霧が、内部の瘴気を封じているということなのか？

だがにわかには信じられない。

「にわかには信じられないといった顔付きだな」

「！？」

何故、私の考えていることが分かったのだろうか。

というかさつきから何だか、私の思考を全て見透かされているような気がする。まさか先程かけた術のついでに、心の中が読めるようになる術でもかけたのだろうか。

「そ、そそれなら一体、ソレは何だというの？　何でそんなものが存在するの？　それにあなたはここで一体、何をしているわけ？」

何となく意地の悪そうな笑みを浮かべている魔物に対して、つい勢い込んで質問をぶつけてしまった。

「俺はここで種の浄化を行っている。そしてこれの持ち主は……俺と同族の者だ」

同族！　まさか。

「同族って……サラ？」

「何？」

魔物はその言葉に反応した。

「君は、サラに会ったことがあるのか？」

今までそれほど顔色を変えたことのない彼が、初めて見せる表情だった。

それに私は大事なことを思い出した。ここに来た目的だ。

「そうよ。それに私はあなたに訊きたいことがあって、ここに来たんだったわ」

「訊きたいこと？」

「ええ、これを見て」

私は左袖を捲り上げると、装備している籠手を外した。そこには正円形のケーキに、ナイフを上から中心まで一本入れたような紋様がある。

「この刻印がどんな術なのか、私は知りたいの。」

『精霊の加護』には、魔物からの術が効かないって話よね。なのに私たちは、この刻印をつけられたわ」

コレは本物の『精霊の加護』保持者である、アレックスにまで付けられていたのだ。

それ以外での魔物の術攻撃は、特殊能力によって防御している。その場面を何度も見てきた私にとって、これが一番の疑問点だ。

「それにまだ発動もしていないし、未だに何も起こらないのもおかしいし……だからあなたに、このことを尋ねたくて」

私が腕を強く前へ押し出すようにして見せると、魔物はそれをじっと見詰めた。

「これは……この紋様は、君だけが付けられたのか？」

「え？」

私が答えようと口を開いた時、間近で破裂音が鳴った。魔物は直ぐに舌打ちをすると、顔を前へ向ける。霧の球が先程よりも、大きく膨れ上がってきた。

「……やはりここは君に、手伝ってもらうしかないな」

「へ……えええっ！？？」

目の前の状況を全く飲み込めない私は、その場で戸惑うしかなかった。

第53話 浄化作業者1

「何で私が! ? とうかコレ、さっきよりも大きくなってない?」

球体を呆然と見上げながら、私は魔物に尋ねた。そこから流れ出ている邪悪な気配も、より一層強くなっているような気がしたのだ。

「簡潔に述べるとするなら――瘴気が浄化されるどころか、最初に現れた時点よりも、更に大きくなっているということだ」

簡潔すぎて理解できない……。

私の表情に気付いたのか、魔物はひとつ溜息を吐くと言い直した。

「この『瘴霊の種』に渦巻いている高濃度の瘴気……その膨張がそのまま止まらなければ、外側にある霧の結界がこれを抑えきれず、辺り一帯が汚染されるだろう。」

同様に、近辺にある町村の壊滅的な被害も免れないはずだ。

もしそこまで進んでしまったなら、最早俺でも食い止めることが不可能になる」

何か一度に早口で言われ、私の頭の中は混乱していた。しかしフル回転して、何とか整理してみる。

「つまりこの瘴気が大きくなれば、付近でいろいろ大変なことが起こってしまうということなのね?」

「……端的に述べればそうだ。

それにそこから簡単に予測できる事態としては、瘴気に汚染された人々に恐怖心、或いは破壊衝動などが芽生え、町を焼くなどの暴力的行為が横行されるかもしれないということだ。

更にそこへ下位クラスの奴らなども加われば、最悪の状況に陥ってしまうのは必須」

そんな話だけを聞いていても、直ぐにはピンと来なかった。しかしこのまま行くと、大変な事態になってしまいうだろうことだけは、何となく分かる。

「でも何だってこんなことに？ あなたの話では、今まで浄化をしていたんでしょ？」

「そうだ。上手くいけばあと一、二日以内に完了する予定だったが、これは君が招いた事態でもある」

「私？」

「君があのを招き寄せたのだろう？」

魔物はそう言うのと、私の足下に目線を落とした。私も釣られてそれを辿る。

今まで黒い球体のほうにばかり気を取られていて、気付かなかったのだが、そこには大きな岩の塊が一つ転がっていた。

いや、よく見れば岩ではない。魔物の頭部だ。

その周辺もよく見回してみると、黒い布切れのようなもの。

ヌメヌメとした光沢のある赤黒いミミズのような束。

もしかしてこれらは衣服や内臓、或いはその一部……肉片だろうか？

白くて大小様々な破片——恐らくこれは骨だろう——ものなどもあった。それらが折り重なるようにして散乱している。

それに大きな水たまりのような赤黒い液体も、所々地面に乗っている。この場所へ最初に足を踏み入れた時に、何か生臭いような異臭も漂っていたのだが、もしかしたらそれらが原因か。

殆どのものは原形を留めてはいなかったが、唯一頭部には見覚えがあった。私たちを襲ってきたトカゲの魔物だ。

「な……これは……」

私は口を手で押さえながら顔を顰めていた。いくら魔物の死体に見慣れているとはいえ、流石にここまでのものを見せ付けられては、気分が良くない。

「この者はルティナを追ってきた刺客か？」

「ルティナ？ いいえ私……私たちを襲ってきたのよ」

「君たち？ それは『精霊の加護を受けし者』ということか？」

私は無言で頷いた。『私たち』の中には、アレックスも含まれている。嘘は付いていない。

「それはサラの差し金なのか？」

「サラ……なのかどうかは分からないわ、そこまでは訊かなかったし。それよりこの魔物は、どうしてこうなったの？」

傍から見れば、私たちが落ち着いて話し込んでいるように見えるかもしれない。しかしこうしている間にも、翼の魔物は霧の球と繋がっており、引き続き何かの作業をしているようだった。

その甲斐があるのかどうかは分からないが、球は先程膨張して以

降はこれ以上大きくなる様子もなく、小康を保っているような状態だ。しかしいつまた拡大するかは分からない。油断は禁物だった。

「濃度の高い瘴気は、ヒトにとっては毒にしかない。しかし魔族には大気中にある精霊力と同様、術発動用のエネルギーへ変換される」

魔物にはあるが、ヒトにはないもの――。

術士が術発動をするためには、精霊石が必要だ。

しかし魔物はそれに代わるものを、生まれつき体内に宿している。だからこそ術文や精霊石を使用しなくても、術が使えるのだ。

精霊石が変換できるのは、大気中の精霊力と術士本人の精神エネルギーだけである。しかし魔物の場合は、生まれつき持っている精霊力――体内精霊力によって、それらを変換する。

そして更に魔物は、瘴気をも取り込むことができる。これも体内精霊力によって、意識的に蓄積しているそうだ。

下位クラスは獣なみの脳でしかないため、本能の赴くままに蓄積・放出を繰り返すが、中位以上はその能力を上手く利用し、術発動しているという話だった。

より多くの瘴気を蓄積できれば、それだけ強さが増す。その容量（キャパシティー）の度合いによって、魔物の位くらいというものも自然と決まってくる。

——と、無論これは術士講義での父からの受け売りであるが。

「だが多くの瘴気を取り込めばいいというわけではない。

容量以上のものを取り込めば、当然処理しきれずに身体（うつわ）は破壊される。

身体の容量というのは最初から各々、決まっているものだからな」

「まさか、この魔物は」

バラバラに引き裂かれ、方々に散った屍体。ともすれば。

「それ以上のものを取り込もうとして自滅した、成れの果てだ」

彼は相変わらず意識を瘴気の球に集中しながらも、淡々と答えていた。

第54話 浄化作業者2

しかしこの話には、いくつか疑問点が湧いてきた。

「下位クラスならともかく、この魔物は中位クラスなのよ。そんなに簡単に、自分の持っている容量を見誤るかしら」

「万能薬も多く摂取すれば、毒となる」

「え？」

「魔物にとって瘴気というのは、花の蜜や中毒性のある薬と同じようなものだ。だから下位クラスは濃度が高ければ敏感に察知し、本能的にそこへ群れたがる。」

ところが中位以上はそのような場所を、意識的に避ける傾向にある。中には例外もあるが、殆どの奴らには『理性』があるからな」

傲慢でプライドの高い者が、理性を失い自滅する。彼らが如何にそれを屈辱的なことと捉えているのか、人間である私でも安易に想像がつく。

「それにこの場所には、濃度の高い瘴気が漂っている。中位クラスにも人間と同等の感情や感覚があり……どちらかと言えば、人間に近いかもしれないな。故に長く留まっていれば、例え魔物といえども精神を狂わされる」

「けど、濃度の高い瘴気を魔物は、自分の体内にも宿しているのよね」

「魔物は体内に宿る精霊力を使い、瘴気を『エネルギー』に変換して蓄積しているだけだ。もっとも、時々はその残りカス――ヒトにとって不快感の要素が含まれる『気』を、外部へ直接吐き出すこと

はあるがな」

それはもしかして私が、幼い頃に浴びた瘴気のことだろうか。……
ていうかアレって、瘴気の残りカスだったのか。

「話は大体分かったわ。でもそれなら何で、あの魔物たちは平気なの？」

私は上空を指さした。

球体の真上付近で黒や白い目玉が、五〆六体ほど群れを成して浮かんでいる。

先程からずっとここに居るのだが、瘴気に侵されている様子は無い。それに私を保護しているようなものも、見当たらなかった。

「アレらは俺が使役している傀儡（かいらい）『ドラゴンの瞳』」

能力のある中位クラス以上の魔物は、自ら意図的に魔物を作り出すことができる。それは使役目的が主な理由らしい。

例えばスケルトン・キラーがそうだ。その場合は元となる素材が人骨であるが、『ドラゴンの瞳』というネーミングからすると。

「まさかアレって、素材がドラゴンとか？」

私は目玉に視線を傾けたままで、何気なく魔物に尋ねていた。

「正確に言えば、ドラゴンの眼だ」

（そのまんまかいっ！）

魔物相手に、思わずツツコミを入れそうになってしまった。

ドラゴン——確か魔王伝説ではお供として、一緒に生命の樹へ乗り込んだという言い伝えがあったはずだ。そしてトイーズダレマ大陸にある、世界で最も大きな山脈——名称は忘れてしまったが——の山奥に、今でも生息しているという噂もあった。

しかしこれも魔王同様、伝説内での魔物だ。こちらにも実際に見た者はいないと聞く。

ドラゴンというのは上位クラスに属し、巨体で術力も桁外れ。しかも精霊術とは別に特殊能力もあり、千里眼まで持っていると言われる。

そんな強大な能力を持つ魔物が、今でも何処かでひっそりと暮らしているだなんて、私にはとても信じられなかった。本当に実在するのだろうか。時間さえあれば、更に深く追求したいところだ。

「傀儡は俺たちとは違って、大気中の瘴気を自ら取り込むことができな。故にその影響力を殆ど受けないモノだ」

「なら……それなら、あなたはどうかの？ 傀儡でないあなたは、何故平気なの？」

「浄化作業者自らが瘴気に侵されるなど、本末転倒というものだろう。その件に関しては、俺も既に予防線を張っている」

予防線というのはもしかしたら先程、私が彼に触ろうとした時の……あの雷のような衝撃がそうなのだろうか。

「俺に訊きたいことはそれだけか？」

「あ、待って。一番肝心な質問よ。何でこんな事態になったの？ 私がこの魔物を招き寄せたことと、一体何の関係があるの？」

第55話 エリスの選択

最初にこれを訊くのを忘れていたのだ。

魔物は私から視線を外すと、球体のほうへ向き直った。

「魔物が容量以上の瘴気を取り込んだ時、身体は処理しきれずに破裂する。

その時に蓄積されたエネルギーは、霧散後に大気中で——通常ならば自然消滅してしまうものだが、そうなる前に種が取り込み、自身の活性エネルギーへと変化させる」

「種が取り込み……??？」

「簡単に例えるならば、食虫植物のようなものか。

つまり種自身が、瘴気を与え続けた魔物の身体うづわを破裂させ、消滅直前の変換されたエネルギーを瞬間的に、自分の養分として取り込むということだ」

「まさか……」

私は目を丸くした。ただの『種』にそんな芸当ができるとは、とても信じられない。

「これは『そのように作られた』ものだ。

もしこれが外へ出た時に、周辺にいる下位クラスの魔物を取り込み続けてしまったなら、被害はこの付近だけでは済まなくなるだろう」
或いは世界規模にまで発展する可能性がある、魔物は更に言葉を続けた。

「それで、この種そのものを破壊するのね」

「これが一番手っ取り早く、且つ確実な方法だからだ」
彼はただ前を凝視したまま、静かな口調で話している。

「魔物をここへ導いたのは君だが、責任というのであれば、半分は俺にもある。」

何故なら魔物の行動を阻止できず、種に余計な養分を与えてしまったのは俺だからだ。

だからこそ最悪の事態になる前に、何としてでも阻止しなければならぬ」

彼の瞳の中には今まで宿ることのなかった、輝きのようなものが見えた気がした。しかしそのような瞳を持つ魔物など、私は今まで遭ったことがない。

「でも何故、それを私に？」

種を破壊するだけならば、自分でやったほうが早いと思うのだが。

「俺にはこの力を押さえるだけで精一杯。それに周囲を覆い尽くしている瘴気が妨害をしているため、術も届かない。」

だがコレはまだ『完成形』ではない。圧力を少し加えただけでも壊れやすい、不完全な代物だ。君にでも簡単に破壊できるだろう」

「つまり少し力を入れただけでも、直ぐに壊れるということね。……素手でも大丈夫かしら」

「表面上はかなり高温だ。自分の手が燃やされてもいいというのなら、止めはしないが」

じゃあ無理。パス。

「なら私にどうしろと言うの？ 術さえも使えないのよ」

「君は術士なのだろう？ 例え精霊術士だとしても、護身用の武器くらいは持っていないのか」

言われて気付いた私は、ここで初めて腰をまさぐった。今まであまり使う機会がなかったためにすっかり忘れていたが、護身用の短剣を常備していたのだ。

「俺が押さえている間、君はそれで刺し突けばいい」

「でも表面は高温なんでしょ？ 突く前に刃が溶けたりはしないのかしら」

「その前に触れることさえ出来れば問題ない。もともと、その武器は刀身自体が短い。故に少しくらいは火傷をするかもしれないが」

火傷！？

魔物は「少しくらい」と軽く言っているが、高温であるのならそれだけでは済まないような気がする。

「なら、そこを目掛けて遠くから投げつけても、問題ないわけよね。要は当たればいいんだもの」

「確かにそれでも構わないが……その自信はあるのか？」

「ないです」

私は即答して項垂れた。

的となるものは、精霊石ほどの大きさでしかない。まじ

それに自慢ではないが私は学生時代、球技系競技が大の苦手だった。今でも投てき系術を放つ時、手元が狂ったりすることがある。

「どうする？ もしやりたくないと言うのなら無理強いはしない。但しこのまま続けたとしても、浄化完了までの程度の時間を要するのかは、俺にも見当を付けることは難しいが」

このままでは霧が留まり続け、街道の通行止めも当分解除になることがないだろう。

私はこの先へ行かねばならないのだ。目的も当然あり、ここで足止めをされるわけにはいかなかった。

各社を巡る旅——巡礼の旅を、無事に果たさなくてはならない。それが父との最初の約束でもある。

もし今の状態を開ける方法がある、というのであれば——アレックスのように「自分が皆を救う！」などと、大それたことを言うつもりもなかったが——。

「そういえば、あなたの名前をまだ、訊いていなかったわね。私はエリス。エリス・フルーラよ」

「俺は……ゼリューだ」

「なら、ゼリュー。あなたの依頼、引き受けることにするわ」

ここで決めなかったら女が廃すたるというもの。

例え私の手が一本や二本無くなったとしても、世間に見れば、ほんの些細なことだ。

よし、やってやろうじゃないのっ！

第56話 突然のちん入者

ゼリユーは浄化の出力を徐々に上げ、一時的に大量の瘴気を減少させると言ってきた。私はその瞬間を狙って剣を繰り出せばいい。

彼が浄化に集中している間、私は緊張の面持ちでその横顔を見守っていた。

それにしても、と思う。

彼は魔物であるはずなのに、今まで私が出遭った中では、おおよそ魔物らしくなかった。

中位クラス以上の魔物といえば、傲慢でプライドが高く、このように人間の相手を律儀にはしないものだ。そんな魔物に今まで出遭ったことさえもなかった。中にはこんな魔物もいるのかと、改めて驚かされている。

人間にも善人悪人変人などがいるように、もしかしたら魔物の中にもこのように、変わり者たちが居るのだろうか。

「もう直ぐだ」

ゼリユーが呻くように、静かに口を開いた。

私は短剣を抱くようにして、更に強く両手で握り締めている。両掌が汗ばんでいるのが自分でも分かる。堅い唾が喉元を下っていく。

だが。

突如響き渡る叫び声。近くで鳴る轟音。

私は咄嗟に両耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んでいた。

「何故だ！ 貴様っ！！」

再度鳴り響く轟音。それに紛れて発せられた声で、蹲っていた私は反射的に顔を上げた。

そこに飛び込んできた光景は、佇んでいるゼリユーに攻撃を仕掛けている、ルティナの姿だった。

だが彼は顔色一つ変えぬまま、その場で微動だにしない。

事実、ルティナは力任せに何度も拳をぶつけていた。が、それはゼリユーに一度も届いてはいなかった。

彼女もまた先程の私と同様に、激痛と痺れを味わっているはずだ。その上所々破れた服の下からは、赤いものも滲み出しているのが見えた。

弾かれては立ち上がっている。それでもなお激しく、立ち向かっているのだ。

「おおっ、そこに見えるのはエリスではないか」
「ん？」

緊迫した空気の中で、のんびりとした場違いな声が聞こえてきた。ルティナの背後に首を伸ばせば、アレックスとエドの姿が見える。だが直ぐに、エドの様子がおかしいことに気が付いた。アレックスに引き摺られるようにして、ぐったりと肩に凭れかかっているのだ。

「アレックス！ エド！」

私は二人の元へ急いで駆けつけていた。

だが何故だろう。

二人の姿を見た途端、胸につかえていた大きな何かが崩れるように、怒濤の如く喉元にまで押し上がってくる。私は駆け寄りながら、少し湿ってきた目を拭った。

「エドはどうしちゃったの！？ やっぱり瘴気にやられて」

「瘴気？ ……うむ、先程ルティナを追っていたら、いきなり目の前で倒れ込んでしまったのだ。そして気が付けば」

「……ぐー……すびぴ……」

この場所には瘴気の発生源がある。だから明らかにエドは、ソレにやられているはずだ。

———なのに何だ、この幸せそうな顔はッ！！！！

「待つのだ。エリスよ」

私の拳を代わりに受け止めたアレックスが、首を左右に振りなが

ら静かに制してきた。

「エドも疲れているのだ。ここはそつと、休ませてやろうではないか……おや？」

話の途中で手を離すと、顔をゴシゴシと擦り、両目を瞬かせた。

「俺の目がおかしくなったのか？ 君の身体が光って見えるぞ」

「いえ、少しもおかしくはないわ。そんなことよりも、あんたは何故瘴気に侵されていないのよ。それにルティナも」

「うむ、俺ならば心配無用だ。何者にも屈しない、強い信念を持って日々を生きているからな。

つまり邪悪なる瘴気といえども、日頃から鍛錬を積み重ねているこの俺にとっては、取るに足りない存在なのだっ！」

右拳を振り上げ、宙を見据えながらいつものように熱く吠えている。

だが彼をよく見てみれば、通常時よりも流れ出ている汗の量が、明らかに多いような気がした。それに先程握られた私の手も、少し湿っているような？

振り上げた拳も何だか小刻みに震えているような気がするし、碧色の瞳にもいつもの迫力がなく、普段から色素の薄い顔色も更に蒼白気味で——て、まさか痩せ我慢？

「貴様、何故だ！？」

その声で振り向けば、ルティナが悪鬼のような形相で、ゼリユーを睨み付けているところだった。

第57話 復讐と戦闘と

「何故あの時に……父を……母を……何故殺した!?!」

内容からして穏やかではなかったが、彼はそんな問い掛けにも全く動じようとはしなかった。瘴気の球へ身体を向けたまま、ただ静かにその場へ佇んでいる。

「貴様、答えろ! 何故あたしたちを裏切った!?!」

「エリス」

ゼリユーはルティナの問いには答えずに、いきなり私の名を呼んだ。

「君は定位置につけ。直ぐに作業を開始する」

そこには先程までの穏やかさはなく、凍り付くような冷たい響きしか感じられない。こちらを見ようともしていない。

「ツ——サマッ! あたしの問いには答えられないと言うのかー
っ!?!」

ゼリユーに無視されたルティナは、怒りのあまり顔を上気させて、再び向かっていった。が、またもや指一本動かしていない彼に、簡単にはね除けられる。

彼女は私のような新米術士などではなく、恐らくベテランの部類に入るだろう。その彼女が冷静さを欠き、闇雲に戦いを挑んでいるのだ。

彼女とゼリユーの間に、一体何があるというのか。

「エリス!」

先程よりも鋭い声が飛んだ。圧倒的な迫力のある怒声に、私は思わず身を縮める。

動くことができなかった。その声だけで全身を切り刻まれるのかと、本気で思うほどだ。

「……そうか」

ルティナは地面へ血を吐きつけると、先程の激しさからは打って変わったかのように、静かな口調で呟いた。

「貴様がそういうつもりなら」

彼女がゆらりと立ち上がる。

「ならばこちらも既に、もう何も訊く必要はあるまい」

ゼリューを見据えるその瞳には、絶望と同時に何かを決意したような……諦めたような、そんな感情が垣間見えるような気がした。

「お前に」

彼が初めてルティナのほうへ、視線を動かす。

「お前に俺は倒せない。指一本触れることさえできない」

そこに感情は表れない。

あるのは相手を射貫くような眼差し。全てを燃やし尽くすような真紅。

「ならばこれで終わりにしよう」

ルティナは術文を唱えると、左手に風を起こした。

「何度来ても同じだ」

「やってみなければ分からない。それに」

彼女は左の眼帯へゆっくりと、右手を重ねる。

「あんたも知っているはずだ。――あたしの左をなっ！」

そのままの体勢で、ルティナは駆けていく。

ぱさり。

何かが頭上で聞こえてきた。

私はその音に釣られて顔を上げた。

そこには黒い翼が見える。小さなソレは上空を横断するかのよう
に、猛スピードで飛んでいった。

サラの時といい今回のことといい、その傀儡が空中で『浮かんで
いる』姿しか目撃したことがない。だから「あれ程の速度で飛ぶこ
ともできるのか」と妙な感心をしつつ、私は呆然とソレを目で追っ
ていた。

ルティナがゼリユーの元へ到達する直前で、ソレは何の躊躇いも
なく全身から突っ込んでいった。

左眼の眼帯に手を掛け、左拳を上げる寸前の体勢。
突然のちん入者に対して、ルティナの動きが瞬間的に止まってい
た。

刹那。

頭の中が締め付けられるように痛くなった。

耳鳴り。全身の脱力感。

そして籠手下の激痛。

気が付くと私は左腕を押さえ込み、冷たい地面の上で蹲っていた。

第58話 外界

ただ感覚的にいって、ほんの十数秒程度のことだと思う。

それは直ぐに収まった。気が遠くなる寸前で耳鳴りが消え、徐々に力が戻ってくるのを感じていた。

私はようやく顔を上げる。焦点が定まらなくなりそうになる目を必死で堪え、まだ痛む腕を押さえ込みながら、周囲を見渡してみた。

最初に飛び込んできたのは、目映い発光。

ゼリユーが輝きに包まれていた。そして飲み込まれ——瞬間で消える。

まさに消えた。消失したのだ。

輝きが増し、その姿を目視で捉えることが出来なくなった途端、光もろとも煙のように消え失せていた。

私は呆気にとられていた。だが疑問に思う間もなく。

耳元をくすぐるような音。今まで感じられなかった動く気配。頬を撫でるような冷たい感触。

風だ。冷たい風が全身を通り過ぎていく。

周囲もいつの間にか暗くなっていた。だが完全な闇ではない。

徐々に薄くなりつつある星々の瞬きと、ぼんやりとした明るい空。先程まで生い茂っていた木々に葉はなく、そのシルエットを浮かび上がらせている。

(これは……)

今の季節。見慣れた光景に思い当たる。

恐らく外だ。私はいつの間にか『外』へ出ていたのだ。

「う……」

その呻くような声で視線を戻すと、アレックスとエドの二人が並ぶように倒れていた。

「エド、アレックス」

私は這うようにして、二人の側へ近付いていく。

エドは完全に気を失っているようだった。

先程のような安らかさはなく、苦悶の表情に変化していた。しかし呼吸のほうは安定しているので、多分心配はいらないだろう。

アレックスも同様に険しい顔で倒れている。しかしこちらには、意識があるようだ。

「エリス……君は……」

彼は億劫そうに片目を開けると、呻くように苦しそうな表情で視線だけを傾けた。

「私なら大丈夫。それより」

禍々しい気配。これは―――。

私の目は、元凶である黒い球体を捉えていた。

先程よりも大きくなっているような気がする。

宙に浮いていたはずの下先端部が、今では地面にめり込んでいた。

あたかも最初からそこへどっしりと、根を下ろしているかのように見える。

その直ぐ脇では、ルティナが俯せで倒れていた。

動く気配はなかった。もしかしたらエドと同様に、気を失っているのかもしれない。

ここで私はハッと気が付き、自分の手を確認してみた。

思った通りだ。

私がゼリユーにかけられた術は、まだ消えてはいない。だから私だけ意識もはっきりし、起き上がることもできたのだ。

『瘴霊の種』は、まだ残っている。

何故かゼリユーが消え、この場で動けるのは私だけ。

だとすれば。

私は近くに落ちていた短剣を拾うと、腰の鞘にしっかりと収めた。

ゆっくりと立ち上がる。途端、立ちくらみがしてよろけてしまう。が、何とか地面に踏みとどまった。それにまだ少し脱力感も残っている。気を抜くと倒れてしまいそうだ。

しかし今はそれどころではない。このままでは、大変な事態になるかもしれないのだ。

『もしこれが外へ出た時に、周辺にいる下位クラスの魔物を取り込

み続けてしまったなら、被害はこの付近だけでは済まなくなるだろう』

彼の言葉を思い出していた。

私は地面を踏みしめるように歩き出す。

が。

何者かに左足を捕まれ、勢いよく顔面から倒れ込んでしまった。

私は擦り剥けた鼻の頭を押さえると、衝撃で涙の滲んでしまった瞳を後ろへ向けた。

そこにはアレックスがいた。俯せの状態で、私の足首を掴んでいる。

「君は……何処へ……」

彼は荒い呼吸を繰り返し、血の気の失せた顔には大量の汗も流れていた。しかし起こした碧瞳は、私を真っ直ぐに捉えている。

「私は」

その瞳に答える。

「私はみんなを助けに行く」

第59話 一触即発

「それは……俺の役目……！」

アレックスは地面に片手をつき、膝を折り曲げて立ち上がろうと
していた。が、直ぐにまた崩れ落ちてしまう。

「!? ちょっと。あんた腕、怪我しているんじゃないの」

私は初めて気が付いた。

大きな外傷らしきものは見当たらなかったが、その部分だけ内側
から赤黒く膨れ上がっていたのだ。しかも棒状のようなもので固定
されている。

「この程度、俺の根性で……」

コイツ、こんな状態でまだ言うか。

「駄目よ、怪我人のあんたはここで大人しくしていて。あとは私が
やるから」

「だが……ッ」

「あんたにも役目があるように、私にも役目はあるの。これからそ
れを果たしに行くところなんだから、邪魔をしないで」

その言葉に、アレックスは初めて驚きの表情を見せた。

「君の役目？」

「そうよ。私はあの黒いものを壊しに行く。

あれが瘴気を撒き散らし、魔物を呼び寄せている元凶なのよ。

あの中心にあるモノを破壊しなければ、何れ大変なことになるわ」

「大変なこと？」

「今は詳しい説明をしている時間がないわ。ともかく今動けるのは

私だけなんだから、あんたは私がその役目を果たすまで、ここですっかりと見届けていて」

私はそう言うと、まだ何かを言いたげな表情の彼を残し、急ぐようにその場を離れた。

だがその前に、ルティナを救出しなければならない。

瘴霊の種の直ぐ側で倒れているのだ。直に影響を受けているのは間違いないだろう。

先程ゼリューと戦っていた時には、特に変わった様子もなく、普通の状態にしか見えなかった。

しかし今思うにあれば、アレックスと同じように痩せ我慢をしていたに違いない。後から考えてみれば、彼女ほどの腕を持つ術士が、素人同然の戦い方をするはずがないのだ。

私は倒れている彼女の足下付近へ歩み寄ると、両足首を抱えて地面を引き摺るように移動させていく。成人男性であれば抱きかかえて運ぶこともできるのだろうが、力のない私にはこれが精一杯だった。

私とその作業をしていると森側のほうでは、何かの動く気配と、獣の唸り声のようなものを感じた。

一瞬背筋が寒くなる。だが勇気を出し、その方向へ顔を向けてみる。

そこには私の身長の数倍くらいはあろうかという魔物が、のそりと暗闇から姿を現しているところだった。

巨漢である全身は茶色の体毛で覆われ、その鋭爪はひと薙ぎで、人間の身体をいとも容易く引き裂けるらしい。

熊と非常に類似した容姿の魔物、ベアベアだ。大きな角が額に一本生えているので、熊との区別は安易につく。

だがこの魔物、普段は人気のない山奥にしか生息していないと言われている。何処から入り込んできたのかは知らないが、人里のある山間部などには、滅多に下りてこないらしい。

そう言えばもし遭遇してしまった場合には、その場で「死んだふり」をすれば気付かれないという噂もあるが、本当なのだろうか。

しかし実際に遭遇ってしまったなら、そんな余裕は皆無に等しい。それを今、私は身をもって体験していた。せいぜい尻餅について、その動向を見守ることしかできないでいる。

(どどどどどしよう)

今の私では、魔物を倒すことができない。精霊術が使えないからだ。

かなりの心細さを感じている私の心臓は、激しく波を打っていた。全身から冷や汗も吹き出してくる。

魔物は、倒れて動かないルティナの頭上付近に佇んでいた。その鋭爪の届きそうな範囲内には、私も居る。

敵がこちらを振り向けば、完全に目が合ってしまうだろう。ここはやはり今からでも「死んだふり」をするべきなのか。

しかし魔物のほうはこちらの心配をよそに、向こう側へと頭を動かしていた。これほど近い場所に居るというのに、こちらへは一向に見向きもしない。

そういえば先程から、何処か様子も変だ。

低い唸り声を上げてヨダレを垂れ流し、遠くを見ているかのよう
な、完全にイッた目をしている。状態が普通ではない。

それに歩いている足取りも不安定だ。これではまるで――。

魔物が向かっていた先には、瘴霊の種があった。

そうだ。そこへ向かっている。

敵は何の躊躇いもせずに、そのまま黒い渦へと消えていった。

程なくすると、大きな爆発音が聞こえてくる。魔物の入った場所
からは強風が排出され、複数の何かも外へ投げ出されていた。

それは赤い液体だった。

中に紛れていたのは、ミミズの千切れたようなもの。或いは白い
固形物。それらが瀑布の如く、地面へ叩き付けるかのように投げら
れていた。

同時に放たれる臭気のせいで、私の胃の内容物も逆流しそうにな
ってきた。だが大量の唾液を一度に飲み込んで、何とか堪える。

堪えつつも私は、それらが何なのかを即座に理解できていた。こ
れらは先程まで魔物^{ベアベア}だったモノだ。

それだけでもかなりグロテスクな光景だったが、自ら吐き出した
ものを踏みつぶすかのように、黒い塊も更に大きくなっている。

周囲の瘴気濃度も上昇しているのか、気配も一段と強くなった。
それを遮断しているはずの私でさえも、皮膚がちりちりと灼けるよ
うだ。

恐らく魔物はこの気配に導かれて、ここへやって来たに違いない。
ということは、他の魔物も来る可能性が高い。

「……何故」

私はその声で下を向いた。

「逃げた……何故……あの時……殺し……」

ルティナが開いている右眼を地面へ向け、繰り返し何かを呟いている。目は開いていたが、そこに光はない。

「待っていてルティナ。私が絶対に助けるから」

返事をする事がないのは分かっていた。しかし彼女にそう、声を掛けずにはいられなかった。

私は急いで比較的安全な遠い場所——離れた木の根元付近にまで彼女を移動させた。そして黒い瘴気の前へ再び戻ると、目を凝らしてそれを見上げる。

思った通り、最初に見た時よりも何倍もの大きさになっていた。

先程の光景がフラッシュバックとなり、思わず身震いしてしまう。

だがここまで来たのだ。もう後戻りはできない。

私は意を決すると、思い切って足を踏み入れた。

第60話 タイムリミット

黒い風のようなものが吹き荒れていた。

中心にある種が高温だというから、近付くことさえできないほどの熱さなのかと思っていた。

しかし実際に入ってみると、生ぬるい風が吹いているだけである。想像していたような、強烈な臭いも感じられない。

とはいえ、気持ちの悪いことに変わりはなかった。

生暖かい上に粘り気のある風圧が、直に肌へ当たっている。毛穴という毛穴にぺたぺたと貼りついては、隙あらば侵入しようとしているかのようだ。

ゼリユーの術によって瘴気を防いでいるはずだが、全身に鳥肌が立つくらいに気持ちの悪さである。本当にこの術は瘴気のみを遮断するだけで、その感覚までを防ぐことはできないらしい。

だが例え気持ちが悪くても、それは我慢をすれば良いだけだ。近付くことが可能ならば、何も問題はない。

『瘴霊の種』の鈍い輝きは、入り口付近からほど近い場所に見えていた。

距離はそれほど遠くない。あれを破壊するだけだ。

私は急いでそこへ向かう。が、剣を繰り出そうと身構えた瞬間、一陣の強い風が吹き上げてくる。

気付いた時には身体が宙に浮き、外へ吹き飛ばされていた。

それは一瞬の出来事だった。自分の身に一体何が起きたのか、瞬間的には理解できなかった。

全身を強打していた私には、激痛が走っていた。だがそれに耐え

つつ身を起こしてみると、目の前では何事もなかったかのように鎮座している、黒い塊が見えた。

地面には血溜まりと、魔物の残骸が転がったままだ。鼻をつくような、酸味のある異臭も立ち上っている。どうやら服へも付着してしまったようだ。

だがそんなことを気にしている場合ではない。私は自分を取り戻すと、再び中へ入っていった。

が、結果は同じ。

しかしここでも諦めるわけにはいかない。私は間髪いれずに今度は助走をつけつつ、三度中へ入っていった。

「……！　なんでっ！？？？」

またもや同じ目に遭った私は、呆然と地面に座り込んでいる。

吹き荒れる黒い風が私の身体をすくい上げるかのように、いとも容易く三度とも、外へ押し流してしまうのだ。

最初に何故ゼリユーが、周囲の瘴気を一時的に減少させようとしたのか。

ここでようやく、その理由を理解できたような気がする。

恐らくそれは、中で渦巻いている黒風が術だけではなく、外部からの侵入者をも排除するためだろう。

人間である私には当然のことながら、瘴気エネルギーを体内へ蓄積することができない。つまり『養分』を持っていない私は『種』からしてみれば、『不要異物』というわけだ。

「でも何か……何か方法はないかしら」

私は持っている短剣を見詰め、焦りながら必死に考えを巡らせていた。

途端、視界が揺れる。

何かが全身へのし掛かってくるような、重い感覚。私の中に外部から、何らかの圧力が流れ込んでくるようだ。

「まさか」

気付いた私は、自分の手の平を改めて確認してみた。先程まで透明に光っていたものの輝きが鈍く、薄くなっているように感じられる。

『俺が中和して、影響力を一時的に防いでいる。が、およそ三時間程度の効力しかない』

三時間――。

正確な時間は計っていないので分からないが、あれから大分時間は過ぎていくはずだ。そろそろ術効力が切れてしまっても、不思議ではない。

どちらにせよ私の時間も、あと僅かしかないのだ。

「ここまで来たら、あとはもう、やるしかないって言うことよね」
奥歯をギリリと強く噛みしめた私は、改めて球体のほうへ顔を向けた。

こうなったら助走距離を伸ばし、一気に中へ突進していくしかない。

私は決意を込めて立ち上がると、先程よりも距離を置いた状態で剣を持って身構える。そして自分の中では全速力だと思われる速度で、そこへ向かって走り出した。

目標物が見えてきた。

だがその側まで来た時、下から伸びる大きな手が、否応なしにさらっていく。私は抵抗する間もなく、またもやはじき出されていた。しかし。

「……あれ？」

私はまだ倒れてはいなかった。

背中にあるのはいつもの無機質な、堅い地面の感触ではない。

堅いものではあるが、でも何故かそこには温もりと柔らかさを感じさせる。それに私を包み込むようなこれは――。

「！アレックス！？」

背後にいたのは彼だった。

第61話 エリスの決意

瞬間アレックスの身体が傾き、私の上に覆い被さってくる。

「ちょ……っ、アレックス!？」

こちらへ^{すが}縋るように倒れてくる彼を、私は内心焦りながらも背中
で受け止めていた。

一見着痩せして見えるが、彼は立派な成人男性である。日頃から
剣士としても鍛えているし、身長や筋肉もそれなりにあった。
その大きな身体と重装備を、小柄な私が全身で受け止めているの
だ。かなりの重量感である。

「君にだけ……責任を……」

荒い息遣いとともに掠れ気味の低音が、何とか足を踏ん張ってい
る私の耳元で囁いてくる。

「……役目……俺が……」

何を言っているのかあまり聞き取れなかった。もしかすると彼も
ルティナと同様に、既に正気ではないのかもしれない。

「ちょっとあんた、何でこんなところに居るのよ」

既に瘴気に侵されているのなら、立って歩くことさえもままなら
ないはずだ。

「仲間である俺には……君の役目……見届ける義務が……それが…
…今の俺の役目……だ……」

「な、アレックス……あんた」

「俺も……一緒に闘わせて……くれ」

何という信念、精神力だろうか。

私には信じられなかった。それは最早、瘴気を凌駕していると言っても過言ではないのかもしれない。

しかしやはり、こんな状態の彼を連れてはいけないと思った私は、そのことを伝えようと口を開きかけた。が、唐突にある考えが浮かんできた。

「分かったわ。それなら、あなたにも手伝ってもらわよ」

私はアレックスの身体をそのまま背負うようにして、少しずつ歩き出す。

彼は既に自力では立てないのか、抜き身の長剣（ロングソード）を地面に突き刺して支え、杖代わりに進んでいる。

急に私の気が変わったのには訳があった。

その考えが正しいかどうかは分からない。だが私にかけられている防御術が薄くなり、輝きも失いつつある。

既に私の時間も残されてはいないのだ。

それにまたいつ、下位クラスの魔物が現れるかも分からない。もしかしたら、もうすぐ側まで来ているのかもしれない。

「……この俺がこんなザマで……すまない」

私の右肩へ凭れるようにして歩いていたアレックスが、不意に謝ってくる。

「何を言っているのよ、あんたらしくもない。ここで弱気になったら、余計に瘴気に侵されるわよ」

「しかし世のため人のために働かなければならない……英雄であるこの俺が不甲斐ないばかりに、君にその役目を押し付けてしまうことに……」

「言っておくけどね、アレックス。私はその『役目』を押し付けられたなんて、全然思っていないんだからね」

通常であれば、一人で落ち込むことはあっても、他人に弱音を吐くことのない彼に対して、少しばかり腹が立っていた。

「役目とか責任とか義務とか、最初からそんなものは関係ない。それが例え絶望的な状況であったとしても、まだ一筋の光がそこに残っているのなら、私は途中で投げ出したくない」

最初から勝ち目のない戦い方をしたくはなかった。だから私はそのような状況に陥る前に、極力逃げるようにしているのだ。
だがもし、万が一、どうしても逃げられない状況になってしまったなら――。

「絶対に諦めたりもしない。思いつく限りのあらゆる手段を使って、最後まで藻掻いて闘ってみせる」

自分が未熟で弱いのは分かっている。

だが弱者は弱者なりに、プライドを持っているものだ。私はそれを最後まで、捨てたくはなかった。

「ただ自分に出来ることを、目の前にある出来ることから精一杯にこなす。ただそれだけなんだから」

今の状態がまさにそれなのだが、まだ希望は残されているはずだ。だから後悔だけはしたくない。これは私の、精一杯の意地だ。

「途中で諦めない……あらゆる手段で最後まで闘う……か。実に君らしい……俺は君のそんなところが好きだ」

アレックスは『そんなつもり』で言ったわけではないと思う。

当然私にも分かっていた——分かってはいるのだが。

「べっ、ベッベベベベ別に……っ、ちっとも凄くなんかいいわよッ」

私は何となく見られたくなくて、慌てて顔を逆方向へ逸らしていた。

「そ、そそれにッ、それを言うならあんただって。自分の信念を貫こうと、一生懸命努力しているじゃない。

そりゃ、多少暴走気味になるところもあるけれど、それがアレックスだもの。

だから役目を私に押し付けたなんて思わずに、いつもみたいに堂々と、胸を張っていればいいのよ！」

続けて彼は何かを言ったようだが、その声は下から唸る風の音に掻き消されて聞こえなくなっていた。

私たちは既に瘴気の中へ入り込んでいた。ようやく中心へ近付くことができたのだ。

先程までならその風に飲み込まれ、外へ放り出されるところだ。しかし今回はこの場所に留まっている。

やはり思った通りだ。

私一人では、体重が軽すぎたのだ。身体も支えられず、下から吹き上げる風に抵抗できなかった。

もしかしたらそこへアレックス本人と、装備している防具や剣の重量などが加われば、先程よりは多少抵抗できるのではないかと思っただのだ。

実際、彼自身も力を入れ、地面で支えてくれている。それが背中からも伝わってきていた。

ここまで来れば、種は直ぐそこにある。

私にかけられている防御術は、殆ど見えなくなっていた。瘴気も徐々にこちらを侵食しつつあった。

あとは私がまだ正気を保っていられる間に、短剣を突き刺すだけ。

――が。

下から突き上げるように吹いてくる、強い熱風。

それが目の前で腕にぶつかると、弾け飛んだ。持っていた短剣が弧を描くように上空へ飛んでいく様が、私の目にはハッキリと映っていた。

目の前が瞬間的に真っ白になる。

足のつま先から身体の芯までが、一気に冷えていく。

あれを取りに行っている時間は、もうない。

私は目の前で開いたままの両掌を、呆然と見詰めていた。

「……リス……」

耳に当たる吐息。肘に当たる感触で、私は我に返る。

そうだ。

まだやれる。

まだ希望はあるはずだ。

私は右手を強く握り締めると、肘を後ろへゆっくりと引いていった。

しかし。

背中から伝わってくる重圧感。

既に気力を失いそうになっていた私は、それを支えきれず、前のめりで倒れ込む。

私は体勢を立て直すかのように、慌てて彼の手を引っ掴んでいた。

そうだ。ここで何もせずには終わらせるわけにはいかない。

私は夢中で、その手を強く握った。

第62話 アレックスの剣



「やっぱり憶えていないのですか」

私たちはアクニカ村にある、村で一番大きな病院の五階の一室に軟禁されていた。

というと何だか物騒な感じもするが、単に一つの病室へ関係者全員が集められ、扉の外では二人の騎士が見張りのように立っていただけである。

「うむ、そうなのだ」

アレックスは腕を組むと、置かれているベッドに腰を掛け、神妙な面持ちで目を瞑った。

あれからまだ四日しか経っていなかったが、彼の腕はもう殆ど完治しているという。

本来なら全治三ヶ月くらいの怪我らしい。それがルティナの施した応急処置と、精霊の加護能力によって『ヒトの術に効きやすい体質』なため、治りが早かったのだ。

「強力な気配のある場所で、エリスの姿を確認したところまでは憶えているのだが……その後のことが如何せん、サッパリと思えないのだ」

「僕なんて〜ルティナさんを追っていたところまでは憶えているのですが。そういえばルティナさんも〜途中からの記憶がないと〜仰っていましたよね〜?」

「あ? ……ああ。そうだ」

光のあまり届かない壁隅に凭れていたルティナが、初めてこちらに顔を向けた。

あの時に多少瘴気に侵されてしまったとはいえ、意識がハッキリしていたのは私だけだった。

私の身体から瘴気が完全に抜けるまでの時間が、約一日程度。他の三人は二日〜二日半くらい。

大量の瘴気を取り込んでいたとしても、通常であれば半日くらいで抜けるらしいのだが、二日も掛かってしまったということは、あの瘴気がそれだけの量を排出していたということになる。

そしてそれは広範囲にまで広がっていたらしい。しかも話に聞けば、村の中まで侵入する直前だったという。

村外では瘴気に侵された術士たちの暴動まで、起こり始めていたそう。

死者を出す前に沈静化できたからまだ良かったが、あのまま瘴気が消えなかったら大変なことになっていた……と、これは後に駐在している騎士様の一人から聞いた話である。

先に回復していた私は真っ先に、彼らから尋問を受けていた。

しかし私は全てを話したわけではなかった。「気付いた時には現場で倒れていた」ということだけを話し、『モンスター・ミスト』の中へ入ったことは、一切口外しなかった。

何故話さなかったかといえば、後々面倒になることが予想できた

からだ。

もし全てを話してしまったなら、私たちは必ず拘束され、最低でも数日間は強制的にこの場所への滞在を余儀なくされるだろう。

そして中の様子などをしつこく追求されるに違いないのだ。考えるだけでも、ゲンナリしてしまう。

幸いにも『瘴霊の種』とゼリユーの存在していた痕跡は、一欠片さえも残されてはいなかったようだ。ギルドの現場検証で見つかったものは、辺りに散らばっていた魔物の死骸だけだったらしい。

もしかしたら種は全てあの時に碎けて、塵と化してしまったのかもしれない。もっとも、もしそれらの痕跡が見つかったとしても「何も知らない」で通すつもりではあったのだが。

その後回復した他の三人は、昨日個別に尋問を受けていたようだ。ルティナも私と同じように考えたらしく、余計なことは一切喋らなかったらしい。しかし他の二人の尋問は、何故か途中で打ち切られてしまったという。

これは私の憶測であるが、エドはいつものように要領を得ない取り留めのない話を、アレックスは自己熱血陶醉話を、それぞれ延々としていたに違いない。

実は三人の尋問が行われていると聞いていた私は、居ても立っても居られず、その部屋の近くまで行ってみたのである。そして彼らが外に出てきた時、一緒にいた騎士様たち二人の顔が、妙にゲッソリとやつれていたように見えたのだ。

そのせいかどうかは分からないが、今度はマクガレー団長自らが、全員まとめて尋問することになっていた。だから今日こうして、皆ここに集められたのである。

「しかし剣があのようになることは……どうしたら簡単に熔^と

けるというのだ」

アレックスは「信じられない」とでもいうような顔付きで溜息を吐きながら、傍らのベッドに置かれている鞆に視線を移した。

そこには鞆に収められたままの長剣（ロングソード）があった。それは彼が普段使っている、柄に精霊石の詰め込まれた剣である。

「これは我が先祖である『水の精霊（ウンディーネ）』の加護を受けし、英雄が使用したと言われている剣だ。無論手入れは毎日欠かしたことがなく、簡単に熔けるような刃でもないはずなのだが」

あの時。

短剣を失った私は、素手で『種』を壊そうと決意していた。

だが不意に後ろから、完全に気を失ったアレックスが倒れてきたのである。その弾みで、彼の持っている剣に気付いたのだ。

そして倒れる寸前でそれを振り上げ、辛うじて『種』を斬っていた。

いや、斬ったというよりは寧ろ、触れたと言うべきかもしれない。ゼリユーの言った通り、種はそれだけで粉々に砕け散ったからだ。と同時にアレックスの剣も、触れた刃部分だけがすっぽりと、抜け落ちたかのように熔けてしまったのである。

「だが未だに信じられぬ。まさか俺自身がそのことを、全く憶えていないとは。

この前の出来事といい、一度ならず二度までも記憶を失ってしまうとは、何たる不覚！

ディーンの言うとおり、俺もまだまだ未熟ということか。
やはりこれは後の魔王との決戦に備え、故郷で一から鍛錬を積むし
があるまい」

アレックスは拳を握り締め、いつものように熱く何事かを一人で
呟いていた。

が、取り敢えずそれは放っておくとして。

「モンスター・ミストのことだけど……魔物の集まる原因が瘴気だ
ということ、ギルドでは既に把握していたのよね。そのことをル
ティナも知っていたの？」

「当然だ。その手の情報や噂話の類は、最初の発生時から流れてい
たらしいからな。ギルドが断定を下したのは、それから数年後のこ
とだ」

第63話 その理由1

彼女は私の質問に対して、更に言葉が続けた。

「だがギルドが把握できたのは、瘴気が発生しているということだけだ。

その後も調査は続いているが、内部調査ができず、詳しい発生原因も掴めてはいなかった。そのため、正式な発表をされてはいない」

「それじゃあやっぱり、あの中に入ったことがあるのは今のところ、私たちだけなのね」

「そうだ。だからここで事実を吐けば」

「分かっているわ。私たちの巡礼の旅も、ここで終わってしまう可能性が高いっていうことよね」

私は強く頷いた。

もし真実を第三者に伝えるとするならば、アレックスの能力のことも話さなくてはなくなるだろう。

だが事情を知らない者に『精霊の加護』能力のことを話したとしても、果たして直ぐに信用してもらえるだろうか。

それがもし私だったなら、絶対に信じないと思う。例え能力を見せられたとしても、アレックスのことを魔物だと疑っていたはずである。

人間が何の道具も使用せずに、精霊力を発動することは不可能なのだ。もしそれを使う者がいたとするならば、それはヒトでは有り得ない。

それにアレックスだけでなく、同行している私たちまで疑われるかもしれない。良くて故郷への強制送還、最悪では処刑される可能性もあるのだ。

「あたしもここで足止めをされるわけにはいかないんでな」

「それなら、私だって同じよ」

父には、この旅を必ず成功させると約束して出てきた。それを出だしから中途半端な形で、終わらせるわけにはいかない。

「だから、あんたたちもいいわね。『モンスター・ミスト』の中に入ったことは、今後一切、誰にも言わないこと！」

私は二人に向き直ると、強く釘を刺す。

「う、うむ……致し方あるまい」

「わかりましたあゝ」

未だに何処か不服そうな態度のアレックスと、陽気な調子のエド。

実は二人には事前に、そのことを伝えてあった。

その時のアレックスは予想通りの反応で、「嘘を付くのは英雄として、あるまじき行為だ！」などと強く断ってきたのだが、私はそれを説き伏せることに成功している。

名付けて、『口先だけでアレックスを丸め込む作戦』！

彼の反応するであろう単語——リア（妹）、魔王、英雄……など——を会話の中へ随所盛り込み、大袈裟なハッターなども囁ましつつ自然な流れで懐柔する、という戦法である。

因みに、この命名は私だ。

これはアレックスと付き合いの長いディーンが、よく使っている技である。私も時々説得する時に使わせてもらっているのだが、勿論この戦法は単純で頭の固い、彼にしか通用しない。

今回私は「このままでは故郷に戻れず、鍛錬も積みなくなるかも

しれない」というようなことを言った上で、彼が絶対服従するであろう言葉――『リア』のことを持ち出した。

「リアが待っているんでしょ。故郷がどうなってもいいの？」と彼に問うと、途端に『そのこと』を思い出したのか、青ざめた顔であっさりと私の申し入れを受け取ったのだ。

これも以前、ディーンがアレックスを説き伏せた時に使った技だった。

妹のリアは、アレックスが黙って故郷を離れたことに、相当怒っているらしい。

そこでディーンが「このままではリアが何をしでかすか分からない。今帰らなければもう二度と、故郷の敷居を跨げなくなるぞ」というような言葉でアレックスを脅し……いや、懐柔したのである。だから今回、それを少し真似してみたのだ。

エドのほうは直ぐに「パーティーリーダーであるアレックスさんの意見に従います」と、いつもの軽い調子で言ってきたので、そちらの攻略は簡単だった。

とはいえ彼の中ではいつの間にか、アレックスが『リーダー』ということになっているらしいのだが。

「それよりエリス、さっきの話を詳しく聞きたいのだが」

「ああ……うん、いいわよ」

ルティナが何を訊きたがっているのかを察した私は、彼女の元へ近付いていった。

「あの男のことだが……やはり本当なのか？」

「……ええ、確かよ。間違いないわ」

「エリスさんたち、何の話をしているのですか？」

「話なら、俺も聞くぞ」

私とルティナが小声で話していると、いきなり背後から二人が覗き込んできた。

「もしかして、僕たちに聞かれてはまずい、話なのでしょうか？」

鋭い！ 流石は芸術士だ！！

などと感心している場合ではなかった。私は二人のほうを振り向くと、とびきりの笑顔を浮かべて見せた。

「いや、ええつと……そ、そそんなことないわよ……あ、いや、だから……ッ！

そうっ！！

これから私たち二人、ガールズトークをするつもりなのよね。

だからあんたたちのような無粋な男が、途中で割り込んでくるのはどうかと思うの」

「がー……何だソレは??」

アレックスが眉を顰めながら訊き返してきた。笑顔で誤魔化そうとしても、やはりこの言い訳は苦しかったか。

しかし。

「それは大変、失礼致しました。そんなこととは露知らず、僕たちはお二人に、野暮な真似をしようとしていたのですね」

エドは頭を下げて謝ると、戸惑ったままのアレックスを促し、あっさりと私たちから離れていった。彼は見かけによらず、わりと紳士なのかもしれない。

「取り敢えずこれで、何とか落ち着いて話ができるわね」

彼らを追い払うことに成功した私は、額に滲んでいた汗を拭いながら、安堵の溜息を一つ吐いた。

「何なんだあんた、その無茶苦茶な理由は」
何故かは分からなかったが、ルティナが半眼でこちらを睨んでいる。

第64話 その理由2

これからルティナと話すことは、ゼリユーや『瘴霊の種』についてだ。

瘴気に侵されていた二人はゼリユーと面識がないだろうし、『瘴霊の種』についても憶えていないはずである。

だからそれらに関しては、特に説明する必要がないだろうと判断した。

そのため、彼らが同席していると例によってややこしいことになりそうな気がしたので、先に席を外してもらったのだ。

「それあの男が消えたのは、間違いではないんだな」

再度問い掛けられたその言葉で、私は頷いた。

ルティナには事前にゼリユーのことなどを、簡単に話しておいた。彼女が昨日廊下で私の顔を見た途端、そのことについて訊ねてきたのだ。同様にゼリユーを追っていた彼女の目的も、簡単に話してくれた。

「消えたのは確かだけど……でももしかしたら私の目をあざむくため、透過術のようなものを使っただけかもしれないわよ」

「それは可能性として低いだろうな。あの術は狭い空間でなければ成功しない。

それにあの結界はヤツの空間だ。わざわざ透過術を使ってまで隠れる理由がない」

「なら新たに結界を作って、その中に隠れたという可能性は？」

「恐らくそれも低い。何故なら、あの男の近くにはあたしも居たのだろう？」

結界は術士を中心とした一定空間を、外部から遮断する術だ。周囲を巻き込まず、術士本人だけがその中に入り込むことは有り得ない」「だとすれば、他に考えられることといったら」

「瞬間移動術だ」

ルティナは自信たっぷりの態度で、即座に答えた。

「それって、人間には使用不可能な術と言われているわよね。精霊力と精神エネルギーを、大量に消費するから」

聞いた話では、精霊石の限界を超えるので、術発動前に壊れてしまいうらしい。

しかし似たような術なら私も毎日、故郷にいる父との手紙の遣り取りで使っていた。

私が使っているのは、離れた場所にある物体と、手元の物とを入れ替える術だ。別名『等価交換術』とも呼ばれているが、目標物の正確な位置を把握しなければ成功しないなどの制限があるため、あまり実用的ではない。

ルティナの言っているのは、それとは全く性質の違うものだった。

「物体の入れ替え」などではなく、「物体そのものを移動」させるのだ。しかも手紙のような無機物ではなく、生物を遠方の別空間へ、瞬間的に移動させることもできる。

「ヤツは上位クラスの魔物だ。それにサラの血族でもある」

「……サラ、ね」

私は眉根を寄せながら、左腕を掴んだ。嫌なことを思い出してしまった。

「それよりアイツらは一体、何をしているんだ？」

「え？」

ルティナの指さす方向を振り返って見てみると、ベッドに腰掛け
ているアレックスの前で、エドが静かな曲調の音楽を奏でていると
ころだった。多分待ち時間中は暇なので、吟遊詩人としての腕を披
露しているのだろう。

彼はいつものように普通に演奏をしているだけだったが、しかし
アレックスのほうは何故か拳を振るわせつつ、大袈裟に涙を流して
いた。

「あの二人のことは別に、気にしないでいいから」

「……ああ、それもそうだな」

半眼の冷めた視線をそこへ向けながら、ルティナは抑揚のない返
事をする。どうやら彼女にも二人のことが、段々と分かってきたよ
うだ。

「それにしても意外だったわ。まさかルティナまでこの刻印を、サ
ラに付けられていたなんて」
マーキング

彼女は私たちに会う前、サラと遭遇したのだという。そこでゼリ
ューを殺すよう迫ってきたらしいのだが。

「あれはあたしの落ち度だ。……くそっ、ヤツらがグルだったとは
な」

彼女は左拳を右手の平に叩き付けると、心底忌々しそうに顔を歪
ませた。

「ねえ、やっぱりゼリューが消えたこととこの刻印、何か関係があ
ると思う？」

「無論だ。その証拠に、この針が動いている」

ホール型ケーキの中心まで、ナイフを一本入れた状態。その紋様
は変わらず左腕にある。

一見、全く変わらないようにも見えるのだが、明らかにその位置が動いていた。

時計で例えるならば、今までは十二時方向にその線は向いていた。しかしルティナの腕にあるのは、三時方向。私と他の二人はその半分、一時半方向に動いている。

私が討伐隊へ参加する直前に、シャワー室で確認した時には間違いなく、十二時方向のままだった。それはルティナの話からでも確認が取れたことだ。つまり移動したのは、モンスター・ミストの中へ入ってからということになる。

「だからその時の状況を、もっと詳しく訊きたい」

「もっと詳しくと言われても、昨日話した以上のことは何も……」

私は困ったように頭を掻いた。

昨日話したのはゼリユーが消える直前、刻印のある箇所が急に痛み出したということだけだ。私もその痛みに耐えるだけで必死だったし、実際に話せるのはそのくらいしかない。

「それに本当ならこの刻印のこと、後でゼリユーに訊こうと思っていたのよね。彼なら何か知っている感じだったし」

今更過ぎたことを後悔しても遅いが、私はつい愚痴をこぼしてしまふ。

ルティナはそんな私を見ると、肩を落として嘆息した。そしておもむろに視線を逸らす。

「あの時のことを唯一知っているあんたなら、何か気付くかとも思ったのだが……これでまた振り出しに戻ったな」

ルティナは背後から身体を離すと、窓のほうへ移動した。

窓には風が当たり、小刻みに音を鳴らしている。外は厚い雲に覆

われ、今にも雨が降り出しそうだ。彼女は陽差しの全く差し込まない、薄暗い窓ガラスへ背を押し付けるようにして、再び腕を組んでこちらを向いた。

「だが一つ考えられることは、あたしたちがヤツの逃亡に利用されたということだけだ」

「どうということ？」

「あたしたちの精神エネルギーを『瞬間移動術』に利用したということさ。」

あんたはあの時、腕の痛みを感じたと言っていたな。同時に、全身から力が抜けていくような感覚もしたと言っていた」

「そう。この前サラに、紋様を付けられた時の感覚に似ていたわ」

「恐らくヤツはこの刻印を介して、あたしたちのエネルギーを使用したのだろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8376t/>

ゼロクエスト ～第2部 異なる者

2012年1月8日13時45分発行